

A dramatic landscape view from a rocky crevice looking out at a bright sun and clouds. The sun is a large, bright white orb in the upper right, partially obscured by a large, fluffy white cloud. The sky is a deep blue, and the surrounding rocks are dark and textured, with some snow or light-colored patches. The overall scene is one of natural beauty and tranquility.

# 水石、山水石へのお誘い

本多忠三



## ここは、何処でしょう？

ある友人がこの写真を見て【神々のすむところ】と言いました。

---

# 水 石

水石という呼称は、水盤に入れた石に水をふりかけると色が濃くなり、美しく見えるからであるという説と、古来、我が国の公家社会・武家社会の茶席などで、床の間を飾る置物として【山水景を感じ取れる石、つまり山水石】が重用され、伝統文化の一端を担ってきたから、山水石を省略し水石としたものであるという説などあります。

私は【山水石】説を支持したい気持ちです。

昭和40年頃に我が国では“石ブーム”が全国に湧き起こり、好まれる石は山水石ばかりでなくなりました。姿石、紋様石、抽象石などなど。更に、美石といい色彩を愛でる石も登場し、山水石は必ずしも主役でなくなってきました。

さて、幼児体験のせいかと思いますが、私は自然に山水石を好むようになり、それを基盤にして石と交わってきました。

何十年経過したこの頃、過去に水石専門誌に投稿した原稿を元に、矛盾のないようにすべてを改めて見直し、より多くの人に見て戴きたいと願って、纏めました。

2004年10月9日

本多忠三

本稿は、5種の伝承石を見て戴くことに始まり、山水石の将来を憂いながら、暫くして【本論】に入ります。

【本論】は、一貫して室内で鑑賞する石に対する人間は、人間が持っているどんな機能を使うか、また、どんな心理を使うかなどを考えて書いています。

この考え方は、過去の水石界で行われたことが無かったでしょうから、考え方・用語・記述など耳新しいものが出てきます。

【本論】は[18.立ち石]で終わります。

続く[19.深山]から[54.矢合川石6]までは、私が所有している、又は所有していた色々な石の写真を載せ随意に書いています。

更にその次は最終グループで、[雲と空を入れた写真集]になります。

最初は【雲と空入り大八洲】に始まり、続いて全部で78枚あります。

---

# 目次

---

1. 山水石	〔伝承石〕に始まり水石、山水石の将来は？	8
2. 序言と大八洲	瀬田川の産。梨地肌の真黒石。 抜群の川擦れしていて、 素晴らしい曲面で包まれています。	17
3. 大和	これも瀬田川の産。底部を含み全部天然のまま。	19
<b>【本論】 水石なるジャンルの石は…</b>		21
4. 遠近感	石を見るのは二つの眼球ですから視覚について考えを進めます。	23
5. 山水石を見る	石を見下ろして鑑賞します。 見下ろして、あの高い山を感じられるには？	25
<b>人に観て貰うものは</b>		26
6. 左右の「逃げ」	左右に長い山水石で、両端が後方に逃げている事を 「逃げ」と言い、逃げは歓迎されません。	27
7. 一つの実験	カメラのレンズに高さを石に底面の高さに合わせて、 石に正面からと裏面からと撮影。	29
8. 逃げを感じる	石に逃げを感じる理由は、石を上から見下ろして 鑑賞するからです。	31
9. 石を鑑賞する状態	石を鑑賞する時は、地板または卓などの上に載せます。 これらは空間を感じさせます。	33
10. 注視すること	人は興味を持った物を注視します。 この時視野角度は狭くなり、視界中心部の印象が強く残ります。 注視によって強く残った中心部の印象は、石の中心に集中して いる感じを与える〔かたち〕を好ましいと思う結果を招きます。	35
11. 集・中心的の具体例	石の中心に集中している感じを与える〔かたち〕の具体例。	37
12. 平野を持つ石1(土坡石)	山水石には山を感じるのみでなく、主に平野を感じる ものがあります。	39

---

13. 平野を持つ石 2 (段石) .....	平野を感じるものの中で、何故か段になっているものが 市民権を持っています。	45
14. 集・中心的の意味 .....	集・中心のかたちの石の写真をコンピューターで 変形させ集・中心的でなくしてみました。	49
<b>平野の役目は</b>		51
15. 平 野? .....	山水石を考えるに [平野] を人はどのように 感じてきたかを考えます。	53
16. 平野の纏め .....	平野を足下に平に広がり、遠くに真っ直ぐな地平線を 持った平面と感じているのです。	55
17. 下を向いて歩く人間 .....	おおかた下の方向に視線を定めて人は歩き、歩いている 人の眼の視野の隅で高い建物と山々はどう見えているか?	59
18. 立ち石 .....	殆どの山水石は横に長くなっています。 縦に長い石は何に注意したら良いのでしょうか。	63
<b>結 論</b> ここで結論は終わりです		65

---

19. 深 山	上部の主峰の頂点あたりを叩くと金属音を発し、 硬い様子がかがえます。	67
20. 愁 風	溜まり石とは、[水が溜まる石] の意味。 言ってみれば湖のようなものを・・・。	69
21. 雨宿り	この石は、上下をひっくり返すと何と山形の一種になります。 右の写真 15 がそれです。	71
22. 深 遠	この格好は人間技の及ぶものではありません。 全く不可解なかたちの石です。なおこれは表紙の石です。	75
23. 庄 屋	屋根の芯が明確で、ひさしが真っ直。茅舎としての 雰囲気抜群。私が持っている茅舎ではこれが最高。	79
24. 文明開化	当時に出版された本に [文明開化] なる銘で掲載されていて、 銘は故 小林宗閑さん。	81
25. 花 舞	前から【サバ菊】が手に入ると思っていなかった私は、 これを買えて幸せ。	83
26. 座 馬	誰が見ても、馬に見えることと、何となく若い馬に 見えるのが良いです。可愛いので…	85
27. 瑞 稜	瀬田の真黒の感じは、瀬田独特のもの。 それは、硬質であり、高密度を感じさせています。	87
28. 悟空峰	孫悟空しか登れない山とみて【悟空峰】と銘じました。 右側の低い方の峰を主峰と見えています。	89
29. 白倉谷の石	揖斐川町の上流に白倉谷なる谷を持つ山から 揖斐の青石・青黒石が出てきたという説があります。	91
30. 大 観	稀代の名品ではないかと、ほくそ笑むことがあります。 今もこの石の住所は私の枕元です。	93
31. 員弁自採石	川に降りてすぐに、足下の砂の中に埋もれた質の良い 石を見ひっくり返したら、この山でした！	95
32. 光 悦	何でもない河原に転がっていました。 石探しに疲れて車に帰る時に足下にあるのを発見。	97

33. 枯れ瀧	底は真っ平らで座りもこのままの姿。 拾った時はまだこの石の良さがわからなかったようです。	99
34. 萌	去年（2003年）揖斐川で発見。 山の格好が良いと台に載せて貰いました。	101
35. 探石第一号	この緑を主体にしたこの質が、土岐川・庄内川には 珍しいと私は思っています。	103
36. 高溜り	台は、浜松市の鈴木さんです。 鈴木さんは洒落た感じの台を作って下さいます。	105
37. 武蔵岳	蟹真黒らしきところもあり、また別の質のところありで、 実にユニークな山岳感をしています。	107
38. 松川山	それでも、それでもと歩いていたら、 足下にこの石があるではありませんか！驚きです。	109
39. 庄内黒山	庄内の真黒石とは、梨地肌が全てと思われていますが この石は違います。その上、硬質です。	111
40. 久 遠	良い格好をしています。沢山の庄内川石の切断をしましたが、 この石以後庄内川石の切断はしていません。	113
41. 主部 副部	主峰側が地面に踏ん張っている格好をしていれば、 副峰側は浮いていても平気のようです。	117
42. 招 月	瀬田川では、この石のように変化の多い石を何故か [蓬石] と言います。	119
43. 崎 橋	大変な硬質で叩くと美しい金属音を発します。 昔は、揖斐川にもこんな質の石があったのです。	121
44. 香 流	名古屋市に[香流]と書き(かなれ)と読む川があり、 美しい響きなのでこの石の銘にしました。	123
45. 飛台・天空台	天空台 上部の平面を支えている平面の下部のおもむきに、 変に魅力を感じるのは、何故でしょう。	125
46. 小宇宙	これを展覧会に出品すると、評判が良いです。 見どころが多様で、視線がさまようからでしょうか。	127

---

47. 豹 点	据わり良く、洒落た感じで気に入っています。 台に載せない方が締まった様子で、素晴らしいです。	129
48. 天 空	山水石の何形と言う分類に入りませんが、 何か自然の風景の感じがしています。	131
49～54. 矢合川	三重県四日市市の近くの川です。 個人的に一時夢中になり石を得ています。 ご覧ください。	133
付 録	〔雲と空を入れた写真集〕	146

---

# 山水石

## 伝承石と山水石の将来

一個の石を水盤に入れたり、木でぴったり合う台を作るなどして、部屋の中で見て楽しむ石のことを何故か[水石](すいせき)と称しています。

水石なる呼称は、どのくらい古くから使われていたかについて、はっきり知りません。

表紙の記述の繰り返しになりますが、水石という呼び方の説明には、[山水石]の省略であると言う説と、石は水をかけると色調が濃くなる為「石は水をかけて鑑賞するものである」と言う説とがありますが、呼称はともかく、石を室内で愛でる趣味は、日本に古くからあったという記録があります。

明治以前の時代の石について色々述べられている[伝承石]という本(著者：高橋貞助／発行：石乃美社・1988年発行)を元に、少し書いてみましょう。



### 【夢の浮き橋】

名古屋市にある徳川美術館に【夢の浮き橋】という石が蔵されています。

これは、中国からわが国にわたり、最初足利将軍家のものだったとのことですが、南北朝時代に後醍醐天皇の蔵するものになりました。

天皇は戦乱のさ中にも身から離さず、笠置、吉野に行幸の際にも常にこれを懐中にして、憂悶をなぐさめられた、と[本・伝承石]に書かれています。

石の底に[夢の浮き橋]と朱漆で銘が書かれていて、古筆家は、天皇のご宸筆であると鑑定しました。

銘の由来は、石の両端のわずかな部分のみで安定し、底部の隙間を2、3枚の紙を通すことが出来るので【夢の浮き橋】と銘じられとされています。

護身用としても使われたと言われ、興味深いものがあります。

[伝承石]なる本では、わが国の石の趣味の歴史は、室町時代の五山の禅僧たちによって開かれ、その時代の僧侶は詩文に長じ、海外文化の紹介者でもあり、当時の中国の南宋は、石の趣味が盛んであり、南宋に渡った彼らが石への好みをわが国にもたらしたものであろうと推測しています。

また、後醍醐天皇(1288～1339)と同時代にいた五山の高僧の一人(虎関師錬)が石への詩文を残していて、共に石を好んだともいわれています。

この石は、その後、幾多の戦乱をくぐり抜け、後に、秀吉、家康を経て、尾張徳川の所有になったという、幾多の紆余曲折をへた石です。

かたちは、現在[土坡石](どはいし)と称している類に属します。

つまり、山であろうか、高台であろうかと思われる隆起を左端に持ち、平野のようなもので、広がりを感じさせているもので、まあ、風景の一部を象徴していると見るべきでしょう。



### 【末の松山】

この石、【末の松山】の言い伝えは、中国揚子江の沿岸、鎮江の金山寺から渡来し、当時、相阿弥が、唐に渡る禅僧に命じて取り寄せたと言われています。

後醍醐天皇没後145年経った文明15年(1484)、足利義政が東山の月待山の麓に東山殿を作ったときに献上され、義政の所有になり、後に織田信長の手の中になったと書いています。

現在、西本願寺の[寺宝]になっています。

その由来について、興味ある話が書かれています。

本願寺は、もと現在の大阪城本丸の跡にあって[石山本願寺]と呼ばれていました。

信長は、戦略上重要なこの地を手に入れたいと望み、寺を攻めましたが、全国の門徒が団結し十一年間の攻防を経ても落ちない為に、やむなく天皇に上奏して和を乞い、勅が下されて天正八年、ようやく兵をおさめたと言います。

この時、信長から寺に[呉器一文字茶碗]とこの【末の松山】が贈られて、石山城と交換したと伝えられている、と信じられないような話が書いてあります。

石の底部は切つてあると書かれていますが、このように見るからに硬い石を切ることは、当時大変な仕事であつたでしょう。

石から山岳を感じたいが為に、大きい努力で切断までしたことに見られるその時代の石への価値観に、もう一度目を向けてみて欲しいと思います。

また、この時代の石は、茶会の床に使われていたと書かれていて、当時の上流武家社会で、茶の道と共に、石は或る種のステイタスを示す役割をしていたようであると考えられます。



### 【黒髪山】

この【黒髪山】は今(1988年)から約200年前の寛政年間に、日光の東照宮修理の時、松平定信が職務のいとまに、日光の山中を逍遥していた折に、ふと発見した石であると書かれています。

また、後の画師、鋏形恵斎によって書かれた[黒髪山縁起絵巻 文化十年]によれば、幕府お出入りの豊大工・中村弥太夫が、国初潭海という本で日光に名石があることを知り、度々探索した結果、日光寂光権現の近くの民家に秘蔵されているのをつきとめ、数年に亘って交渉した結果、家伝の太刀と引き換えにしてようやく手に入れたとも伝えられています。

後に松平定信に請うて[黒髪山]の銘を得たとのこと。

そして、後に定信より徳川幕府に献上され、幕府より上野の寛永寺におくられて、以来寺宝として大切にされていたが、明治維新の彰義隊の戦いで、一時物置に入れられたまま行方不明になり、寺でもその存在すら忘れられていたという話です。

石の台も現代のものとは趣が違っているし、大変念入りな仕事の箱に入っており、絵が描かれた由来記二巻があると言われ、当時いかに大切にされていたかがしのべれます。



### 【大和群山】

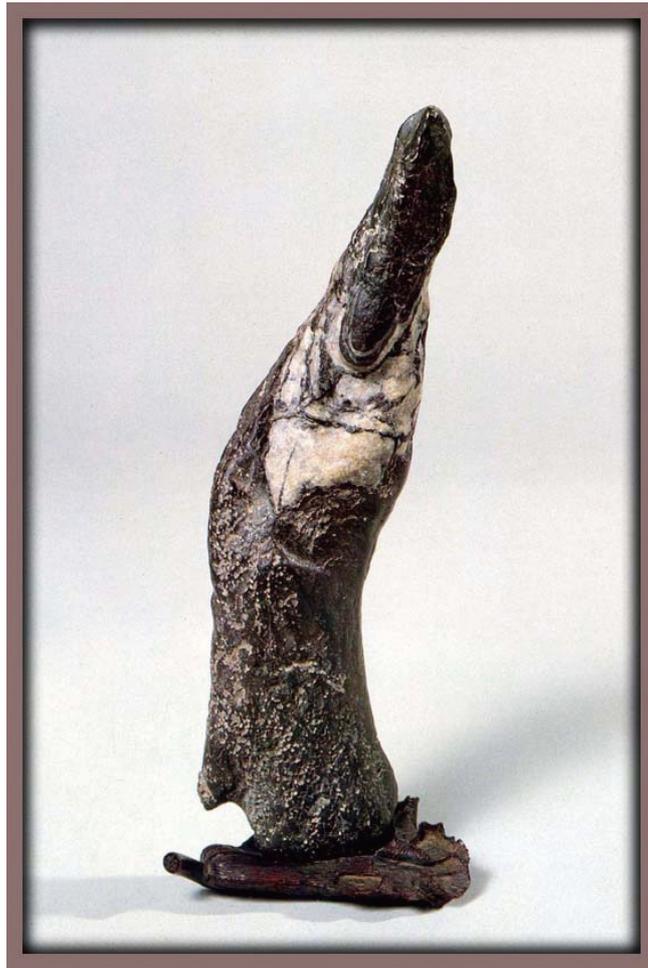
[やまとむらやま]と読むこの石は、頼山陽が残した数多い石の中の代表格の一つです。昔はこのような具象的な山水景の石が天然にあったのかと羨ましい思いがします。話によれば、京都で日本外史を執筆しながら、大原女の持ってきた石を全部手間賃で買い取り、気に入らない石は裏山に捨てたと言われている、こうした石の中にこれがあったのでしょうか。山陽以前の石は、一部の高貴な人々や、かぎられた人たちのものであったようです。この本に、若い頃に藩籍を脱し、世に自由を求めた頼山陽によって、今まで縁遠い一般市民にまで石が広がったことは、特筆すべきであると述べられています。但し、この石を[作り石]であると言う業者氏はおられます。さて??

写真で見る限りでは、山の頂点の辺りなどに、磨かれた肌の感じがした部分が見られます。故に、この部分のみで考えれば、全くの天然の肌でないことを否定できません。であれば「かたち」を変えることもできたかも知れません。

しかし、あの時代にどうやって磨いたのかを考えるだけで、その仕事をなさったお方の根性と結果の見事さに感動してしまいます。そして、お見事!の一語に尽きる思いに至るのです。現代にも「作り石」と称して、グラインダー、サンドブラストなどの機械を使った全くの作り石というものがあります。多くのそれらは、妙なことに存在感の無いものが多いのです。その上何故か品位が無く、印象に残りません。

これは、機械により[かたち]を変えることが容易に出来るので、楽な作業になり、安易な気持ちで仕上げをなさるからで、結果として「心又は魂」のこもったものにならないからでしょう。

この【大和群山】は、存在感、品位、印象に於けるインパクトに問題はありません。問題ないどころか、それらに卓越しています。故に、作り云々を言って軽視することは適切でないと考えべきです。それより、現代に於いて[石で山水景を思わせる]石の原点の役目をしていて、今なお新しい感覚の一端を感じさせるものであり、この古い時代にこれが登場したのは、我々にとって恩恵であったと言うべきであると私は考えています。



### 【観世音立像】

【観世音立像】と銘じられたこの石は、頼山陽が残した石。それらの中で、最も有名なものの一つと書かれています。今参考になっている[伝承石]なる本に載っている石は162種ですが、中の14種が人間か動物かの姿を髣髴させる、世に言う[姿石]です。

石に初めて出会う人の反応を観察していると、こちらが「山水石」と思っている石を見せても、何か生き物の姿を見出そうと努力するのをよく見かけます。

人によるでしょうが、どうも、現代の人たちは[山水石]より[姿石]の方により敏感のようです。

この[観世音立像]は、昔の加茂川の夥しい石の中で発見できたのでしょうか。山水石ばかりが喜ばれていた時代に選ばれ登場した姿石だけに、何とも高雅な雰囲気漂わせています。

さて、この本に掲載されている石の、90%が、山水景を感じる石です。

---

頼山陽以前で、山水景以外の石を見ることは殆どありません。

私が石にのめり込んだのは、山の格好をした石を友人宅で見せられた瞬間に、好きになって、それを手元に欲しいと思ったのを契機にしています。

自分が生まれ育った場所は尾張平野の中央の田園地帯です。

子供の頃、夕方、西の夕日に映えた三重県の鈴鹿山脈から、雁が群れをなして北の長野県にある山岳へと空を飛ぶのを、夕日を浴びて田圃の藁の上で寝そべって眺めていた幼児体験で、「山がふるさと」のように深く心に根を下ろしているからと考えています。

幼児体験に自然の体験が少ない現代の人たちは、それ故に、[山水景を連想出来る石] より [姿を連想出来る石] に感度が強いと私は感じています。

自然の中で、自然と共に生きてきた昔の人たちが、山水石に敏感であったのは普通の成り行きであり、伝承の石が山水景ばかりであるのは当然の結果です。

突然に話題が変わりますが、ヨーロッパには、日本より寒い国にも大きい文化がある例が多く見られます。彼らの住居は、自然と対決しているかのように堅牢に出来ています。

昔の日本の住居は木で出来ていて、自然を感じ易くなっています。

雪の降る日に、寒さにもめげず障子を開け、侘びの世界に浸ったかもしれず、当時の日本人は、自然との融和が生活の根元にあったと考えて良い、と私は思っています。

厳しい自然と対決して暮らした西欧との違いはここにもあるようです。

しかし、今でも西欧では「緑」を大切にして生活しているのに、日本は、開発なる行いで自然を粗略に扱ってきました。近頃になり急に自然破壊を戒める話がありますが、これは何と愚かなことでしょうか。

---

ともかく日本は、機械化、ハイテク化に走りました。

何も疑わないかのように。

外界を感じにくい強固な壁面に守られた快適なマンションに住み、走り回る車を避け、ビルの谷間を歩き幼稚園・学校に通って育つ現代の日本の子供たちに「自然」はどんな風に映っているのでしょうか。今の日本は、その昔、大自然に育まれて生きてきた人間の生活を見すごしているかのようなのです。そして、先祖の皆さんの原点であった[大自然]を見失ってしまったらしいのです。

かくして日本の[山水石]は終焉を迎えようとしています。

この育ちと生活をしている子供達の将来に[山水石]に心を動かす事になる要因を見出すことは出来ないと感じています。

このように考えると、現代の日本で[山水石]の終焉は避けられません。

しかし、そうであるから、見えない行く末に思いを馳せ、将来の何方かに読んで戴きたいと、ここで、私は集めた石の写真を載せ、[石を観る] ことに関し、私が到達し得た事を述べて行きたいと考えるに至りました。

水石、山水石へのお誘い…



---

# 序言と大八洲

## 【序 言】

私は、この本で、先ず【水石の鑑賞】について、そして更に【水石】について、私の考え方を説明します。

この考え方に関する記述は、【本論】に始まり【立ち石】の中の【結論】で終わります。

今まで【水石に関して述べられてきた記述】と異なった視点に立ったものだから、馴染み難い面があるかも知れません。

しかし、水石が【鑑賞物としての資格】を認められるために必要であろう条件を述べています。

お読み下さり、参考にしてくださると有り難いと思っています。



写真1 [左右 58cm]

## 【大八洲】

では先ず、はじめに私が所有できた石を二つ見てください。共に瀬田川の産で、この【大八洲】と次の【大和】です。この【大八洲】は梨地肌の真黒石で、部分的にツルツルに川擦れしていて、梨地肌と混在しています。写真で正面に見えている側が梨地肌で、反対側つまり向こう側はツルツル。恐らく、川にあった時に、梨地肌の部分が埋まっていて、ツルツル側のみ擦れたからでしょう。瀬田川は昔から、琵琶湖より流れ出るただ一つの川であり、落差が大きいので、激流で有名。この石を叩くと美しい金属音を発するため、硬い石であるのは疑えません。激流とは言えよくもまあこんなに硬い石が擦れるものだと感心です。この【大八洲】は素敵な格好の山を感じさせています。瀬田川石の特徴の一つに「流れるような曲線、又は曲面」があります。激しい水流がこの曲線・曲面を作ったという説が主流ですが、私は水流の力ばかりでないのではないかと考えています。何故ならば、瀬田川の周辺の土中から出たらしい石をワイヤブラシで擦ると限りなく埃状のものが出て、更に擦り続けると段々と石は減ります。毎日根気よく擦り続けて、丹念に観察すると、何と減り易い部分と減り難い部分とがあることに気がきます。減り易い部分を手が痛くなるのを我慢して更に擦ります。するとおしまいに、なだらかな曲面に仕上がる場合があるのです。

つまり、瀬田の石には最初から石自身の成分の組み合わせにムラがある部分があるらしい、又は、空気・水などによる浸食の度合いが異なる部分が混在しているからムラになるらしいと考えられるのです。砂を伴う激しい水流によって、このムラが絶妙な曲線を作る原因の一つになっていると考えるのもおもしろいと思っています。さて、この石の底部は切断ではありません。天然の儘です。いつも観る度に、よくもこんな具合の良い石があるものだと感心してしまいます。購入したのは名古屋にあった石のお店[奈古埜]、私が持っている石では最高額を払っています。

入手して30年くらい経った近頃(2008年)、黒色が深い感じになり、言うところの[持込の味]が良くなりました。石は地球の上で何十億年なる歳月を経ています。それを、たかが何十年の命しかない我々人間の手元に置ける幸せを思うと、石に申し訳ないような気持ちになるのは変でしょうか？この石は【大八洲】と銘じ、1999年に京都市建仁寺で行われた九十九会に出品しています。奥の大きい床の間に飾らせて貰えて、想像以上の好評を得ました。この時、この石が産地の何とかという人の納屋に置いてあったのを知っている人がいました。勿論石好きの一人。その人は『こんなに良くなると思わなかった』と云っておられました。



写真2 [左右 32cm]

## 【大 和】

これも瀬田川の産。【大和】と銘じて喜んでいるこの石も、底部を含め全部天然。

底部は、凸凹、くねくねし、座りは良くありません。

この石は東京の盆栽会館の即売場で、或る業者の人から、かなり安価で入手できたものです。安価であった理由は、この不安定とも言える底部のせいでしょう。何しろ石だけで見ていると、台が作れるなどと思えないからです。

写真で見られるように安定した感じに仕上がったのは、台の出来が良い事にあります。台を作ったのは、名古屋市に住む台製作者[原田さん]。

この原田さんの熱心さで始めてこの石は立派になったのです。瀬田川には、実に色々な質の石が出ます。真黒系で多いのは、梨地、花吹雪、蟹、豹点などあり、真黒系以外では虎石、蓬石などが有名です。

虎石は、真黒石質の層と黄色の質の層が交互に重なって出来ていて、断面を見ると虎模様に見えるから虎石と言われています。

普通は、黄色の層のほうが真黒の層より風雨の侵蝕に強いものらしく、出っ張る傾向があり、結果として凹凸になります。この性質が表面に微妙な変化をもたらすために、石好きの諸氏を喜ばせるものとなるのです。

この石は虎石の一種。見付け左端に見えるように、真黒部分が蟹真黒になっている珍しいもの。また、黄色の部分は本来の虎石独特の黄色の肌もあるものの、石の上部の黄色の部分は金梨地肌になっていて、これは二つと無い珍しいものです。

これと黒の部分とが交互になっていて、この状態の虎石は他に見たことがありません。随所に見える[流れるような曲線・曲面]は、瀬田川の擦れを感じさせています。しかし、表面を手で撫でるとザラザラした感じで、最近まであの激しい水流の中にあつて、激しい水流で擦れていたとは考え難いものです。

恐らく、大昔に川で擦れて後に、永く土中に埋まっていた石であると見るのが正しいようで、この種の石を瀬田川では[沢石]と称しています。

表面がザラザラしていることと、ワイヤブラシで擦ると埃が出るから故に、この格好良い石は、加工品と考えるわけにいかないものです。

かたちは、典型的な山形です。

山の頂点から流れるような下り坂を、面で表現できている石は珍しいとも言えます。

昔、名古屋にあったある業者をして『この石は作りものだ』と言わしめました。

その人は、何しろ格好良い石は何でも作り石、と言いたい人のようでした。

また、この人は、ご自身で時に加工も好んでしておられました。

時に加工をもしていた彼は、天然というものは不可解で予想を絶するかたちを作るものであると言う事を体験していなかった人であったように私は思っています。

この先、天然の不思議さを感じる沢山の石が登場しますが、最初に取り敢えず【大八洲】【大和】という2個の瀬田川石を見ていただきました。

更に、色々な石をお楽しみ戴きたく思っています。

まずは【水石】又は【水石の鑑賞】に関して、私の考え方の説明に移ります。

この考え方に関する記述は、次に続く

【本論】【遠近感】【山水石を見る】【左右の逃げ】【一つの実験】【逃げを感じること】【石を鑑賞する状態】【注視すること】【集中心的の例】【平野を持つ石1土坡石】【平野を持つ石2段石】【集中心的の意味】【平野?】【平野の纏め】【下を向いて歩く人間】の10項目をを経過して【立ち石】の【結論】[忘れてはならないお話]で終わります。

少々お硬く、時に細かい説明に入ったりして、その上長いですから、ご面倒に思われたら、【18.立ち石】の【結論】と、その先とを読んでみて下さい。

そして、疑問が出ましたら、【本論】【遠近感】【山水石を見る】【左右の逃げ】【一つの実験】【逃げを感じること】【石を鑑賞する状態】【注視すること】【集中心的の例】【平野を持つ石1土坡石】平野を持つ石2段石【集中心的の意味】【平野?】【平野の纏め】【下を向いて歩く人間】【立ち石】の中に、疑問の解答があるかも知れませんのでお読み下さい。

---

# 本 論

---

さて、ここから本論に入ります。

まず、【水石なるジャンルの石】に関して述べることから始めます。

主に室内で鑑賞する水石なるジャンルの石は「一個の石で何かを感じられるもの」と言えば良いのでしよう。

- [1] 人の姿とか動物などの姿を感じるものを「姿石」
- [2] 石の表面に現れた紋様を愛でる石を「紋様石」
- [3] 石の持つ色彩を喜ぶ石を「色石」「美石」などと称しています。
- [4] それらの中で、山水石は、一個の石で「大自然の風景」を連想できる石と言うべきです。

「大自然の風景」を連想できる石である山水石を

「大自然の風景の一部を切り取ったもの」または  
「大自然の風景の一部を模したもの」と考えるのは間違いである。

と、私は考えています。

この考え方を説明する簡単な方法を思い付きません。

故に更に根本的に考え直した方が良いでしょう。

従って、石を見るのも二つの眼球ですから、先ず、視覚に関して考える事から始めます。

視覚について考えたいという理由は、

1. 子供の頃から大人になる成長過程、及び日々の生活で「視覚を通じた経験」によって私たちの心に刻みこまれたものと、
2. 祖先の数多の経験を元に遺伝子に組み込まれたものを我々が受け継いだものと、が関係しています。

石を観ることによって感じられる「風景感」は、「脳味噌の中で、1.と2.とが双方共に働いて、集約された結果、作り出されるイメージに於いて風景感となっている」と考えています。

そこで、まずは視覚について見過ごしてはならないものがありました。

---

# 遠近感

---

二つの眼球で、身近なものの、遠いとか近いとかを認識している事は有名です。

まず、右の眼を手で覆い左眼だけで目の前の身近なものを見て下さい。

次に、左の眼を手で覆い、右眼だけで同じものを見て下さい。

この右眼だけで見える格好と、左眼だけで見える格好とでは、見えた格好が違ってきます。

殊に、鉛筆を顔に向けて(両眼に直角に)置いて見て下さい。右眼と左眼とでは鉛筆の違った面を見る訳ですから、全く違って見えます。

つまり、ずれています。

しかし、両眼で見ると二重に見える気がしないのが不思議です。

この不思議は、結局ずれた二つの映像を脳味噌が[多くずれた映像をより近いもの][少しずれたものをより遠いもの]と経験で覚えて距離を認識している為に、ズレを生々しく感じる度合いが少なくなっていると考えるのが正しいのです。

この左右の見え方のズレを[視差]と言っています。

顔についた二つの眼の距離は何センチかですから、遠い距離になるとこの視差、つまり[ズレ]は無くなってしまいます。

この現象で身近にあるものに遠近感を感じ取っています。

これは、スリーD映画が成り立つ原因でもあります。

学問で何メートルから視差が無くなるとされているかを知りませんが、数メートルを越えれば、視差は役に立たないであろうと思っています。

でも、我々は数メートルを越える距離でも遠近感を感じない訳ではありません。

例えば絵画などで、遠近法というのがあり、眼の前に遠くのびた道路は、遠くになるに従って細くなります。

当たり前のことですが、同じ長さのものが左右に横たわっていた場合、近くのは遠くにあるものより大きく見えことを体験で知っています。

この手の体験も、より遠くの遠近感を得るのに役立っているでしょう。

---

## 山水石を見る

ここで、石を鑑賞する場面とは、どんな様子のものであろうかを思い浮かべましょう。

まず、鑑賞は部屋の中で行います。

鑑賞は、石を水盤又は台に載せ、それらを卓(シヨクと言ひ、小型の机のようなもの)とか  
地板の上に置いて行います。

ここで一番見逃してはならないことは、人は石を見下ろしている事です。

普通何気なく見ている[上から見下ろす見方]は、既に長い歴史を持っているものですから、正しい方法であると思わなければなりません。

しかし実は、ここに、つまり[上から見下ろしても変に感じない為に]見過ごせない二つの条件があります。

条件その[1]は

人は現実の山を見下ろした経験が無いのに、見下ろして見ても[大自然の風景にある山]をイメージし得る格好の石があるらしい点。

条件その[2]は

更に具体的にみて、この格好とは、石を近距離から見ている、つまり、両眼の視差が機能している筈の至近距離から見ていて、[視差が機能し得ない遠距離にある山]を無理なくイメージできる格好であるのです。

ここには、何か錯覚に似た秘密があると考えざるを得ないと、私は長い間考えていました。

### 【人に観て貰うものは】

突然ですが、これらのテーマに具体的に入る前に、人に観て貰うものが普通に持ち合わせているものは、どんな性質のものかを考えておきたいと思っています。ここで、人に観て貰うもの、盆栽と生け花はどうなっているのか観察してみましょう。

そうです。盆栽と生け花は、花も枝も樹の軸も観て下さる人の方向に向いていて、『観て下さい』と、そして『一緒に美しいと感じ合いましょう』とメッセージを送っているかのようです。石は、天然ですから人工的に観る人の方向に向けられません。

しかし、石を選ぶ時に、「石は見る人の方向に向いていて、観る人に何かのメッセージを送っている格好が望ましいものである」と心して選ぶ行いをして欲しいと私は思っています。少なくとも、自分の世界にのみこだわりの、観る人を意識しないのは良い事ではありません。

### 【ここで再び視覚について】

私は、先ず左右二つの眼球を顔に持ち、立って歩く人間が風景・山々・平野などを、どのように感じているかを観察すべきであると考えます。

そして、部屋の中で鑑賞する水石・山水石はどのような性質を持つと[観る人に何かのメッセージを送っている格好]が得られるかを考えるべきであると思っています。

それらを大きく心におき、先ほどの[人が石を見下ろして鑑賞していて何も不自由でない]事への二つの条件に迫ってみます。

これは新しい観点の考えですから、馴染み少なく分かり難いかも知れませんが、[18.立ち石]後半の[結論]とその近辺を、お読みくださると、自ずと明らかになる面もあろうかと期待いたしています。

---

## 左右の[逃げ]

この石は、瀬田川の産。1995年前後に川に潜って底から上げられたものとか聞いています。勿論、底部は切断された石。瀬田好きの我々が変に珍重する金梨地肌真黒石。大きな石の一部を切り取ったものですが、「左右に逃げがない」という意味で、山水石として典型的な格好をしている為にここに取り上げました。



写真3 [左右 57m]



写真4

### 【遼 遠】

叩くとキーンと鳴り、硬質。

このような硬質の石でありながら、この軟らかい曲線を持ついる石を多く見る瀬田の石は、まさに独特であると感嘆してしまいます。

---

さて、「左右の逃げ」があるという表現は、水石を正面から見て、石の左右が後ろにさがっていることを意味していて、昔から、石の専門家の間で常識の慣用語です。

この【遼遠】は、まさに逃げの無い典型です。  
写真4で見られるように、入り江があるかのように手前に湾曲していて、逃げがないどころか、迫っています。

ここで、少し考え方を考えてみましょう。

仮に、高速道路を走っている場合を想定して下さい。

走る車から周囲を眺めた場合、周囲の田園、家々、山々が次々に行き過ぎます。

ふと気付くと、それらが全部自分を取巻いているように感じています。

何時、何処にいても、風景の中心に自分が居るような気がします。

不思議ですがそう感じる傾向になります。是非試してみてください！

そして、遠くにくる山々が自分を取り巻いているかのように感じます。

現実には、山々が取り巻いて存在してないにも拘わらず、取り巻いていると感じるのは、単に、人間が[取り巻いていると感じている]に過ぎないのであると考えるのが本当です。

この現象を、私は、二つの眼球で距離を感じとれない距離にあるものたち、つまり遠距離のもの達を、結局は[同距離にある]と勘違いしているらしいから、自分の周囲をそれらが「取り巻いている」と感じているのであるとの結論に至りました。

この感覚は、人が進化した過程で遺伝子に刻印され、我々に伝わっています。

水石を見るときは、両眼の視差で距離又は遠近感がよくわかる距離で見えますから、石の[かたち]が、この[風景に取り巻かれている]感覚を満足していると安心する事になります。

逆に、石の端が後ろ方向にさがっていると(つまり[逃げ]が左右にあると)明らかに風景を感じるに不自然、又は不都合となるわけです。

---

## 一つの実験

この二つの写真は、写真3【遼遠】の[正面]からと[裏側]からとを低い視点で撮影したものです。

この低い視点は、普通に人が自然の風景にある山を見る視点です。

写真6は写真3【遼遠】の[正面]の姿で、写真5は[裏側]の姿。

【遼遠】の上方からの写真である写真4を見て、【遼遠】の裏側(つまり、写真4の上方向)から見た場合を想像してみましょう。

【遼遠】に上方からの写真4を[普通に石を観る視点で]見た場合、石の中央部は手前に出っ張り、左右は後ろにさがって行く訳で、これは[逃げ]そのもので、下記写真5は石としては[裏面]になります。

がしかし、視点の高さが地平線である写真5では[逃げ]を感じません。

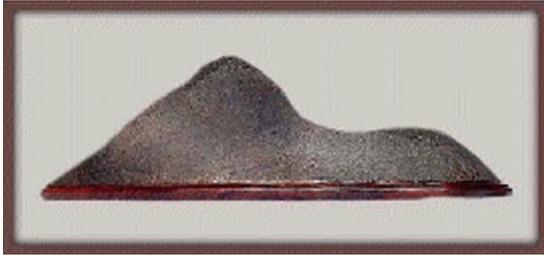


写真5



写真6

写真5の状態は、写真で見る限りで[裏面]に見えません。

ここに問題があります。

あの平野に孤立した感じを持つ[富士山]を見る場合で考えてみましょう。

飛行機から見れば、富士山は、中華どんぶりを伏せたような格好です。

中華どんぶりを伏せて机に置いて眺めた場合、左右に[逃げ]を感じないわけはありません。それにも拘わらず、現実の[富士山]に[逃げ]が無いのは何故でしょうか。

#### 理由その[1]

普通、富士山を見るのは何キロ、何十キロも離れた遠距離からです。

遠距離では二つの眼による視差がないから故に、上下左右が等距離にあるように見え、[地面から空に聳えた立派な山]を認識する方向に気持ちは行きます。

#### 理由その[2]

人の視点の高さは、富士山の高さから見れば地平線すれすれです。その為に、眼前の方向に延びて来ているであろう裾野をすら実感し難く、単なる地平線かのように感じているようです。

その結果、写真5のように逃げを感じないので。

この二つの理由は、よろずの山々を見る場合に当てはまります。

現実の風景に於ける山々は、その山に逃げがあっても、逃げを感じ取れなかった事を記憶して下さい。

---

## 逃げを感じることに

---

【遼遠】の写真3は、写真6と同じ方向、つまり正面から写していて、明らかに左右が迫って見えて、逃げはありません。写真3は、少し上部より撮影していますから、更に明確に左右が手前に迫って感じられる訳です。

そして、この写真3の視点は[山水石]を普通に鑑賞する高さです。つまり水石は、**上から見下ろしているから、逃げの有る無いを目のあたりに見てしまう**わけです。

[1] 風景は自分を取り巻いているものであるべきと言う感覚と、

[2] 人は山々を低い位置から見た経験しかないと言う二つの理由を背景に持つ為に、山水石を上部から見て左右が後方に逃げていると[何だか変だ]と矛盾を感じるのです。

これが、[逃げ感]の実体です。

写真3は、左右が迫っています。

しかし、多くの山水石の左右は迫ってはいません。人は、(後の平野に関する項目で述べますが)地平線と言うものを左右に延びた直線であると感じています。

故に、少なくとも直線、又は直線らしく感じられれば問題はないようです。

実は、先ずは逃げ感がない事が大切で、左右が迫っている事は必須の条件では無いようです。この点では、盆栽・生け花などより緩やかな感じがします。

---

## 石を鑑賞する状態

---

さて、普通水石を鑑賞するときは、水盤に入れるか、又はその石にピッタリ合う台を作り載せて鑑賞します。この場合、それらを殆ど例外なく地板又は卓に載せます。

この状態で鑑賞するのはもう長い歴史を持っています。何故そうするのでしょうか？

それは、地板・卓に載せることで、より美しく見えるからです。

では、何故美しく見えるのでしょうか。私は、見る石に[或る空間の中にいる感じ]を与えるからである、と考えています。石を展覧するのに、石と、地板または卓との大きさ・格好などとのバランスに気を遣わない人は少ないでしょう。不思議に、最も良いバランスというものはあるものです。このバランスが絶好である場合、殆どの観る人は良いと感じます。

これは、何故でしょう。それは、我々人間は風景を見る場合に、先ず、漫然と風景を眺め、興味があるものを見付けると、それに注目します。

そして注視が始まります。注視をしている時は、注視しているものの周囲にある風景も眼に入っていますが、気持ちは注視しているものに集まっています。

気持ちは集まっている目的のものは、いつも風景などで囲まれています。

こんな体験を重ねてきた人間は、鑑賞する石の周辺に地板・卓などで作り出された空間があると、実際の風景での体験、つまり目的のものが風景などで囲まれた感覚を呼び覚まされ、落ち着くのであると、私は考えています。

石を観ることは、このように、普通気も付かない程心の奥に隠された感覚を呼び覚ましながら行われています。

ここに、石を観ることが抽象的な行いになる端緒を見ることが出来ます。

この観点を更に大きくし発展させてみますと、山水石の鑑賞とは[風景を見てきた人の心に残された風景感を根拠にして抽出されたイメージを呼びさますものである]と言い換えることが出来ます。

ここで、それらの気も付かない程心の奥に隠された感覚に関しての全てを語れると考えていませんが、自身の中で明らかになっているものに就いて更に考えを進めて行きたいと思っています。

先ずは、注視することから始めます。

---

## 注視すること

真正面に視点をおき、つまり眼球を動かさずに眺めた場合、左右で考えて、人が物の存在を認められる範囲はとても広く、100°を越えます。

しかし、実際の視野角度は心理状態で変わります。

例えば、対象に興味を持った場合、「見詰め」ますから視野は途端に狭いものになります。

運転をしている人は、前の車のお尻ばかりを見ているせいか、横から出ようとしている車に気付かなく、進路をさえぎって停車して齟齬を買います。

前の車と自分との間を自分の領地だと感じているからかも知れませんが、多くの人は、横から出ようとしている車に気付かないことがあるようです。

これは、運転時に視野角が狭くなっていることを示しています。

風景を眺めるときにも、漫然と眺めているときと、何かに興味を持って眺める時とでは、現実の視野角度は大幅に異なっていると考えると差し支えありません。

われわれ人は対象に興味を持って見詰めたいとき、物理的に見えてしまっている左右(上下)の風景の中から、**興味の対象を選び**出して見詰めています。

---

ここで特に注目戴きたいのは、眼に入ってしまう風景の中から、興味を持ったものを注視している時の心の動きに就いてです。

印象の度合いで考えれば、注視している対象が支配的に密度の大きい印象になっています。

しかし、見詰めている対象は多くの風景に取り囲まれています。

取り囲んでいる幾多の風景は見つめている対象の間近から遠くになるに従って、徐々に印象の密度は薄くなります。

この現象は左右のみでなく上下にも起き得ます。

これを少し見方を変え、心の動きを考えます。

するとその時は、意識を、対象の[中心へ、中心へ]と集中させる動きになっている事に気付きます。

注視することは、対象の[中心へ、中心へ]と心を集中させる事です。

この心理的動きが、一個の石で風景を感じ取る時に、その石が[その石の中心に力が集まっている格好]が望ましい結果を招く原因になっています。

この結果、水石は[集・中心的]である格好をしている方が安定します。

これは、**見つめる対象物が風景に囲まれた中心にいる感覚を造り出します。**

普通、水石は(正面から見て)石の片側に目立った部分がある例が多いです。この目立った部分のことを、山を表現した石では「主峰」と言います。

今一度、写真3【遼遠】を見て下さい。

この石は確かに山を感じさせています。しかし、こんな格好の山が現実にあるかと思って考えますと、どうやら無さそうです。

この写真の石の格好に何か秘密がありそうです。

**この石の主峰は、石の中心方向にむかって覆い被さっているかのようになっています。**

この様子があって【遼遠】に山を感じることを見過ごしてはならないと私は考えています。

そして、**この格好を私は[集・中心的]と言っています。**

【14.集中的の意味】の項目をご覧ください。

---

## 集・中心的の具体例

[逃げ]の説明のために採用した【遼遠】は、[集・中心的]な様子が大切なものである事を説明し、納得して戴くために、この【遼遠】は絶好の[かたち]を具備していると考えた為です。

若し、【遼遠】の主峰が石の中心を向いていないなら、散漫であり、焦点が定まらず、見る人の視線を捉えられません。

美しくなく、場合によっては山を連想しないかも知れません。

これを、●集・中心的の意味の項目で、【遼遠】の写真を変形させ、[集・中心的]でない格好にしてみました。つまりで[集・中心的]であるものと、[集・中心的]でないものと比較実験しています。結果は明白になったと思われます。

お楽しみにご覧下さい。



写真 3-2 [左右 57cm]

### 【遼 遠】

さて、この石のように主峰が石の中心に向かって石には[芯]を感じます。  
芯を感じることは[集・中心的]な様子になっていて、視線が中心部に安定するからであると私は考えております。

[集・中心的な様子]であることは、実に重要なことです。

[集・中心的]であることは、山水石が具備すべき条件として[逃げ]があってはならないと同格の必須条件であると私は云っています。

蛇足かも知れませんが、この格好を更に具体的に書いてみます。

遼遠で見られるように、主峰の右側(外側)に流れる線の角度より、左側(中心)に流れる線の角度の方が鋭いことが大切であるとなります。

そして、この格好は、主峰が(左右で見て)石の外側に反っていないこと意味しています。

視点が石の中央に安定していただけることは、  
中央に安定したまま石全体を無理なく感じられ得ることが、最大の利点です。  
つまり、視点が石の中央に安定していただけることは、  
一個の石で山水の風景を感得出来る為の大きい要素であると、言っているのです。

【ここで[山形石]を少しお休みにして、次は平野を持つ石を話題にします】

---

## 平野を持つ石 1(土坡石)

山水石の代表は、直接に山々を感じる石です。

しかし、平野を感じる事を元にして、その平野での起伏を山々とみて、風景感を得ているものが多数あります。

普通この手の石に、[土坡石]又は[段石]と言われている恰好の石を多く見ます。そこで、先ず最初に[土坡石]に属する3種の石を選んで写真を載せ、文章を書きました。

次のページで[段石]を取り上げますが、共に理屈っぽいお話から少し離れてお読み戴きたく思っています。全く偶然ですが、[土坡石]では3種とも[庄内川]の石になってしまいました。次に2種の[段石]を載せますが、2種共に[瀬田川石]になっています。

先ず[土坡石]の1番目のこれは、庄内川上流の土岐川の産。庄内川を上を上にと行くと、JR中央線が名古屋を出て最初に入るトンネルになるあたりの山間を抜けて、岐阜県に入ります。

最初の街は多治見市。岐阜県に入ればもう土岐川と名前をかえます。

この石は多治見市内の溪谷で発見しました。

中央高速道路が出来た今では、道を見付けるのが難しいような溪谷が多治見市内にあり、

そうした(虎溪山の下を通る)旧道にその河原がありました。



写真7 [左右 38cm]

## 【春日野】

畑と藪とを越えてやっと到達するこの河原は、見たところブルトーザーが入っていない様子でした。

古くからの累々と折り重なった石が、その河原にあります。

石好きの人も滅多に見掛けません。

この石は、1980年頃にここで発見。底部はもっと厚かったのですが、川で既にこの姿を見せていました。

興 奮！

写真で濃い色の部分は濃い緑で土岐川、庄内川で二つと見ない質。

ベースになっている白い層も、この界隈で見たことはありません。

帰り道で、助手席で夕日に映えたこの石は、実にきれいでした。

大きい平野に山々が見えるこの時の印象は【春日野】です。勿論、底部は切断してあります。  
[与十郎石]はこれのもっと凄いもだったでしょうか？

次の石も、庄内川の石。

JR中央線、高蔵寺なる駅に最も近いあたりの庄内川にこの石がありました。



写真8 [左右 29cm]

## 【悠 久】

1985年頃の酷暑の日。

大きい石に挟まれて窮屈そうにしていました。発見したときは、何故か白い色をしていましたが、余りの美しさに興奮。

家に持ち帰りました。洗ってみると、これは黒いではありませんか！

凄い！と更に大興奮。

川で白く見えたのは、上流の岐阜県の街々で陶器を作っている工場が多いので、恐らく、陶土が表面に付着していたのであろうと思っています。

大きな石に挟まっていたからか、陶土で白くなって見えたからか、この石は私の手元に来ました。

幸運です。

それは、勝手にそう思っているに過ぎないのですが、この石に限らず、手元にある素敵な石は、全部、幸運が私の手元に運んでくれた感じがしています。

仮に購入した石にしても、同じ石は他にありませんから、手元にあることは幸運以外の何ものでもありません。こうした幸運に恵まれ続けている私は幸福です。

写真では台に載せていますが、底部は平らで座りはこのままでOK。

でも、台に載せた方が何故かうつくしく見えます。

やはり、台に載せることは、正装するようなもので、人も正装した方が立派に見えます。

殊に展示した場合、石は正装で臨むのが礼儀であると考えるのは、間違いではないと私は考えています。



写真9 [左右 39cm]

## 【金 剛】

この石は購入です。

愛知県の安城市にあった石のお店で買いました。水石を販売しておられる店で、庄内川の石が何万円かの値段を付けて売られているのを、この時初めて見ましたし、その後も見たことがありません。

さて、その店の店主さんは、この石を底部切断された石と思っておられたそうです。

しかし、底部は全く平らであるものの、天井と平行ではない為に、台に載せないと傾いてしまいます。

上部はご覧のように虎石のたぐいですが、底面は真っ黒な梨地肌です。

昔、京都の九十九会に出品したとき、瀬田川石の地元である大津市の石好き諸氏が「庄内川産」と書いてあるこの石に驚いておられたのが印象的です。

どこのどなたが庄内川のどの河原で発見されたのかわかりませんが、この石が手元に來たのも明らかに幸運です。

さて、上記3個の石は、平野に山を持つことで成り立っている石です。

写真7、8、9を「土坡石」と言っています。坡面とは、なだらかな坂の意味なのに、水石では一般に平野に山々を指しています。

その理由は、恐らく【春日野】と【悠久】に見られるように山に裾があるものから起きたイメージによるものでしょう。

裾のない感じの石、【金剛】も土坡石と言っているのですが、まあ呼称のことですから許されていいとすべきです。

---

この項目で注目して戴きたいことは、これらの平野の上にある山々(隆起物)がどれも石の中央部、つまり、平野の方向を向いて、しかも中央部の平野を取り巻いている感じを持っていることです。

そして、それ故にそれらは石の中央部に視線を安定させ、全体として落ち着きを得て、鑑賞の対象物となれています。

結局、この種の石も[中心に視線が集まるもの]が良いようです。

隆起物が平野の方向、つまり石の中心に向かっていない石を私は持っていませんから、ここで現物の写真で見せられません。

しかし、後に出てくる[●集・中心的の意味]の中の二組の写真を見て下さい。

最近は便利な世の中になって、【金剛】の山の部分と【遼遠】の主峰とをコンピュータで変形をさて見て戴けます。

結果は、明白になっています。

水石、山水石へのお誘い…



---

## 平野を持つ石 2 (段石)



写真 10 [左右 30cm]

【秀 稜】

---

平野を持つ石の、もう一つの代表格である[段石]について述べます。  
段石で、見て戴けそうな石は、2個しか手元にありません。  
世に[土坡石]と[段石]が混用されている傾向を見掛けます。  
しかし、[段石]と言うからには、**二つ以上の平面が段**になっているべきです。  
段に見えるためには、(二つの平面の場合で考えて)上と下の平面が平行でありたいものでしょうし、諸々のバランスが良いものでなくてはなりません。  
従って、[具合のいい段石]は少ないもののようです。  
この【秀稜】は、瀬田川の石。  
もう35年前になるでしょうか。  
石に魅せられて夢中な頃のある日、これを、名古屋にあった小川さんと言う業者さんのお宅で見ました。  
余りの美しさに啞然。  
売って欲しいと言いました。  
その人は業者なのに『自採なので売らない』と言います。  
余程気に入っているのでしょうか。  
(註・自分で拾った石を[自採]といい、買った石より思い入れが強く、大切にします)  
『売る気になったら私に…』と願ってその日は帰りました。その後、折りがあれば懇願していましたが、暫く訪れる機会がなく、10年ほど経ってにその店に行ったらもうこの石はありません！？  
私との約束を忘れて、ある人に売ってしまったのです。  
しかし、嘆く私をかわいそうに思ったらしいお優しい彼は、持ち主に交渉して下さって、私の手元に来たのです。  
幸せ。感謝です。  
普通の梨地肌と蟹真黒の中間の大きさの凹みでしょうか、質は上等。勿論、底部も含め天然です。  
この石と次の石。つまり写真10【秀稜】と写真11【瑞平】のように平野が段になったものを、前にも書きましたように[段石]と言っています。  
この手の格好の石は、山形石に比べて沢山ありそうなのに、実際には不思議に少ないのです。  
単に石が2段に割れて川で擦れれば、こんな格好になる筈なのに、現実はその調子のものでないらしく、おもしろい現象です。  
何度も書きますが、段石は土坡石ではないので、上と下の両面が平行であるのは、段石の第一条件です。しかし、それが美しく見える為に、更に一つの無視できないものがあります。  
それは、例えば写真10【秀稜】で見て、上の平野が下に降りる様子で、より遠くが右に出ている感じがあります。  
これが大切です。  
より遠くが右に出ている感じは、見る人に奥行きのある平野を感じさせ、つまり上の大地に囲まれた平野を感じさせ、やすらぎと落ち着きを与えます。  
更にこの様子は、**石の下の[平野]を取り巻き、石の中心に視点が行き易い原因**を作っています。  
(この取り巻き様子を[巻き込み]と表現しておられた記事を見たことがあります)  
それ故に、**より遠くが右に(石の中心の方向に)出ている感じは段石にとって大切です。**  
余談ですが、この稜線の巧まざる素晴らしさにしばし惹き込まれて時間を過ごし、かくして、この石を【秀稜】と銘ずる事になりました。  
そして、この【秀稜】は所有する石の中で最高位グループ石の一つとなりました。



写真 11 [左右 29cm]

### 【瑞 平】

これも、瀬田川の産です。

瀬田川の川に沿っている左岸の道に、庭に石を沢山並べている家があります。

庭が駐車場になっていて、車と塀の間にこの石は置かれていました。

表面は、長年土の中にあっただのでしょう、猛烈な汚れで、何の質かわかりません。

持ってみると、重いし軽く叩くと金属音がします。

質は良い！

値段を聞いてみたら5000円。

買って帰り、必死に擦りましたが、擦る布が簡単に破れてしまいなんともなりません。

困り果ててガラを掛けて貰いました。

虎石の出現です。大成功！

座りは、台無くともこのままで安定しますし、まあ及第の段石でしょうか。

この【瑞平】も【秀稜】と同じく、下の平原を上の方の台地の隆起が取り巻いています。

段石に於けるこの取り巻きは、恐らく観る人に〔包囲感、つまり台地に囲まれた平野に居る感覚〕をもたらしています。

そして、前項の〔土坡石〕にても言える事ですが、結果として石に奥行きを感じさせ、石の中央部に視線が安定することをも含めて、素晴らしくひろがりのある安定感を石に感じさせているのです。

さて、ここで【集・中心的の例】で触れました、コンピュータによる“変形実験”に行きます。

水石、山水石へのお誘い…



---

## 集・中心的意思

最近の写真は、コンピュータに頼り、そのコンピュータは幾種類も加工の技を持っています。

私も、これらの技を少し使えます。

それらの中の“変形”なる方法で石の格好を変えてみました。

[金剛・変形]は、正常の山の部分のみを変形させました。

つまり、山の頂点を右に引っ張ったものです。

この二つを見比べますと、変形の方は、右の斜めに倒れた感じの部分に視線が行き、どことなく散漫で、石を見る視点が定まりません。

正常の方は、視線が石の中央部で安定し、その引き締まった様子は、石そのものに存在感を感



金剛・元



金剛・変形



遼遠・元



遼遠・変形

[遼遠・変形]も主峰のみを変形させています。

受ける印象は、この山形である[遼遠]にても、[金剛]と似た傾向になっています。

変形の方は、山らしいのになんか不満で、まあ[だらしない]とでも言えるでしょうか。

これに比べると、元の方は[毅然]としています。

---

この二つを見くらべて、[石を見た瞬間に石の中心部に視線が行くこと]が大切であると判明しました。

[土坡石、山形石に限らず、石の主峰又は主部は、石全体の中心へと向かっていなければならぬと言えます。

殊に、この遼遠では、左右の逃げが無く、むしろ、入り江もあるのに、変形させた石の格好は何とも厄介です。

変形させたような格好の石は、切断することも、台に載せることも、所有することも我々はしないでしよう。

これらを見ていると、石に[逃げがない事]と[主部が中心に向かっていること、つまり、外側に倒れていないこと]は、必須の条件で、集・中心的である事の意味はここにあることになります。

### 【平野の役目は】

さてここで話題を変えて、山水石で[平野を持つこと]はどんな役目をしているかに就いて考えを進めます。

前項、前々項の【12.平野を持つ石1 土坡石】【13.平野を持つ石2 段石】の2つの項目は、[平野]が主役である石達のお話です。

また例えば、【21.雨宿り】【44.香流】【45.飛台天空台】なども石の一部に[平野]を持つことで、成り立っています。

これらの現象は、山水石で[平野というもの]は、思いの他重要な役割をしているかも知れないことを暗示しています。

そうです。山水石では、誰でもまず第一に山々を意識します。

主に、山々を意識する観点で[逃げがない事]と[主部が中心に向かっていること、つまり、外側に倒れていないこと]を考えてきました。

しかし、ここにきて、[平野]を人間がどのように感じてきたか、を考えるのは無駄ではないとであろうかと思い、次項から【15.平野？】【16.平野の纏め】を書きます。

今では望みにくくなりましたが、うんと遠い所まで見渡せる平野に立って見た場合を写真で見てください。

水石、山水石へのお誘い…



---

## 平野？

地面に直立し、真っ直ぐに正面を見た場合は、写真のように、地平線は、見える範囲のほぼ中央に左右にのびています。

普通、人が生活で使っている視野角度は左右で $50^\circ$ となっていたらしく、昔の35ミリカメラで[標準レンズ]と称するレンズの焦点距離は5センチが主流でした。

しかし、ぼんやり眺めた時と、熱心に見たときと、印象に残る視野角度は、大いに違います。そこで、この項目で選んだ写真は、私が持っているカメラのせいで左右 $46^\circ$ にしました。

この写真の上下の視野角度は約 $36^\circ$ になっています。

(なお、この写真は地面から1.5メートルの高さで撮影しています)



地平線のあたりに、左右に赤い線を書いてみました。

赤い線の少し上に建物の群れが見えます。この群れまでの距離をカーナビに聞いたら500mと言いました。そこで、赤い線を200メートル離れた場所に引いてみました。もっと正しくは赤い矢印の線の上端が、今立っている位置から200メートル遠い場所です。

この線を出す計算によれば、200メートル先と何十キロも離れた本物の地平線との間、つまり、この赤い矢印線と地平線との間を見ている視野角度は、何と $0.43^\circ$ でしかありません。500メートル先と地平線との間を見ている視野角度は $0.17^\circ$ です。もうここまでくると、地平線と区別できません。

ですから、細かいことに拘らなければ200メートル先より遠くを[地平線]と感じている場合も多々あると考えて良いでしょう。

とは言うものの、実際にこの風景を目の前にすると、200メートルあたりの建物は詳細がよく見えますから、それを地平線と同じに感じていると言う話を、にわかに納得しにくいのが本音です。

つまり、建物を見ようとして見ると、注視するからでしょう、可成り細かいものが見えます。写真で言えばズームアップです。

故に、200メートルあたりより遠くを、普通の生活ではとか、漫然と眺めている場合とかの時に、[地平線的]に感じているということとした方が正しい表現と思われます。

---

## 平野の纏め

前項【平野？】では、結局[地平線]の話で終わってしまいました。

本項では[平野はどのように見えているのか]に関して考えたく思っています。漫然と眺めている場合、200メートルまでの平野を、[眼下に広がった平面である]と感じていると私は考えています。土坡石で、平らな面を上から眺めて不都合がないのは、この平野の感じ方に矛盾しないからでしょう。

少し話を戻し、水盤に砂を敷き詰め、その上に石を置く鑑賞法の話に行きます。

この場合、砂の表面は平らにすればする程、美しくなります。砂は茶色が好まれています。正に土です。人間は、三半規管とかで、平野に対し直立出来ると言います。産まれてこのかた平野に、又は平面に殊に敏感です。

故に、砂は平らに、平らにとしななければならないようです。水盤の場合、置かれた石と砂との接する場所は、乱れがあってはなりません。何故ならば、それは、[石と砂との境界線に地平線のイメージを重ねている要素が潜んでいる]からです。

遠くに建物があつたり、樹木が生えていたりしても、結局は整然とした一本の線を感じ、それを地平線と同じに感じているに違いないので、我々は、[山は整然とした地平線の上にあるものだ]と思っているのです。

---

私事ですが、私は水盤展示を行いません。理由は簡単。私は、不器用であり、その上することがいい加減で、せっかちでもあり、砂をその様に綺麗に整える自信がないからです。

さて、人は歩くとき、必ず足元に注意をはらっています。下を視界に入れて歩かないと、危ないからです。

足下をいつも見たり、注意したりしているということは、[平野は、眼下に拡がったものである]と意識下で感じていると考えて間違いありません。

人が普通使っている視野角度は $50^\circ$ とされています。すると、地平線に視点を定めた時の地平線より低い方向だけで見れば約 $25^\circ$ です。

しかし、下に注意を払う習慣を持っている人間には、実質上、 $25^\circ$ の何倍かの視野角度になっています。地平線の説明の時の写真は、上は空、下は地面を写しています。この写真は、人が直立した場合と同じ位置にカメラを設置していますから、空と地面は均等です。

しかし、下を向いて歩く人間の視野の大方の範囲を地面が占有します。結果、**地面は足下に広がっているものである**との印象を受けている事になると私は考えています。

下の方向を見て歩く人間は、**平野を[足下に広がる平らなもの]**と感じていると考えて良いのだと、私は言うのです。

ここで、平野の見え方について述べる意味は、水石の鑑賞が[何故、上から眺めて問題ないのか]に対する納得の為です。

---

水盤の砂も、地板、卓などの表面も、石の置き方も[乱れ]があると気になっ  
てしかたないのは、根に[平野]を感じているなかで、

[1] 遙か彼方の地平線を直線と感じ、

[2] 同時に足下の平野を真っ平らと思っているからです。

遙か彼方の地平線を左右にのびた直線と感じているので、目の前の石は、  
左右が迫っているか、少なくとも左右に真っ直ぐでない、見る人は[何だか  
変だ]となる事になります。

足下に広がった平らな平面を感じている我々は、遙か彼方の地平線をも感  
じ取り、この二つを絶妙に複合させ、水盤の上で、大自然を感じ取れるような  
展示方法を、先人達の優れた感性が開発したのです！

なんと素晴らしい事でしょうか。 何と素敵な遺産でしょうか。

水盤にしる、地板、卓(机のようなもの)に石を置き、上から眺めて変に感じないのは、水  
盤、地板、卓の平らな面に平野を置き換えて感じているからなのだと、私はここで言ってい  
ます。

表現を変えれば、人間の眼から得られた現実の山々を、眼下に拡がった平野の端の地平線  
上に左右が真っ直ぐに立っていると感じている訳で、それらは平野に安定していて、眺めま  
わすと、自分を取り巻いているようにも感じていることになっています。

水石、山水石へのお誘い…



---

## 下を向いて歩く人間

先ほども書きましたが、人はいつも足下に注意を払っています。何かに躓いてヒックリ返ってはおもしろくありません。

大体、人間の首は、上を向くより下方向を向く方が楽に出来ています。結局、人間は、大方下に視線を定めて生きているに違いありません。

下方向に視線を定めた場合、眼の隅に見えている高いものは、どんな具合になっているでしょうか？

次の写真を見てください。注意して戴きたいのは、遠くのマンションの形です。

マンションの上部が下部より大きくなっているではありませんか！

これは、視点(見ている視線が定められた点)に向かって全ての線が集まるからです。

下方向に視点を定めれば、高いものの上はこの写真のように大きめになります。



この現象は心理的に、そのように受け取っているものではありません。  
平野を見る時の「遠近感」に似た現象が上下に現れたに過ぎない、つまり「遠近法」で説明出来る単なる物理的現象です。  
大きい建造物の近くで、下を向いている人間の予想外に広い視野の隅で、建造物の上部は大きく見えているのです。  
にわかに信じ難いかと思いますか…

兎も角、大きい建造物の近くでは、建造物は覆い被さっていると人は感じています。  
さて、この現象は、水石にどう関わっているのでしょうか？

ここで問題にしたいのは、今まで石の「左右の逃げ」などに関する話で始まったのですが、果たして、「上下ではどうなっているか」について考えたておきたいと言う事です。山の麓近くで山を感じる時に、山の頂点は、どう考えても裾より遠くにある筈なのに、山が覆い被さっているかのように感じる事が多くあります。これは、山が巨大であるので威圧されるからかもしれません。若しかしたら、少し下に視点を置く習慣のある人間の体験のせいではないかと私は考えました。

高い山の裾にいて見上げる場合を考えますと、山の頂点も中腹も見人からの距離は、共に遠くにあります。少なくとも、人の二つの眼、顔の左右に付いた二つの眼の視差で距離を感じ取れるには、余りに遠くに山の頂点・中腹はあります。

知識として、中腹より頂点の方が遠くにあることを知っているのですが、脳味噌に届く映像では同じ距離にあるもののように捉えていると考えられます。

そうであるから、主に下の方向に視線を向けて歩いている人間は、頭上にある（実際には同距離と思っているらしい）山の中腹・頂点が頭上に覆い被さっていると感じているのです。

富士山の麓で間近に富士を見上げたとき、富士山が覆い被さっているように感じたことがあります。新幹線に乗って眺める富士山は、実に長い裾をひいています。しかし、その裾の端に立って富士を見上げると覆い被さっているのです！

先ほども触れましたように、広角レンズで下向きに地面を撮影したとき、画面の上部の隅にある建物の上の方が大きくなる（これはレンズの癖でなく、先程も述べましたように、遠近法で説明できる単なる物理的現象です）現象が、ここで関わってきます。

これらの結果、人は、山は人の頭の上から覆い被さっているものであると、印象付けられています。

山水石の場合、山形の石で考えて、山の頂点は、見る人の方向に向かっているのではない、又は、見る人の方向に向かっていた方が良いという事になるという考えを導くことが出来ます。

余談ですが、マンガでビルを描く時、大方のビルは上部を大きく描きます。人がビルの上部を見る時は、[見上げる]わけですから、確実に上部は小さく見えている筈ですのに、これは変です。しかし、マンガは読む人のイメージにうったえる絵であるべきですから、こうなるのが自然なのです。山水石も同じくイメージのものですから、同じ行いをすべきです。

現実の山を見る人には、山は近くでは覆い被さり、遠くでは、少なくとも後ろに倒れてはいません。

室内で行う水石の鑑賞は、二つの目で遠近がわかる距離で見ます。

この距離で見た場合に山の頂点が後ろに倒れているのを、人は[立派な山・存在感のある山]と感じ得ません。

さて、“逃げがあってはならない”“集・中心的であるべきである”“頂点が後ろに倒れない”などと書いてきましたが、盆栽、生け花ではどうなっているかを見て下さい。

盆栽、生け花では全部これらを守って作られていて、興味深いものを感じます。

さて、ここで今まで書いてきたテーマの纏めらしきものを試みます。

展覧された水石・盆栽・生け花などの前に立ちます。

何となく眼を奪われると言う状況を作る為に、“逃げがあってはならない”“集・中心的であるべきである”“頂点が後ろに倒れていてはいけない”などを満たしていることが、基本として必要です。これは、観て下さる人たちの方向に、石の全てが向いている状態が望ましい事を意味しています。

つまり、観て戴ける人たちに『私を観て下さい。そして一緒に美しさを感じ合いましょう』と観て下さる人たちに[手を差し伸べる]気持ちになるのが本筋であると云っているのです。

また、一個々々の石自身が持つ個性は[これらの条件を満たして初めて観る人々の心に訴えることが出来る]ものであると私は思っています。

---

これらの気持ちに頓着しないと、展覧された石から[メッセージ]を感じなく、展覧会場で誰も気付かず通り過ぎてしまいます。

私は、石が持つ個性に話を及ばせていません。ここで私は、単なる[常識]のような一般的に必要と思われるものに関して、何故それが常識であるのかとの観点から、説明を試みたくありません。

水石は作るものでないから、或る程度の妥協のような事は仕方ないという話はよく聞きますが、明らかな欠点はあるとはなりません。明らかな欠点とは何であるかを、十分に承知した上で、厳密に選んでいけば、必ず素敵な石が目の前に現れます。明らかな欠点とは、本来、常識に類するものですから、常識に関しての間違いをしないようにして、観る人の眼を奪う石を探しましょう。

さて、京都・九十九会、初代会長の長村さんの【雲ノ平】という有名な石があります。最初、見たのは私が石を始めた頃でした。

立ち土坡石とでも言うのでしょうか、この石は、実にユニークな格好をしています。

立っていて、その上部に[平野に山]です。このように立っている石の姿は、普通下になるに従って、小さくなっています。

世の常識で[石は安定が大切である]となっていて、安定する為には一般に石の底部が頂部に比較して大きい台形が良いように思えます。

さて、次項(立ち石)の二つの写真を見て下さい。

この左側の石は、もう30年くらい前に、庄内川・松川橋のあたりで発見しました。

当時から【雲ノ平】に魅せられていた私は欣喜でした。

---

# 立ち石

立っている石の格好で、下になるに従って、小さくなっている傾向のものが多くあります。石は安定が大切です。

前項の繰り返しになりますが、安定する為に、一般に石の底部が頂部に比較して大きい台形が良いように思えます。

しかし、安定の面で見ても、石の上部に比べて下部が細くなっている一見不安定な様子の【雲ノ平】[この雲の平は、瀬田川石であり、京都・九十九会創始者で、初代会長でありました故・長村資佳三さんのご愛蔵の石です]は、実に安定した存在感がありました。この存在感と魅力は何であるかに、長年にわたり解答は得られませんでした。

さて、次の二つの写真を見て下さい。この左側の石は、もう30年くらい前に、庄内川・松川橋のあたりで発見しました。当時から【雲ノ平】に魅せられていた私は欣喜でした。

【雲ノ平】と、この庄内川で得た立ち石とが、共に下部が小さくなっている方が良いということは、人は上部が大きい方が自然であると感じることを意味しています。

これは、前項の【下を向いて歩く人間】で、書かれた、下を向いている人間の視界の隅では、大きい建造物・山々などは覆い被さった感じで、大きく感じていることに、原因があります。故に、下が小さくなっている方が安定感があり、スマートであり、お洒落ですらあります。この現象を体験して、隠れて気づかない程深い人間の心の綾を見た思いがしています。この種の面で見ても、既にすべての水石は抽象のものです。こうした抽象の世界で遊べる私たちは幸せであると思えます。



庄内川石・元 [高さ 19cm]



庄内川石・変形

例のコンピュータの変形で、下部を大きくしてみました。

確かに、変形させた方は、安定感はある？ようですが、全体から受ける印象度合いと  
いうか、すっきりしたスマートさのようなものでは左側の元に負けていて、問題なく元の方  
が魅力的です。

鑑賞にたえ得るのは間違いなく元の方です。

繰り返し同じ記述になりますが、これは[下に視点を置いて歩きくことで、立っているも  
のの下部より上部が大きいと感じるのが自然]である、となっている人間の習性の結果で  
す。

少なくとも、変形写真の石と元の石とが河原にあったとしたら、持って帰るのは元の方で  
す。誰も変形された方を持って帰らないでしょう。このように、山水石は、簡単に想像できな  
いような感覚を使って、石から美しさを感じ取っています。

まだ他に、この種の現象が[石を観ること]で起きる話題を見付け得るかも知れません。

若し何か興味のある話題に思い至れば、随時取り上げますが、現在では、今までの体験  
から考えられるテーマは出尽くした感があります。

さてこのあたりで、結論を纏めることにします。

---

## 結 論

さてこのあたりで、結論を纏めることにします。

皆さんに観て戴く事で成り立っている盆栽、生け花で常識である[観て戴く人の方向に、全てが向いている]事の為に、水石では

**【左右に逃げがないこと】**

**【主峰・主部などが、石の中心に向かっていること】**

**【主峰・主部などが、うしろに倒れていないこと】**

の3項目に留意すべきとなります。

これに関して[久遠]の文もご覧ください。

---

ここで、もう一つ余談ですが

## 【忘れてはならないお話】

に行ってみます。

石は天然のものです。

故に、時に何の疑いも持たず[石は天然自然の状態、つまり川に転がっていて、水流に揉まれている状態が最善である]と考えがちです。

しかし、石は【室内】で鑑賞します。

室内で鑑賞する時に、果たして[天然自然の状態、つまり川に転がっていて、水流に揉まれている時の石の肌とか、石の色調などが、そのまま鑑賞するものとしての最善な状態である]のでしょうか？室内という場所は、人工の建築物の中にあります。室内では[雨は降りません][頬をなでる秋風もふきません][川を流れる水の音も聞こえません]

この空間で[自然]を感じられるとは、どんな状態のものでしょうか。

古来の【山水石】はお座敷の床の間などが似合うものとして、扱われてきました。ここに、回答を暗示するものがあります。

明治以前の我が国で【山水石趣味】が起きた原因は、【山水石】を通して、室内で[自然]を感じ取りたい気分を基本に持っていた故に起きたものと思えます。もともと人工のものである室内で[自然さ]を感じ取り易い状態とは何でしょうか？

古来の室内で石を観て戴く場合、絵画、お茶のお道具など調度品と同じ状況で観て戴くこととなります。故に石は、それら、調度品、絵画、お茶のお道具などとの調和がとれて、無理なく心にしみるものであったほうが良いと思われれます。つまり、いわゆる[時代がついた]石の方が調和します。

例えば、掌で撫でさすり手の油のようなものが石の表面に付いて、時代が付いた感じの方が、他の調度品、絵画、お茶のお道具などと調和し、心を和ませます。調和するが故に、多くの人は、他の調度品たちとは異なった[自然の世界]を無理なく石に見いだすことが出来るのです。

天然のまま状態の石は時に粗野であり、絶妙な風合いを持った調度品、絵画、お茶のお道具などの中にあって、天然のまま状態の石が持つ様子は異質と感じられ、[自然の世界]をそこに見出す気分になり難いでしょう。

重ねて申しますが、調度品、絵画、お茶のお道具などと調和するために、[石に時代が付いている事]は、必要であったのです。

展覧する事は、観て戴くことです。

ひとさまの前に出る時に、多くの女性は化粧します。スッピンは失礼ですし、美しくないもののようなです。展覧会に出品された天然のままの石を観る人の多くは、スッピン状態と感じられるかも知れません。大方のスッピン状態の石は、人工の場所である室内が似合いません。このあたりに注意を払い、鑑賞にたえる石とは何であるかを、深く考え、心の深いところで感じ取りましょう。

すくなくとも、【伝承石】に感じる格調の高さから、眼をそらさない姿勢を保つ心がけを持ちましょう。そうすることで、格調の高い石が手元に集まってくると、私は信じています。

これで、言いたいことは大体終わりました。

以下は、これらのテーマを横目で見ながら、持っている石の写真を載せ思い付くまま書いてみます。

---

# 深 山



写真 12 [左右 34cm]

【深 山】

---

菊石です。

菊石が水石の世界に登場したのは、昭和になってからだそうです。

最初は、岐阜県の根尾川上流の或る山から出ました。有名な[白木](しらき)の山です。

[白木]以外の山でも採取されると言いますが、最初有名になり、今でもその山から出たものが最高と言われている山がこの[白木](しらき)の山です。

[白木]の山から出た石を磨いて、花を美しく見えるようにした石が、人目をひき、珍重されたことが、世に菊石が登場した最初の出来事でした。

菊石にも、磨かないで鑑賞出来る石、つまり天然の石があります。

[1]天然のまま花が結晶状態のものであり、更に瑪瑙化したものもあり、天然のままで見られる菊石があります。

これを【サバ菊】とか【キバ】とか言い、後に出てくる【花舞】【サバ菊山】【サバ菊台】はこれです。

[2]他に、川に流れ込んで擦れた菊石があります。川擦れと言っています。

[3]山から出たままのものもあります。

これらの中で、花が露出していて格好良いものもあります。

【菊山】もその一つです[山ずれ]と言う人もありますが、これと異なり、泥や浸食を受けて脆くなったものに覆われた菊石があります。

これらの覆われたものを取り除くのに、ワイヤブラシ、サンドブラスト、針などを使うといいますが、これらの手法は秘密で、とても我々の計り知るところではありません。

この【深山】は、[1]か[3]に属するものです。

この石を、今年(2003年)になって岐阜市の菊石専門の業者氏に見て貰いました。

彼は、『この石は古い石で、白木の山の産である。』

中央の凹んだ部分は、多分腐った泥があったのをサンドブラストで吹き飛ばしたものであろう。しかし、良い仕事をしている。

現在生きている人でこれ程の仕事が出来る人はいない。99%天然のままの石だ』と言っておられました。

『99%天然…』と言われたことは、『全部天然である事は無い』と言われたと同じ事です。

[山水石、水石の分類と展覧室]で、その後、加工の専門家の指摘を受けました。ご覧下さい。

台に埋まっている石の底部から、今でも時に小さい石の破片が落ちます。上部の主峰の頂点あたりを叩くと金属音を発し、硬い様子がうかがえます。

天然というものは不可思議です。このような格好を作るのですから…。

左右33センチで大きさも丁度良く、大事な石です。

つい最近[2007年9月23日]の事です。

この【深山】が、東京上野のグリーンプラザで行われた日本水石協会主催の第23回日本水石総合展で[秀逸賞]を戴きました。

以前、【深遠】と【瑞陵】とは、京都で行われた大観展で委員会賞を貰っていましたが、今回は、賞状を戴けましたせいか、何故か特別の感慨がありました。

さて、石好き者達の間で[溜まり]のある石は格別に好まれているようです。

[溜まり]の他に、[瀧]のある石も同様に好まれている部類でしょう。

不幸にして、私は[瀧]のある石で、ここにお見せできるクラスの石を持っていません。

次は、北上川の[溜まり]に行ってみます。

---

# 愁 風



写真 13 [左右 32cm]

【愁 風】

---

溜まりとは、[水が溜まる]の意味。  
水たまり、池、そして湖のようなものに連想は行きます。  
湖を想像すると、自然に、周囲に山々があると落ち着いた気持ちになれそうです。  
周囲に山々があるのが自然なのに、この石のように、山々に囲まれた感じを持っている[溜まり石]は、実はとても珍しいものです。

山々に囲まれた湖の風情は〈●雲入り写真:114-愁風〉をご覧いただくと、更にリアルな感じを得て戴けるかも知れません。

この手の石を『遠山抱湖』と銘じている人もあります。  
これでは余りに説明的であり過ぎるのでは、と思う私は、この石に【愁風】と銘じました。  
この石の風景感は余りに秀逸なので、作り石と思われるかも知れません。

しかし、現物を手にとって見ますと、天然に間違いないことがわかります。  
北上川は遠いので行ったことはありませんが、茶色の石をよく見ます。  
東京に遊びに行ったときに、石の雑誌【樹石】の社長さん・関根さんのお宅で、譲って戴きました。  
関根さんには他に【黙っている】と銘じている豊似の石も譲って戴いています。  
【黙っている】は高さ12センチの小さな石ですが、この【愁風】は、左右30センチ、奥行き23センチあり、良質の石であるからでしょう、帰りの新幹線で重くて参ったのが忘れられません。  
先日、ある業者さんが来られた時に、手にとって眺められ『素晴らしい』とお褒めのお言葉を戴きました。  
満足です。

さて、石に[溜まり]があると(風景感云々を別にして)嬉しくなってしまう傾向は、誰にもあるようです。

私は風景感を持った[溜まり石]をもう一つ持っています。【揖斐五湖】と称していて、空と雲を入れた写真を載せています。

風景感に今一つ不満な溜まり石では、【揖斐溜まり】と【佐治溜まり】を持っていて、共に空と雲を入れた写真を載せていますから、見てください！

溜まりの他に嬉しくなる傾向のものは[平野]もありますし、[瀧]があると、もう大変です。  
[溜まり][瀧]の他に、山水石に属するものでは、[抜け]といい、石の一部が抜けて窓か何かみたいになっている石があります。

私も、これらの特徴 [溜まり][瀧][抜け]などを持つ石は全部大好きです。  
これら[溜まり][瀧][抜け]などの他に[雨宿り]とか[被り]とか言われているものなども人気のものです。

では先ず[抜け]に行く前に、[雨宿り]又は[被り]に行ってみましょう。

---

# 雨宿り



写真 14 [左右 31cm]

### 【揖斐川石・雨宿り】

揖斐川町内の、揖斐川の堤防を挟んだ東側に「水峰園」という盆栽を業にしておられた家があります。昔、そのお庭に多くの揖斐川石が放置されていて、それらの中にこの石がありました。値段を聞くと五百円と言われ、大喜びで買って帰りました。京都・九十九会に出品した時に、瀬田の蓬ではないかと言う業者氏がありました。肌が瀬田の蓬にとても似ているかららしいです。

しかし、この石は紛れなく揖斐川の石です。瀬田の本蓬と言われる石は基本的に緑色～青色のもので、そして、単に緑色が似ているのみでなく、緑色が持つ紋様にも類似したものがあります。揖斐の青石～青黒石と色の傾向と紋様に於いて同じジャンルに属するのでしょうか？川が異なっても、このように似ることもがあっても変ではありませんが、産地を揖斐と言うより瀬田と言った方が高価？であるかも知れなく、揖斐を身近に感じている私としては、揖斐の石を瀬田の石と言われることは少々口惜しくなる気分です。

何故ならば、昔の本で、水石の産地として最も古いのは京都の加茂川であり、その次に揖斐川と書かれていた記事を見た記憶があります。瀬田川はもう少し新しい時期に登場したとなっています。それにしても、瀬田川は多くの名品を世に送り出していますから、揖斐川石の方が瀬田川石より上等であるなど言いたい訳ではありません。まあ歴史の変遷の一こまを見るきもちですが、揖斐川は瀬田川より私の住まいに近いせいで、あの加茂川と並び称された揖斐川に最注目になるのでしょう。

さて、この石に台を付けて貰った時に、台の左側の平ら部分を上部の石の格好に沿って出来上がったものの、台そのものが逃げた感じで見苦しく困りました。ふと思いつき、ご覧のように、台の左端の寸前に凹みを付けて貰いましたら、見事に逃げ感がなくなり驚きました。

成功です。

逃げというもの、それを感じなければ問題はありません。

石の恰好、殊に「逃げ感」を感じ取る人間の心理の奥深さ、不思議さを感じます。

さて、この石は、上下をひっくり返すと何と山形の一つになります。

山形の場合の底部とは、ご覧の天井になる訳で、座りは抜群です。次の【写真14の反転】写真15がそれです。



写真15 [左右31cm]

### 【揖斐川石・雨宿り】（反転）

【写真14の反転】写真15の方は、何故か台を静岡県藤枝市の山梨さんに依頼しています。山梨さんは、彫り込み、仕上げに電動器具を使っておられません。

そのせいでしょうか、台はいつも力強いようです。

台というものも、色々個性があって興味は尽きません。山梨さんの作では【招月】の台があります。

【招月】の台もそうですが、この石も台の力強さに支えられて、何だかごつい感じの石となっています。本人としては、毅然としたこの状態をとっても気に入っています。

言うまでもありませんが、この状態に底部は全くの平らで、「座り」はこのままです。しかし、この台を付けて戴けたことで存在感は確実なものになりました。底部が平らですので普通はもっと薄い台になるかも知れないでしょうに、

山梨さんはこの厚みの台にされました。

この厚み故に確固たる存在感になったと私は思っています。

【招月】の台とこの台とを見比べ、他の石の台とも見比べ、何かを感じて下さると嬉しいと思っています。

次に石に穴が開いているものを見ていただきます。

水石、山水石へのお誘い…



---

深 遠



写真 16 [左右 32cm]

## 【深 遠】

これは、私が持っている[穴が開いている石]の代表選手です。

[穴が開いている石]の代表選手であるのみでなく、所有できた石達の中でも出色の代表的な石です。

自然とは何とも思いも掛けないかたちを作るものでしょうか。

驚き入ってしまいます。

大垣市に住んでおられた愛好の人[川崎さん]から譲り受けたこの石は、土中から出たものであるとの話です。

陸堀り(おかぼり)業者と言い、大昔に川が流れていた場所の田圃を、持ち主と契約して何年か借り、そこを掘って建築材料に使うらしい石を採取する業者がいます。

大垣市に住む愛好の人[川崎さん]によれば、その業者からこの石を入手したとの話です。

この穴のあたりは泥が一杯で、除去するのが大変だったそうです。

この石の底部は切断ですが、上部に化工の痕跡はありません。

天井の橋(?)も天井から降りてくる左側の柱も実に薄く、このあたりを軽く叩くと金属音を発します。

硬質です。

硬質にしても、どうして、こんなに薄い天井の橋、柱が天然の地核変動などに耐えて残ったのでしょうか。

更に、この天井の橋の上の面は川擦れしていて滑らかです。

川擦れしている事は、川の流れの中にいたことを意味しています。長年の期間に、台風も洪水もあつたでしょう。

よくぞ、これらの水流で転がる石に衝突して壊れないでいてくれたと感謝です。

本当に見れば見るほど、考えれば考えるほど不思議です。

---

山水石では何故か好んで、山形、土坡形、段石などと分類をします。  
しかし、この【深遠】は、それら分類の何にも属しません。  
そうした分類に属さないにも拘わらず、この石は大自然の何かを連想させています。  
抽象的であると言うより何か具象的ですからあります。  
この格好は、人間技の及ぶものではありません。全く、想像を超越した不可解なかたちの石です。  
既におわかりのように、表紙の石です。  
またこの石は、後で出てくる【瑞稜】と同じく、京都で催される[大観展]で委員会賞を貰ったことが  
ありました。

やはり京都の建仁寺で開催される九十九会で、幸せなことに何年か続けて、奥の座敷の床の間飾り  
をさせて戴けました。その床の間は左右二間もあり広大です。広大であることは、石が確固たる「存在  
感」を持っていることが肝要です。確固たる「存在感」を得るには、先ず大きさが必要であろうと思  
いました。

そこで、最初は、左右58センチある大形の【大八洲】を床の間飾りさせて戴きました。  
予想に違わず大成功でした。  
しかし、どうしてもこの【深遠】を飾ってみたくなり、ある年にエイッとばかり左右二間もある床の  
間に飾らせて戴きました。

【深遠】の左右は32センチで、【大八洲】の半分くらいです。  
あの広い床の間で惨めではないかと、事前に心配していましたが、卓に載せ、床の間に置いてみま  
したら、何と、周囲を圧倒しているではありませんか！  
石の「存在感」は大きさで感じるものではありません。  
この【深遠】は非凡です。

普通、家では箱に入れていますが、こうして改めて見ますと、自分のものながら、物凄いと思わざる  
を得ません。  
こんな凄い石の所有者になれて私は幸せ者です。

感謝！

## 【余談です】

一般に「底部切断石」は「存在感」に欠ける場合があると私は思っています。

別の日に瀬田川石の【遼遠】と揖斐川石【泰山】とを、この床の間に飾ってみたとき、不思議な体験をしました。

【遼遠】の左右の長さは57センチ。【泰山】の左右の長さは49センチです。

それは、左右の長さに於いて有利であった【遼遠】が【泰山】より貧弱に見えたのです。

確かに【泰山】は堂々としていて、多くの人々の視線を浴びていました。

間近で見る主峰が迫力満点である【遼遠】ではありますが、それにしても何か弱いような、線が細いような感じがしました。

私は【遼遠】は「底部切断によって、欠点を全く無くすることが出来たので、優等生になってしまい魅力を失った」のではないかと考えています。

同じ底部切断の石でも、【泰山】は混然とした山岳感を見附に持っていて、それらがどっしりと大地に屹立して様子で底部が切断されています。その結果として優等生になりきれず、観る人の心に訴えるものになったのであろうと考えています。

何だか、問題が複雑になってきました。

何は兎も角、まずは、自分が良いと思っている石を展覧会場に飾って、虚心坦懐に眺めて、魅力を感じられているか、感じられないかを確かめてみるのが大切かと思いますが…。

さて、山水石を一休みして、他を見てみましょう。

---

# 庄 屋



写真 17 [高さ 16cm]

## 【庄 屋】

[茅舎] (クズヤ) といい、田舎の一軒家の家みたいな石に何故か人気があります。最近の家屋で、一軒家の趣をもつものを見ることがないのに、茅舎石は穏然とした人気を保っています。

事によると、盆栽の添え物として重宝されているからでしょうか。

揖斐川町の下流に架かる橋、[三町大橋]の東側に[堀さん]の家があります。

この家の先々代でしょうか、三町大橋が出来る前に渡し船を家業にしておられたと言います。

揖斐川には渡し船の船頭さんで、船を漕ぎながら川の水の下を眼で追っていて、良い石を集めている人がいると聞かされていました。家の中と庭に多くの石を積み上げておられたこのお家に辿り着いた時、迷わず『あの船頭さんの家だ！』と、大喜びしました。

揖斐川に石が少なくはなりませんでしたものの、今でも、拾われて積み上げられています。

交渉が纏まれば売って貰えます。

その家の裏堀にこの石は置かれていました。

平成11年のことです。その場所に、もう何十年も置かれた儘でいたようで、発見したときにもう古びた様相でした。屋根の芯がしっかりしていて、ひさしが真っ直ぐです。茅舎として雰囲気抜群。

私が持っている茅舎では最高のものです。

堀さんの家には、好き者の皆さんが沢山訪れますから、何十年もの間に、この石の姿に魅せられた人は何人もあったと思います。

が、何故か私の手元に来ました。嬉しいです。

次は[姿石]に行ってみます。姿石は主に人間ですが、生き物の姿の石も人気があるようです。

しかし、不幸にして、私は生き物の姿石を持っていません。

---

# 文明開化



写真 18 [高さ 23cm]

## 【文明開化】

揖斐川の石です。1965年頃、日本は石ブームに湧きました。

揖斐川町に、現在、[揖斐川銘石店]という店があります。

店主は、高橋克馬さん。この店主で自身が、石ブームの頃に拾ったと云う石です。ご自宅(現在、揖斐川町を出発し上流にトンネルを二つ渡ったあたりの津汲という所)近くの揖斐川でとの事でした。

現在、このあたりの揖斐川に全く石がありません。川底が露出しています。この場所には私が石を始めた頃、沢山の石がありました。川の両岸は高い山間ですから、洪水が起きる心配などある筈はありません。

石達は全部コンクリートの材料になったみたいです。何故でしょう。多くの河川から石が持ち去られ、建築資材になっているのかも知れませんが…。

何億年の歳月で蓄積された大自然の恵みなのに、ここ100年以内の文化らしきものの為に壊されてしまったのは、政治をする官僚の思慮の浅さであり、愚行に間違いありません。川が荒らされたのは、全く口惜しい出来事です。

この石は、当時に出版された色々な本や雑誌に、[文明開化]なる銘で掲載されています。

例えば、昭和43年に樹石社から出版された[愛石三昧]なる本に、[文明開化]として載っていました。

小林宗閑さんの筆跡で[宗閑]なる朱印と共に、箱のおもてに[文明開化]と書かれている[文明開化]なる銘は[愛石三昧]の著者である[小林宗閑さん]が付けられたものです。

なお、この箱には、もう一枚の表書きをした表板が付いています。この表書きは[風姿]裏に、[山口誓子]と書かれ、朱印を押されています。この時代、つまり石ブームの時代に、揖斐川方面を日本の文化人が屢々訪ねて来ておられた痕跡があります。岡本太郎の[太陽の塔]のお話もこの一つでしょうか。

平成6年に高橋さんから譲って貰ったこの文明開化は、ご覧のように何とも言えない品位のある雰囲気です。喜んでいきます。

もう一つ、姿石を見て下さい。

---

# 花 舞



写真 19 [高さ 18cm]

## 【花 舞】

名古屋市にあった浅井さんのお店で買いました。  
買ったときにはこの姿で台に載っていた訳ではありませんでした。

菊石の専門家は、石を台に載せる時には、第一にも、第二にも、花がよく見える事が条件であるようです。

前から【サバ菊】、殊に【キバ】が欲しかった私は、これを大喜びで買ってしまいました。  
山水石をスタートにしてきた私は、日を経るに従い、その台の格好に不満を感じるようになりました。

あれこれいじっている間に、この格好を思い付きました。

本人としては、この格好に大満足で、上等な桐の箱に入れ、特別扱いをしています。

【キバ】と言われる菊石で、[かたち]のあるものにお目に掛かれることは、滅多になく、昔、名古屋にあった名古屋で大変な高価であったので、手が出なかった口惜しい思い出があります。

【キバ】は、山水石を好む者には、菊石の中の一つの雄です。

次は、石の表面に何か人に訴える紋様が出ている[紋様石]を一つ見てください。

---

# 馬 座

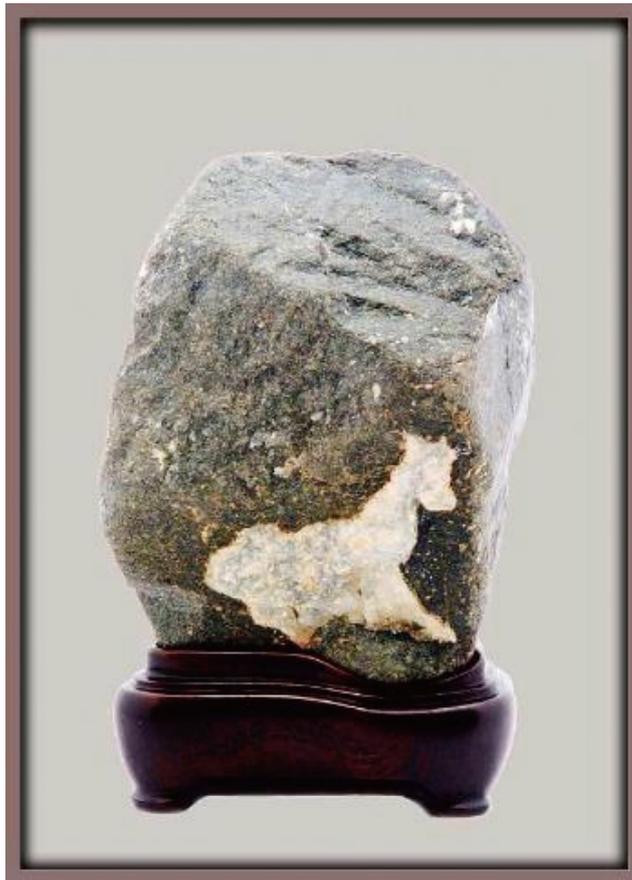


写真 20 [高さ 13cm]

### 【座馬】

平成14年の春に、揖斐川町の高橋さんの店で発見。  
買いました。

平成14年は午年でした。私は午年です。

もう一年前に入手できていれば、年賀状に印刷できたのに！と残念ではありました。

しかし、先ずは手元に来たこの石は、幸せを感じさせてくれています。  
良い石に巡り合うのは[運]しかない事のようにです。

誰が見ても、馬に見えることと、何となく若い馬に見えるのが良いです。可愛いのです。

姿石と紋様石とを見て戴きましたが、結局私の好みは、山水石に大きく偏っているらしく思います  
ので、再び山水石に戻ります。

---

# 瑞 稜



【瑞 稜】

写真 21 [左右 36cm]

---

瀬田川産です。底部は切断してあります。  
石に魅惑されて最初に買った思いで深い石。  
浜松市に住む台作りで有名な鈴木さん宅でこの石を見て買って帰りました。  
今のように石にのめり込んでいなかった当時としては高価でしたから、家で見付かってはまずい、  
とこの石を長い間棚の下に隠していました。  
何年かして見付けられましたが、大してとがめられず済み、ラッキーでした。

元々素晴らしい肌であったのですが、長い間、棚の奥にしまい込んでいたことも幸いし、長年の持ち込みになり、そのせいでしょう、この石の黒の締まりが抜群となりました。  
写真1の【大八洲】が我が家に来た時は、川から採れたままの様子でした。  
その頃【大八洲】と、この【瑞稜】との黒色を比較したら、何ともならない違いがありました。  
瀬田石の黒さは、話によれば、最初から真っ黒のものもあるそうです。が、私は不幸にも目下その手の石に縁がありません。  
【大八洲】は、後にわかったことですが、現地にあった時には、当時の所有者の物置に置いてあった  
とのことで、何しろ、激流の川から出たばかりと言う様子で、少々灰色がかった黒でした。

この【瑞稜】と較べると格段の違いです。  
【大八洲】は一流の瀬田石ではないのか？と不安になり布で擦ったり、掌で撫でたりしました。何ともなりません。  
しまいに植物油を塗ってみました。でも、黒色の深みのようなものが、まるで違います。  
とても及ぶものではありません。  
しかし、我が家に来て25年経った今日現在の【大八洲】の黒はこの【瑞稜】に近い様子になっている  
ではありませんか！  
幸せです。

これが世に言う[持ち込み味]でしょう。  
私見ですが、瀬田の真黒の感じは、瀬田独特のものです。それは、硬質であり、高密度を感じさせて  
います。  
それらの性質が、内容を感じさせ、素晴らしい[かたち]に支えられ、大きな存在感となるのです。  
京都で催される[大観展]で委員会賞を貰っています。

さて、この石の表面を近くで見ますと、実にユニークな肌を見ることができます。  
基本は[梨地肌]の範疇に入るかも知れませんが、実に綺麗な流れるような筋紋様を描いています。  
普通の梨地肌でなくて、蟹真黒の紋様を極端に細かくしたような凹みが、その綺麗な流れるような  
筋紋様に沿って散りばめられている様相は、何とも美しいものです。  
他の瀬田川石では、見た事の無いものです。

うまく写真を撮る事が出来ましたら、次回掲載します。  
しばらくお待ち下さい。

---

# 悟空峰



【悟空峰】

写真 24 [高さ 41cm]

この石は、揖斐川の産です。

水石の世界に登場したのは揖斐川の方が先輩であったかのように聞いていますが、最近は何故か佐治川石に人気があり、揖斐川石は二番手になっている様子です。

しかし、揖斐川の石にもすてい石があります。

前に出てきた写真16の【深遠】など、文句の付けようがありません。

この石も質に於いて典型的な青黒石で、一流の質と色合いを持っています。

孫悟空しか登れない山という思いで【悟空峰】と銘じました。

私は、右側の低い方の峰を主峰と感じて見えています。

この見方に異論のある人もあるかと思いますが、この感じ方はいつの間にか私に根付いてしまいました。

しかし、このように感じてみますと、どこことなく広く伸びやかな世界が展開する場面が多いことを私は経験で知っています。

水石は、何故か何形かに分類する癖があります。

しかし、天然に出来てしまった石を相手に、型にはめようとするのに懸命になり過ぎるのは、いかなもののでしょうか。

あの【深遠】もこの【悟空峰】も型にはまりませんが、展覧会への出品で、共に大きい反響を得ます。

この反響の大きさに意を強くし、これは、視覚の本質をわきまえた上で、イメージに自由を与えることを行って選ばれた結果であるからと考えています。

その結果、石を選ぶこの姿勢に新しい将来があると考えに至りました。

---

# 白倉谷の石



写真 25 [高さ 16cm]

### 【白倉谷の石】

揖斐川町の上流に[白倉谷という谷]を抱える山から揖斐の青石が出てきたという説があります。

その谷を登ると青石の原石があるとかで、登る人が多くありました。

この石は、昔にここを登った人が、揖斐川町にある高橋さんの店に纏めて譲られた中にあるものの一つです。

この状態で底になっている面だけは切ったような平面ですが、他は触ると手が痛くなるような肌です。

前の【悟空峰】も似ていますが、悟空峰はまだ川擦れの部分を残しています。

さて、私はこの石も、前の【悟空峰】と同じく右端にある小さい突起を主峰かのように見えています。すると、左側の流れのような部分が、返って伸びに感じられ、左下の変化も全て良いバックアップの役目をしている思いがします。

何と不思議なことでしょうか。

次は左右11cmの小さな石です。

---

# 大 觀



写真 26 [左右 11cm]

## 【大 観】

景抜群。台なくてもこの様子で安定し、底は平ら。

座り抜群。

山のようにあり、土坡かも知れなく、小さいのに多くの山水景を持ち、それでいておおらかなものを全体に醸し出しています。言うまでもなく稀有な石です。

産地は員弁川。大垣市に住んでおいでの「川崎さん」という友人宅の庭の石置き棚にこれはありました。まだ、土にまみれていて白い色であったこの石を手に取り『これいくらで売ってくれる？』と聞く私に、彼は『上げるよ』と云いました。貰ってしまったものです。

この「川崎さん」は【深遠】【大観】【崎橋】など素晴らしい石を私に譲って下さっています。

しかし、残念なことに去年(2006年)に亡くなられました。今になって思えば、水石の鑑識眼で一流のお方であったと思います。誰にも寿命はあるものなので、致し方ありませんが、惜しいお方でした。

さて、この【大観】は小さい石なので、毎日持って歩き、手で撫でている間に見事に濃い色となりました。

我が家で最高位の石の一つです。稀代の名品ではないかと、ほくそ笑みます。入手した頃より、十数年経ったこの頃益々貴重な石に思えてきています。今も私の枕元がこの石の住所です。枕元を住所にしている石は、他に二つあり。【文明開化】と次の【光悦】です。

さて、このあたりで、自採石を中心に述べさせてください。私は、自採も買った石も同じ土俵で感じられるように心掛けています。石を買う場合でも、幸運がなければ自分のものになりません。石は製造したものではない為に、デパートみたいな場所で何個も同じものを売ってはいません。いくらお金を積んでも縁が無ければ自分の家には来ない訳です。石を拾うのも同じです。結局は「運に恵まれる事と優れた鑑識眼」を持つことです。

そうなりますと、買えた石も幸運と鑑識眼のおかげとなり、つまりは、幸せ感に於いては同じ気持ちです。

とは言うものの、自採の石というものはどこかで違う思いがしているかも知れません。

自分ではよくわかりませんが、この先、何個かの自採石を見てください。

---

## 員弁・自採山



写真 27 [左右 26cm]

## 【員弁・自採山】

1980年頃でしょうか、ある朝、員弁の支流に入りました。

川に降りて10分くらい歩いた時、足下の砂の中に埋もれた質の良い石を見て、ひっくり返したら、この山ではありませんか！大喜びでこれを持って家に直行。家に着いたらまだ昼前でした。探石で後々残せるような石が拾える可能性は、百分の一もありません。つまり、探石に100回出掛けて1回もない訳です。だから、こんな石が拾えたら満足で、いち早く帰りたくなったのです。探石と言えば、河原では正確な判断力を失うらしく、帰って家に入り、拾った石を取り出した瞬間に「何故こんな石を拾ったのか！」と思う事が多いものです。買うにしてもそんな感じがあります。共に失敗が多く、それらの石は庭に積まれています。

もっとひどい話は、台を付けてから失敗に気付く事です。台を付けた石は、約300個あります。今回、全部写真を撮って初めてわかったのですが、こうして掲載したくなる石、又は石展に出品できる石は100個あるかないかでした。

台に載せますと簡単に捨てられません。もう！始末に困ります。何故？と反省しきりです。

何しろ成功する打率は3割以下ですから情けないです。最近拾うにしても買うにしても、そう頻りに石を持って帰りませんから、打率は少々あがったかも知れません。

しかし、去年(平成15年)に、25万円も出して買った石がハズレみたいでしたから、まだまだ偉そうな事は言えません。

どうも、私は石好き過ぎて「愚」から抜け出せないらしいです。私見ですが、石集めは「狩猟本能」に支配されているのではないかと思います。何しろ貪欲に獲得したくなるからです。困ったものです。石好きとは「業(ごう)」のようなものから抜けられないものであると思っています。

さて、この石は言うところの「青黒」で、現在の員弁川ではあまり見掛けません。見ての通り、中央部に溜まりもある二つ山で、まあ良いです。ただ、人によっては、副峰の端、つまり左端の突端が宙に浮いているのがお気に召さないかも知れません。しかし、不思議ですが、主峰側が地面に踏ん張っている格好をしていれば、副峰側は浮いていても平気のようです。

この点に関して、別項目【主部 副部】を設けて追ってみたいと考えています。

なお、この石の台は浜松市においでの方の台製作者「鈴木さん」の作です。

複雑な底部にも拘らずご覧のように力強い仕上がりになっていて有り難いと思っています。

---

光 悦



写真 28 [左右 11cm]

### 【光 悦】

これは庄内川の石です。

自分で拾ったから間違いありません。  
虎石のたぐいです。

虎石と言えば先ずは瀬田川でしょう。  
庄内川にも虎模様の石を沢山見ることが出来ますが、多くは、何故か黄色が薄くて、中には灰色になつたりして冴えません。

この石は実に綺麗な色をしていて、格好も、川ずれの具合も良いです。  
私の手元を離れた後に流通するとすれば、恐らく瀬田川石に化けるでしょう。

何でもない河原に転がっていました。

石探しに疲れて車に帰る時に足下にあるのを発見です。

こうして久し振りに写真を見ると、石は拾うのも、買うのも運であると実感し直してしまいます。

大観と光悦は、小さいながら共に業者諸氏に興味を持たれます。良い石だからでしょう。

---

# 枯れ瀧



写真 29 [左右 19cm]

### 【枯れ瀧】

石に魅せられた当初、やたらと川に入りました。

最初は、名古屋市を流れる[庄内川]を専門にしていたのですが、揖斐川が超有名であると聞き、揖斐川に入った初期にこの石を拾っています。

台に載せていますが、底は真っ平らで、座りもこのままの姿です。  
揖斐川町に岡島橋があります。

この橋の下流左岸の車が降りる道の土手にこの石は転がっていました。  
しつはの基本は「青」でしょうが、表面は錆？のようなもので覆われ、これが濃い茶色になって、三十年以上経った近頃では黒い感じすらします。

中心に瀧が残っていたら、天下一の瀧石になったでしょうが…。  
拾った当時は、まだこの石の良さがわからなかったようです。  
当時名古屋にあった石のお店でこれを見せました。  
何故か、当主からボロボロの評価を貰いました。

しかし、「松原さん」という大先輩は激賞！  
そのお陰で元気を出した初心者の私は、その後、続々とよい石に巡り会って、今日となっています。

その契機になった思い出の多い石です。  
しかし、実は、揖斐川で拾った石で現在(2007年)までの最高のものでもあります。

---

萌



写真 30 [左右 29cm]

### 【萌】

これは、2003年に揖斐川で拾っています。

随分硬質のようで、単なる青石とはひと味ことなり、変に重いのです。

山の格好が良いと思い台に載せて貰いました。

揖斐川には、飽くほど入りましたが、情けないことに、自採石で、見て戴けそうな石は、結局この石と【枯れ瀧】の二つだけです。

この石は、無理矢理台を付けて貰って、やっと2個目の自採揖斐川石の登場となったわけです。

やはり、この程度の石ですと、自採だからと許して台に載せ、写真も載せて憚らないというレベルの石でしょうか？

自ら迷っていて変です。自採石というものはこうしたもののようです。

---

# 探石 第一号



[左右 26cm]

### 【探石 第一号】

前にも書きましたが、庄内川の上流は土岐川と名を変え、岐阜県が多治見市、土岐市などを流れる事になります。

JR中央線が多治見市を過ぎて名古屋に入る前に、トンネルが沢山ある地域を通ります。このあたりの線路の脇を庄内川上流の土岐川が流れています。

この地域の真ん中のあたりが愛知県と岐阜県との県境になっています。

この県境にあるJRの駅・古虎溪駅の下の河原でこの石に巡り会いました。

石に魅せられた元は、とある音楽の友人宅で[山の格好をした石]を見せられた瞬間に理由なく一挙にのぼせてしまった事にあります。

その友人に連れられ、最初に行った河原がこの古虎溪で、その初日にこの石を拾っています。今見ますと、主峰の後ろに少し不満がありますが、それよりこの緑を主体にしたこの質が、土岐川・庄内川には珍しいと私は思っています。

この石と同じ質の石を、庄内川でもう一つ拾っています。

【庄内川緑山】と称し、バックに空と雲を入れた写真を載せています。

是非、ご覧下さい。

---

# 高溜まり



写真 31 [左右 27cm]

### 【高溜まり】

庄内川の石です。庄内川に吉根橋(キッコバシ)という橋が架かっています。

この橋の左岸下流の河原は、今でも石が拾えますが、昔はもっともっと沢山の石がありました。

私は、前からこの河原で度々良い思いをしています。

ここに掲載している中では【武蔵岳】【久遠】などがあります。

この【高溜まり】は、石を始めた頃頻繁にここに行っていて、巡りあっています。

この石の右上に欠けたような部分があります。

この石が河原にあった時は、この尖った部分だけを砂の上に出して、左側を下にして深く埋まっていた。

バールで懸命に掘り出して見たら、何と梨地肌ではありませんか！  
欣喜。

台は、浜松市の鈴木さんです。鈴木さんは洒落た感じの台を作って戴けます。

---

# 武蔵岳

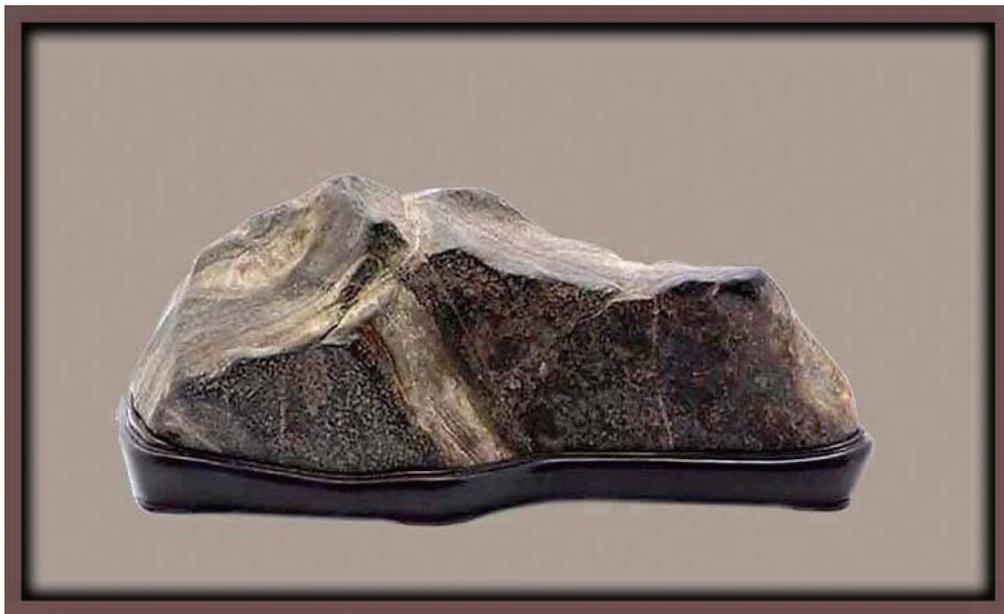


写真 32 [左右 31cm]

### 【武蔵岳】

この石も吉根橋の河原で拾いました。  
前の【高溜まり】より大分後のことです。  
一時、この河原にブルドーザーが入り、石を根こそぎ持って行ってしまいそうな勢いでした。  
そんな時期の或る日曜日。  
彼らは休みです。

そこで掘り返して出てきた石を山に積んでいました。

その石の山の中にこの石はありました。  
地中の可成り深くに長年にわたりあったものだったらしく、表面が深めに浸食していました。  
手で擦っても手が傷つきますし、布は破れてしまいます。仕方なく軽くガラをかけて貰いました。  
成功です。

もちろん、切り石ではありません。  
蟹真黒らしきところもあり、また別の質のところありで、種々な質が混然としています。  
一般に、質が混然としている部分が、複雑な格好になるようです

瀬田川石【大和】・庄内川石【久遠】・【松川山】とこの【武蔵岳】などは、質が混然としている部分が多くて、山水石となったものの典型でしょう。

庄内川の石にも、瀬田川石にもこの傾向が見られる感じがしています

---

# 松川山



写真 33 [左右 14cm]

### 【松川山】

庄内川の松川橋下の河原は、私が石を始めた昔に、庄内川の探石地として、第一に有名でした。が、その後、石はコンクリートの材料になったのでしょうか、現在では殆ど見当たりません。

2000年にこの河原を「情けない思い」と共に散策しました。

少しまばらに石が転がっていましたが、累々と石が重なっていた昔の面影はありません。

それでも、それでもと歩いていたら、足下にこの石があるではありませんか！

驚きです。

庄内川石として珍しい質の石ですが、格好が良く、流れるような線が秀逸であると、大いに喜んで  
います。

左右は14cmです。

---

# 庄内黒石



写真 34 [左右 17cm]

### 【庄内川・真黒石】

これも2000年に拾っています。

松川橋の下流に、来る人もそれ程なく、ブルトナーの姿を見たことなく石がある、という河原があります。

堤防にしか車を置けませんし、道からの距離も結構あって、つい足が遠のきます。  
この河原で、この石は横たわっていました。

難なく発見です。

もうこの河原は、何回も行っていました。どう言う訳かこの日に突然目の前に現れた感じです。  
全く不思議な経験です。

底面は切ったような平面です。座りも万全です。

庄内の真黒石とは、普通梨地肌が殆ど全てと思われていますが、この石は違います。  
その上、硬質です。

生涯に何個も拾えないものの一つと思っています。

---

# 久 遠



【久 遠】

写真 35 [左右 33cm]

これは切り石です。

石を探し始めた頃、庄内川、揖斐川に出掛け石を切ることに熱中した時期がありました。

理由は、何しろ山の格好をした石を無性に欲しいと思ったからです。

毎週のように、静岡市にあった[武田石切所]という店に出掛け、飽くことを知りませんでした。

当時の武田石切所には、多くの業者が来ておられました。今から思えば、無茶な私の言い分を、呆れて見ておられた業者の皆さんであったと思います。

その切断と仕上げの現場で、私は[逃げのないこと][主峰などが石の中心に向かっているべきこと][主峰などがうしろに倒れていないこと]などに、大変に拘っておいでの業者の皆さんを見て、その理由に就いて考える契機を得ました。

業者の皆さんは「売れる石」を得なければなりません。故に、その人達は、より多くの人達が納得する格好の石を選んでいる筈ですから、そこには、何か理由があると思った私は、その後、その理由を考え続けていました。

過去の[水石]に関する記述の中で[逃げのないこと][主峰などが、石の中心に向かっているべきこと][主峰などが、うしろに倒れていないこと]に就いて語られたものを全く見ません。

しかし、これら[逃げのないこと][主峰が及びその他が、石の中心に向かっているべきこと][主峰などが、うしろに倒れていないこと]は私の創作ではありません。

武田石切所に通っていた当時の石のプロの皆さん(当時日本を代表する業者の人達が多く来ておられました)が、問題にしておられた事であったのです。

そして、その理由を考えて得た結論

[逃げのないこと]

[主峰などが、石の中心に向かっているべきこと]

[主峰などが、うしろに倒れていないこと]

この3項目は、盆栽は言うに及ばず、生け花にても当然の如く守られている事です。

盆栽、生け花と同じく、皆さんに観て戴く事で成り立っている水石の世界で、これらの項目が話題になっていなかった事に、不思議を私は感じています。

出来れば、水石を愛好する私たちは、この3項目に敏感でありたいものと願っています。

---

さて、武田石切所は現在ありません。私が通っていた頃は、まだおじいさんが仕事をしておられました。

後に、息子さんの[浩ちゃん]が仕事をするようになられました。若くして肺癌になられ、亡くなりました。

アスベストを吸い込んで肺癌になる話は普通に聞きますが、石の加工を仕事にしている肺癌になった人は、名古屋市内でも2人あります。

石は無機化合物なので、石の粉末が肺の内部に入ると二度と外に出ることはありません。

タバコのヤニなどは有機物なので時間をかければ外に出るようです。肺の外科手術専門のお医者さんが、禁煙して10年位で肺の組織の黒みが少し減ると言っておられました。

兎も角、[浩ちゃん]は稀に見る良い仕事をしておられました。惜しい人でした。

底の切断は、最初に石を水槽に浮かべて切る面の線を出します。

この線を出せば、後は機械がします。

しかし、肝心な仕事は底の切断面の縁の丸め方です。

これは、手仕事です。私は、今までで一番丁寧な仕事が出来た人は、この武田の[浩ちゃん]であったと思っています。

この石の底の丸めを見事にしたのは、武田の[浩ちゃん]です。故に、この石に私は格別の想いがあります。

さて、この石は、やはり吉根橋の下流です。いま見えている部分の倍位の大きさの石でした。余り見掛けない質です。虎石に見られるような部分もあります。

良い格好をしています。沢山の庄内川石の切断をしましたが、この石以後庄内川の石の切断はしていません。

それにしても、第40回東海石友会展覧会で、会場の一番隅にこの石を置いていましたが、多くの人々が立ち止まり、見詰めておられました。

きっと、存在感があったのでしょう。

最近にある業者さんが来られました。

『これ瀬田ですか？』と聞き、ジッと見詰めておられました。

そして一言『良いですね』

私は大満足です。

さて、このあたりで自採石特集をおわります。

水石、山水石へのお誘い…



---

## 主部 副部

写真27の員弁川の自採の石で「主峰側が地面に踏ん張っている格好をしていれば、副峰側は浮いても平気のようです」と書きました。

このお話を、実例を見て戴きながら、説明したく思っています。

まず、最初に主峰が地面に踏ん張っている必要に就いて、すこし追ってみます。



【員弁川石】



佐治川石【蓬 菜】  
[左右 14cm]

左側の員弁の石は、主峰の下の部分の石がありませんから、台を足して貰いました  
しかし、矢張り、右の佐治の石にはかないません。石中央部の変化など員弁が良いようではあります  
すが、安定し落ち着いた趣で見る人に好まれるのは、明らかに佐治です。

このように、主峰の下部の踏ん張りは大いに、大事なものであると考えるべきです。

次の二つの石の右側の員弁石は、このテーマ、つまり「主峰側が地面に踏ん張っている格好をして  
いれば、副峰側は浮いても平気のようです」の結論に至る契機になった石です。



【揖斐山形石】  
[左右 14cm]



【員弁山形石】

ご覧のように員弁山形石の副峰の先端が、このように浮いていても、何の不都合も感じません。  
従って、左の揖斐の石を、関市の石好きのお方の家で発見し、同じ様子の台を付けて貰いました。  
私は、この揖斐川の石を格好良いと満足しています。

つまり、主峰の下部が確実に地面に安定していれば、副部は浮いていても  
問題はないらしいと言っています。

そうであれば！という訳で、次の41.【招月】から47.【豹点】までの石をみて戴きたく思っています。

---

# 招 月



写真 36 [左右 43cm]

## 【招 月】

瀬田川石です。

瀬田川では、この石のように[ジャグレ]を思わせる変化の多い石を何故か[蓬石]と言います。

蓬石の呼称の元は蓬の色をした石が瀬田川にあるからです。

これらの蓬色をした石に[ジャグレ]を思わせる変化のある石が多く見られます。恐らくこの結果でしようが、[ジャグレ]を思わせる変化の多い石を[蓬石]と総称するようになったと、推測しています。

瀬田で有名な石は主に梨地肌真黒、虎石などですが、これらの石に[ジャグレ]を思わせる変化は見られません。

他の川と同じく、瀬田川も多様な石を産します。それらの多様な石の中に、[ジャグレ]を思わせる変化の石があっても何も変ではありません。しかし、さすがに瀬田川だと感心しますのは、この[ジャグレ]を思わせる変化のある石も、とても硬質な石が多いことです。

瀬田川には、水中に潜って石を探す人達があります。

この石は、この人達によって川底から揚げられた石であると聞かされています。

平成になってからの出来事であるそうです。あの激流の瀬田川の中で、よくもこんな格好を保ち続けられたのだと、驚きます。

京都・九十九会では、水盤に横にして出品されていましたが、私はこのように立てて、台を山梨さんに作って貰いました。山梨さんらしい台の足で更に格調が出てきました。

主峰が、がっちり踏ん張っているので、長くのびた腕が、優しさすら醸して月を招いています。

そして、【招月】と銘じ、山水石の一種と思えることになりました。

では、更にもう一つ見てください。

---

# 崎 橋



写真 37 [左右 21cm]

### 【崎 橋】

大垣市の[川崎さん]に譲って貰いました。  
その名に因み【崎橋】としました。もう記憶にないほど昔の事です。  
一応、台に載せていますが、座りはこのままです。

[かたち]に何種類もの見方があり、色々の方向から見られそうで、あれこれやってみました  
が、結局この見方が一番であると思っています。  
大変な硬質で、叩くと美しい金属音を発します。  
昔は、揖斐川にも素晴らしい質の石があったのであると、改めて思います。  
それにしても、この石も、川の中でよくぞ折れなかったと感心です。  
石そのものにも、運のようなものがあり、現在まで極度に強い衝撃を受けずに生きて来られた？  
この石のようなものもあるのでしょうか。  
この石の中央下部だけを見ると「抜け」の感じになります。  
この下部だけを選び青空と雲を入れてみました。  
※〈雲入り写真:130-揖斐洞〉をご覧ください。

さて、この石にしろ、招月、深遠、深山など、矢張り幸運に恵まれた石であるようです。  
次は、石の一部に平面があるのを喜ぶ傾向がありますから、その手の石を見て下さい。  
石の一部に平面があるのを喜ぶ傾向は、武田石切所に通っていた頃の業者の皆さんの傾向でもあ  
りました。

結局は、[平野]から受ける印象が、思いの外[強い]からであろうと私は思っています。  
平野に突起のある石は[段石][土坡石]などと言われ、もはや市民権を得ています。  
しかし、平らな面だけの特徴とする石で印象的な石もあります。

---

# 香 流



写真 38 [高さ 23cm]

## 【香 流】

瀬田川の梨地肌真黒石です。

武田石切所に集まる業者諸氏の中に、当時有名だった有沢さんがおられ、彼のお宅を訪れ買った石です。

美しい肌と漆黒の色。

流れるような線があるにしても、この石から上面の微妙な変化を持った平らのかたちを変えたら、魅力のない、平凡な石になってしまいます。

つまり、上部の平らがこの石の[肝]であると私は言っています。

名古屋市に[香流]と書き(かなれ)と読む川と地名があります。  
何とも美しい響きの名前なので、この石の銘にしました。

上面に平らがあるので、左下の上を支えるような部分に、力を感じます。  
それらが相俟ってこの石に動きを感じさせる魅力になっています。

結局は、上部に平らがあるからです。  
まず、平らというものが持つ意味は大きいようだと思います。

---

# 飛台・天空台



【飛 台】

写真 39 [左右 21cm]

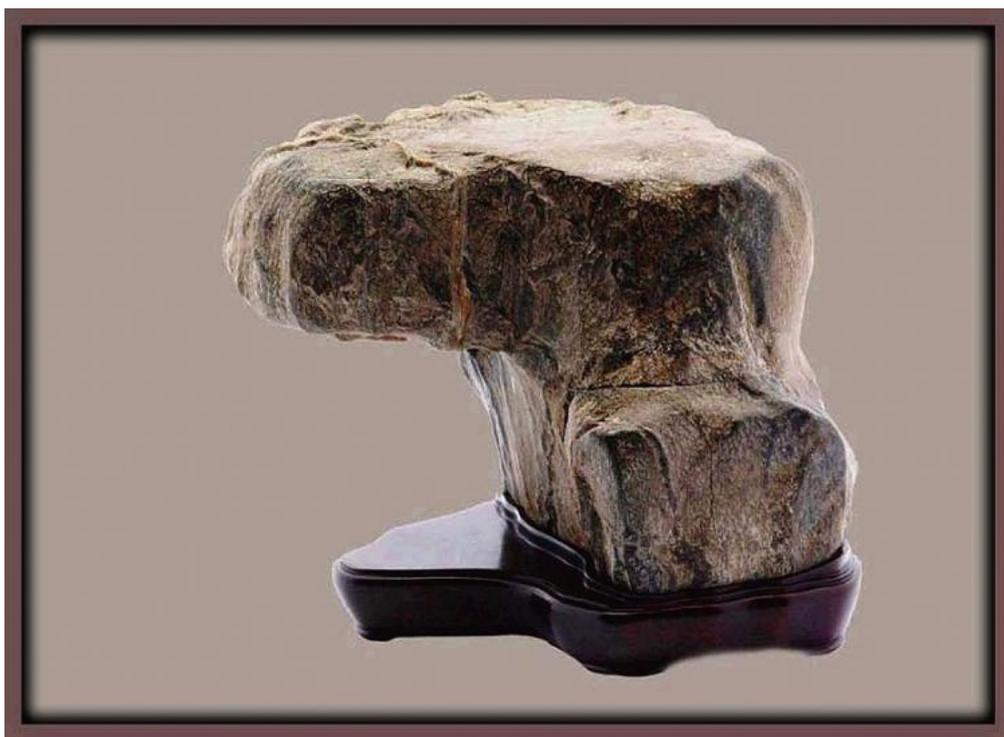


写真40 [左右 25cm]

### 【天空台】

写真39の【飛台】は揖斐川の石です。質は普通の青石です。

写真40の【天空台】は、何とか段石にならないかと思ったのか、名古屋にあった或る石店の奥の庭に転がっていたのを買いました。

段石にするには少々無理があるようでしたので、上下をひっくり返してみましたら、この格好になりました。

展覧会に出品しますと、他を圧倒する存在感を示します。

成功です。

さりげない曲線と部分的に見え隠れする梨地肌などで瀬田の石に違いなと思えますが、何の質かはわかりません。

この二石は、同じパターンの格好のものです。

**【香流】とこの二つの石を見ていて、上部の平面を支えている平面の下部のおもむきに、変に魅力を感じるのは、何故でしょうか。**

**益々、不思議です。**

さて世に、これらの格好していて、平らを持たなく、上部が外側に出ているのをイメージした石を「跳ね出し」と言い展覧する人もおられます。

次は、「跳ね出し」に行ってみます。

---

# 小宇宙



写真 41 [左右 21cm]

### 【小宇宙】

この状態をひっくり返しますと二つ山に溜まりを持つ格好になります。

しかし、どこかに不満を残していて、結局この格好で台を付けることにしました。  
これを展覧会に出品すると、まあ評判が良いようで喜んでいます。

大地を踏ん張っている感じに支えられ、結構、見どころが多様で、視線がさまようからでしょうか。

小宇宙なる銘は、私たちの会(東海石友会)の会員の一人、赤松さんが見た瞬間に【小宇宙】と言ったからです。

また、神戸(揖斐の地方では神戸をゴウドと読みます)町に、歴代揖斐川の石を拾い集めて、庭に積み上げておられる家があります。

その家は[竹中さん]といいます。  
この家の現在の当主氏によって、1998年にこの石は拾われました。

他にもこの家で入手した石はありますが、このホームページに掲載したものは、この石と【伊吹】のみです。

最近、手持ちの石が増えてきましたから、機会を設けて、写真を撮影しページを加えたく思っています。

---

# 豹 点



写真 42 [左右 18cm]

## 【豹 点】

この石は典型的な瀬田の[豹点]です。  
据わりも良いし、洒落た感じで気に入っています。  
目下、台に載せていません。

台に載せない方が締まった様子で、素晴らしいと感じているからです。  
このホームページを作っていて、ある日、雲と空を入れたらどんな感じかしら？と思い付き、いろいろ写真を作りました。  
この石に空と雲を入れたものを見たときに、卓越した山岳感をこの石の上部が持っていることを発見。驚きました。  
で見て戴けます。

なお、この上部は、跳ね出しの魅力により更に確固たるものになっています。  
【41\_主部 副部】で[主峰の下部が確実に地面に安定していれば、副部は浮いていても問題はないらしい]と書いて以後、【42\_招月】【43\_崎橋】【44\_飛台】【45\_天空台】【46\_小宇宙】【47\_豹点】と、続けてご覧戴きました。

これらの石には各々特色はありますが、[下部が確実に地面に安定している]こと、[大地に踏ん張っている]点で共通しています。  
そして、それ故に安定し、この安定感が大きい魅力を得る原因であると考えています。

さて次は、分類し難い変な格好の石を一つ見てください。

---

# 天 空



写真 43 [左右 30cm ×高さ 30cm]

## 【天 空】

石の好みで、[溜まり]があると喜ぶ、[瀧]があると目を輝かすとかの人たちがおられます。また、この石のように、[抜け]のあるのに特別の思いで嬉しがつて貰える人も見掛けます。表紙に出てきた【深遠】もその一つです。

【深遠】は揖斐川の石ですが、この【天空】は員弁川の産です。この二つは、共に山水石の何形と言う分類に入りませんが、何か自然の風景のような気がするところが気に入っています。

この石の天井の橋は、強靱に出来ていて、その点【深遠】のような繊細さはありません。しかし、石全体から、[強さ]の印象を受け、強い存在感を醸しています。

---

# 矢合川石 1

水石の産地として全国的な知名度はゼロに近いでしょう川、矢合川(ヤゴウガワ)は三重県にあり、名阪高速道路四日市インターの近くを流れています。

この川を私が知ったのは、名古屋市にあった水石の店“奈古埜”です。

店主の話では、石ブームの頃店を訪ねたある人が、店にあった瀬田川の石を見て『この石と同じ石が家の庭にあるよ』と云ったとのことでした。

どこに住む人かと確かめたことに端を発し、私は矢合川に辿り着きました



[左右 13cm]

【矢合川石 No.1】

---

三重県で有名な産地は、ご存じでしょう員弁川と青川です。

それにも拘わらず、私はこの矢合川とその南側にある無名な川あたりから探石を始めています。

この矢合川は田園地帯を流れるとても細く目立たない川です。場所は、名阪高速の四日市インターを出て西に行き、初めての道を南、つまり左折します。踏切をこえてほんの数メートルでこの道は橋を渡ります。この橋の下を流れるのが矢合川です。最初の探石場所は、この橋を渡らないで手前の川に沿った道を左折します。

すると、先ほどの名阪高速の下に行きます。ここで車を停めて川に降りれば、もうそこには瀬田川石のような質の石があります。

この川は東西に流れています。この場所の上流に行き左右を眺めると分かりますが、川の南と北が丘陵になっています。丘陵に挟まれた盆地？のような平野の一番低い場所をこの矢合川は流れているわけです。以前この川に入った時に雨が降り出しました。急に増水して慌ててかけ登り難を逃れたことがあります。後にこの地域に住む人に知り合いがいて聞きましたら、ごくたまに集中豪雨があり、この小さな川は氾濫すると言いつたに聞かれています。

あの増水を体験しますとそれは本当であろうと納得します。『この石と同じ石が家の庭にあるよ』と云った人の家は、恐らくこの川の近くにあったのでしょう。きっと氾濫によって川から飛び出した石が庭に転がったのであろうと思われる。

さて、矢合川石の一番目に登場したこの石は、1998年に東海石友会石の探石会で矢合川に行った時、丁度名阪高速の下で見付けています。ご覧のように梨地肌です。名古屋市に住んでいるからでしょう私の好きな川に庄内川があります。庄内川石にも梨地肌があり世間では“瀬田川と類似している”と云われています。

しかし私は、見たところ類似は感じますが、同じ種類ではないと考えています。その理由は、或るハロゲン水素酸に対する反応がまるで違うからです。それは瀬田川の梨地肌の石の表面をグラインダーで削り、庄内川石の梨地肌の石の表面も同じく削り、その石を、例のハロゲン水素酸に漬けて置きます。

その後、石を取り出しワイヤーブラシで擦り表面を観察しますと、瀬田川石は梨地肌の凹みになりますが、庄内川石は凸になるのです。何故かは全く知りませんが、似た様子の梨地肌でも、化合物の組成が瀬田石と庄内川石とでは違うと見るべきです。

しかし、この矢合川石の反応は瀬田川石と同じに凹みます。つまり、矢合川石は瀬田川石にとっても近い質の石であると私は考えています。もう一つ、庄内川石が異質である話があります。どの川の石でも、川の水流の中で擦れを経験中に発見されたものと、大昔に擦れたもののその後何かの理由で地中などに埋まり、浸蝕を受けた石を発見することがあります。後者を瀬田川石では“沢石”と云っています。

瀬田川の沢石は表面が浸食を受けていて、表面をワイヤーブラシで擦りますと、土埃のようなものが出て思いのほか減ったり凹んだりします。庄内川石でその手の現象の石を見たことはありません。ブルトーザーが川底を掘り返し揚げた石でも庄内川石ではワイヤーブラシで土埃を出しません。

しかし、この土中に長くあった矢合川石は土埃を出します。矢合川のある支流を深く中に入りますと、支流の流れに沿って出来た藪が川の流れで下から崩れて、石が藪の竹の根っこの下に土にまみれ累々と積み重なっている場所があります。

その場所は何百年～何千年～何万年前に川であり、地殻変動で地上に盛りあがった様子です。そこには過去に川擦れした痕跡を持つ石があります。その石を持って帰りワイヤブラシで擦りますと土埃が沢山出ます。この場所で見付けワイヤブラシで土埃を取った石は、次の[矢合川石No.2]です。

さて、この[矢合川石No.1]主峰の格好を滅法気に入っています。この主峰の格好をした山はきっと現実にあるものではありません。しかし、屹立した感じに心惹かれるのは私だけでしょうか？矢合川の水の流れは実に緩慢です。

この緩やかな水流がこの石の滑らかな面を作ったとは思えませんから、大昔に急峻な水流がこのあたりにあったと考えるのは楽しいではありませんか。

---

## 矢合川石 2



[左右 19cm]

## 【矢合川石 No.2】

これは前項で述べた石です。  
長年、地中に埋もれていたこの石はご覧のように川擦れはありません。

この石の質の基本は梨地真黒です。

最初手に取った時には梨地肌を感じなく灰色をしていましたが、ワイヤブラシで出る土埃にめがず擦り続けた結果梨地真黒となり大喜びです。

土埃が表面を覆い尽くす程の浸食を受け、土中にあった時間とはどんなに長いものでしょう。何は兎も角、この石の持つ曲線は過去に川擦れしたものであると考えた方が納得しやすいです。

地球の地殻変動とは凄いものです。

地震が心配なこの頃ですが、この石が地中に埋まったような地殻変動を経験したくありません。これは座りはこのままでOKで、台は更に良く見えるようにと付けたものです。

主峰が石に中心に向かっていて石の中央部に視線が安定します。

---

## 矢合川石 3



[左右 17cm]

### 【矢合川石 No.3】

ある日、矢合川に到着したら雨です。

水は増えてとても入れそうにありません。  
仕方なく測道を歩きました。

その頃の測道は舗装されていなくて農耕機が移動する道でした。  
その道の真ん中に梨地肌らしい石が、ほんの少し見えました。

硬い道路の土を懸命に掘り返してこの石は得られました。不幸にも、ご覧のように中央部が欠けて見えます。これは、農耕機のキャタピラーによって傷ついたものです。

残念ですがまああの格好なので台に載せました。

鑑賞用としては問題がありますが、川擦れの味を残した山形石で瀬田川石に酷似していましたので台に載せてみました。

でも、この石には瀬田川石に見られる流れるような曲線・曲面が少なくそれほどいい石とは思えません。

底部は天然です。

---

## 矢合川石 4



[高さ 21cm]

#### 【矢合川石 No.4】

私は下流の出発点を名阪高速四日市インターの下とし、矢合川を上流まで全部、川底をヨタヨタと歩いたことがあります。歩いた感じでは源流？の辺りは平野の途中で変哲のない小川になり、水も石もなくなっています。

歩いている前方には、鈴鹿山脈が立派に聳えているのに情けない思いをしました。故のない実感ですが、ここにある石たちは全体に大昔の地殻変動前に出来たものであろうと思ってしまいます。

さて、この石は名古屋市にある自分の会社で仕事中の午後、きっと暇だったので、急に矢合川に行きたくなり行ってしまいました。

その時にこれを発見しています。発見したときは川の水たまりの中にあって、水藻に覆われ何の質かわかりません。持ってみると重かったので、期待して持って帰りました。洗ってみましたら、ご覧のよう良いものでした。台は浜松市の鈴木さんです。

鈴木さんの台はいつもお洒落です。台に載せた石を展覧会に出品する、つまり見て戴く場合に、台に付いた左右の端の二つの足は、見る人から等距離にあるべきであるとされています。

足は左右に一直線上にあるべきとなっている訳です。

そうしますと、この石は変な格好に置かれていることになります。

私は、この石の正面は左下の足と右奥の足を結んだ線を左右に一直線にした線を正面としています。

中央の足は、単なる出っ張りであり、その出っ張りの左右に[逃げ感]を感じないから問題ないと考えています。

さて、本文で九十九会初代会長さんの石【雲の平】のお話をしました。

そこで庄内川石を一つ写真で紹介いたしました。

しかし質感・存在感などではこの石の方が良いように思います。

例の名古屋にあった瀬田川石好きで有名だった水石の店、奈古埜の当主に見せたとき、一見して瀬田川石と思い込み『良い石だ、良い石だ』としきりに感嘆しておられたのを思い出します。

『この石は矢合川石ですよ』との説明に絶句しておられました。

---

## 矢合川石 5



[高さ 14cm]

### 【矢合川石 No.5】

これも現地に着いたら雨で川に入れないから、堤を歩いていて堤の途中にあるのを発見したものです。

最近の矢合川は護岸工事が進み、道路も舗装され地上での石の発見は期待できません。

色合いは茶色でこの手の石は瀬田川には見られません。

この川には瀬田川にない石も沢山あります。

これもその一つです。

でも不思議にどこかに瀬田川石の雰囲気は持っています。

本文で平野を持つ石の話題の時にこの石を載せようかと思いましたが、何となく他の石になってしまいました。

この石は写真であまり明確に分からないかも知れませんが、上部が手前に出ていて重心は可成り前に来ています。

よくぞこんな小さい台で立っているものだと思います。

台製作は鈴木さん。最初出来たときに前に倒れたのを、『こんなのわけないよ』と云いながら台の中を削って立つようになりました。

あれから20年くらい経ちますが、今でも問題なく立っています。

専門家というものは不思議な技術を持っておられるものです。

なお、出来れば[雲入り写真]をご覧ください。[中村東鶴さん]のお話が出てきます。

---

## 矢合川石 6



[左右 26cm]

### 【矢合川石 No.6】

この石は矢合川石を歩いて渡っていたときに、足先に何か感じて拾い上げたもの。

名古屋にあった店・奈古埜の店主が滅法気に入っておられました。

しかし、これも瀬田川で見ない色・茶色をしています。

しかも梨地肌です。

何も瀬田川に似ている必要はない訳ですから、これでいいわけです。

これは川の中から得られたものですが、ワイヤブラシで擦ったら大量の土埃が出ました。

これもほかの石と同じくどこかに、軟らかい曲線を感じます。

矢合川石が瀬田川石と似ているかどうかは別にして、庄内川石とは生成と歴史が違う感じがしています。

一見似た様子の庄内川石が質において、また、生成の歴史において違うと感じられるのは興味深いものがあります。

私は個人的にこの矢合川石の方を好んでいます。

水石、山水石へのお誘い…



---

## 付 録

### 空と雲を入れた写真集

[空と雲を入れた写真集]は、各ページは一枚の写真と文章で出来ています。

私のパソコンは、Mac OSXです。ご存じのように、Mac OSXのスクリーンセイバーはスライドショーをします。このスライドショーが優れもので、上下・左右・斜め方向に“気儘な移動”をしながら拡大・縮小を繰り返します。

次々にワイプし、眺めていて飽きません。

このスライドショー用にと、[石の背景に雲と空を入れた写真]を150点あまりを作り、楽しんでいました。

この冊子の前半部分を書き終わって、ふと思い付いてページ左右一杯の大きさで、この写真を載せてみました。

良い感じになりそうで、嬉しくなってきました。

文章も気楽に書けそうです。

私の石は多く[山水石]ですから、背景に雲と空を入れる事は[山水石]の風景感を増すから良いと思い作っていました。

しかし[姿石]の背景に雲と空を入れてみて、ミスマッチが見られなかったことに、驚きと悦びを改めて体感しました。

[水石]は室内で鑑賞されます。

室内は人工の建築物で空も雲もありません。

それにも拘わらず、空と雲と石とが美しくマッチしています。

結局、石も天然。雲と空も天然であるからでしょう。

鑑賞に値する天然の石を手元に持てるとは全く素晴らしい！です。



[左右 58cm]

## 大八洲

この石は、本文で写真1【大八洲】として載せています。

どの石でもそうなるのですが、こうして雲を入れてみると、どことなくどこかにありそうな風景感になるところが嬉しいです。

瀬田川の石には流れるような曲線・曲面を持つ点が特徴とされています。

この【大八洲】はその特徴を存分に持つ、瀬田川石独特のもので。

石は展示会に出品してみると、家で見ていたのと違う価値のようなものを見いだすことがあります。

この【大八洲】は図体が大きかったせいもあるでしょうが、京都の九十九会で建仁寺の奥の左右2間はあるかと思える大きい床に飾った時、堂々としていました。

訪れる多くの人たちが立ち止まり、暫し眺めていられた事が印象に残っています。静かな雰囲気がかもしながら、人を魅きつける存在感に非凡なものを感じました。軽く叩くと美しい金属音を発し、鋼鉄かのような硬質さを感じさせます。

そのような硬度を持ちながら、なだらかな曲線・曲面によって硬さに伴う冷たさを感じさせません。

むしろ柔軟さを感じさせ、やさしさをも感じさせる瀬田川石は、我が国の宝ものと私は思っています。

この手の瀬田川石が持つ雰囲気は世界に誇りうるものです。こんなに誇りうるものなのに、石は【世界文化遺産】にならないのでしょうか？

文化遺産といえば、その多くは、人によって創られたもののようです。

創造するプロセスに[選ぶ行為]があります。

しかし、創造する人の[選ぶ行為]が鈍くては上等なものは出来ません。素晴らしい石を探し得ても、行いとしては[選ぶ行為]しかしていません。創造物との違いは[選ぶ行為]以外のこと、例えば、[かたちを変える]などのような手を加えていない点です。

水石は創造物ではありませんが、才能に恵まれないと、良いものを選ぶことも難しいと思われ、素晴らしい創造物を創り出せる事と、素晴らしい水石を発見できる事と確率は似ているのではありませんか…

さて？



[高さ 11cm]

## いつくしみ

揖斐川の石です。

抱いた子に[母のいつくしみ]が滲んでいて、心をうばわれます。

ほんの小さな石ですが、どうして天然はこのようなものを作れるのでしょうか。



[左右 39cm]

## 金 剛

これは本文の写真9の【金剛】です。

お店で見た時は、油が塗ってあったのかベタベタした感じで真っ黒。真黒石かと思っていました。家に持って帰り庭に放置し、2年くらい雨にあたった後に、茶色を基調にした一種の虎石であることが判明しました。

石の色を濃くしたい思いで、石に油を塗るとか、熱して蝋を塗り込む人がいます。実は私もこうした事をするのが結構好きです。

ご存知かも知れませんが、石に塗った油、蝋を除去出来る洗剤はありません。石の表面は川で擦れて滑らかに見えますが、恐らく顕微鏡で見れば細かい穴があいていて、その穴に入った油が取り難いのです。

これを除去できるのは長年の風雨だけです。

この石は、[水石入門マニュアル]なる出版物の庄内川石の紹介の項目に掲載されていますから、ご存知のお方もあるかと思います。

[水石入門マニュアル]なる出版物に掲載されているこの石の写真は、九十九会に出品した時に撮影されたものであろうかと思っています。



[左右 34cm]

## 深 山

本文写真12【深山】です。

この写真を見て、多くの方が槍ヶ岳みたいと言います。

この石も、よく見ると実に不思議な格好をしています。

まあ我々石を愛好するもの達に好まれる石とは、普通あり得ないような難しい格好の石であり、石の仲間から見れば「出来損ないの異端者」でしょうか。

この石は川で擦れたように見えません。

この格好はどのようにして出来たのでしょうか？

主峰と副峰の先端は鋭く尖っています。

菊石の菊の部分は、一般に石の塊の中で「ほぼ球形」になっているものであると聞きます。

するとこの石の表面に現れている菊の紋様は、地球上で出来た時に「石の塊の中で球形の放射状態」であった結晶の集まりが、その後何かの力によって石の表面に出て、塊の約半分が削り取られ、菊の紋様になったのです。

まあ、何と不思議なことでしょうか。



[高さ 18cm]

## 花 舞

この石は、名古屋にあった石の店・浅井さんの店で買いました。

こうして空と雲とを背景に入れて見ますと、実に美しいです。  
毅然と空に輝いているではありませんか。

何故か、中心にある花の芯も明確な様子で、自然に視線はこの花に行きます。

そのせいでしょう。  
業者のお方に人気があります。

浅井さんは亡くなりましたが、改めて浅井さんに感謝を込めて『有り難う』と申し上げ、  
ご冥福をお祈り致します。



[左右 11cm]

## 大 観

本文の写真26【大観】です。

左右10cm足らずの小形な石です。  
小さいのに、見れば見るほど素晴らしい風景感を持っています。

我が家で一番の逸品であろうかと思っています。  
主峰は峻烈なものですが、どこことなく柔らかく連山のような副峰を持っています。

また、これら山々は平野に降りています。  
この点だけで見れば、土坡石に類別されそうです。

このように多様な風景感の要素を持ち合わせていますから、この写真の大きさにして眺めると、各々の細かい部分に視線が行き、あれこれと多様な想いに心を奪われます。

かくして【大観】と銘じました。  
とても小型ですから、簡単にポケットとか鞆に入れて、旅に持って行けます。

こんな楽しい思いを与えてくれた石はほかにありません。



[左右 31cm]

## 武蔵岳

本文では写真32【武蔵岳】となっている石です。

どこの川の石で考えてみても、普通このような流れるような曲面(曲線でなく曲面です)を多様に持った石は滅多にありません。

この石は、何故か[強い力]を秘めているかのようなものを感じます。

彫刻のような明確な曲面が組み合って、流れるような稜線を描いて立体感を持つ山岳感を現す事など、人間では思いも及ばない事です。

これらが毅然とした力強さを感じさせています。  
類を見ない素晴らしい山岳感です。

こんなに素晴らしい石【武蔵岳】を拾えたことは、何とも幸せです。



[左右 30cm]

## 秀 稜

本文では写真10【秀稜】としています。

流石に瀬田の石！という感じです。

梨地肌より大きく、蟹真黒より小さいへこみの肌で、瀬田では意外に珍しい部類に属します。

上段の平野感と下段の平野感が平行していて、上段から下段におりる自然さも含め、段石として、類い稀なものと思っています。

私の持ち物で最高クラスの一つです。

もし、最も好きな石はどれかと尋ねられましたら、私は『秀稜です』と答えるでしょう。

【大和】【大八洲】【大観】【深遠】など色々ありますが、心ひそかに大切に思っている石のひとつに、この【秀稜】があります。



[高さ 19cm]

## 庄内川立ち土坡

庄内川の産で、本文【立ち石】の項目で、立ち石、つまり縦に長く上部に風景感を持った石は、その石の下方に向かって小さくなっていた方が見易いとの説明をしています。

これを発見した時は、この写真の格好を砂から出して横たわっていました。  
ん？このままで裏に問題なければ名石！  
と胸を高鳴らせて取り上げました。  
結果は、何ともラッキー！名品の入手です。

底部は小さくなっていてとても立ちませんから、台に載せています。

庄内川に詳しいお方なら分かりますが、松川橋左岸堤防から竜泉寺のお墓に行く道の入り口右側に、昔は石が累々と集まっていた場所がありました。

その河原に、この石は転がっていたのです。  
今は、あのいまわしいブルトナーが石を全部どこかに持って行ってしまいました。

我々のように石で一喜一憂できる人達もいるのに、石を無作為に持っていき建築資材にするなんて、非文化的行いです。

何億年もかけて出来た石を壊すとは！  
悲しいですね。



[左右 30cm]

## 玄海石山形

これは本文で述べていません。

京都の九十九会で買いました。  
台の裏に「玄海石山形 コロビ 古い石」と書かれています。

コロビとは天然ままの石、つまり切断などしていないとの意味です。  
古い石と書かれているのも気持ちいいです。とても硬質で金属音を発します。

緑の濃い色です。

この石も「水石入門マニュアル」なる出版物に載っています。その時の所有者は私ではありません。



[左右 11cm]

## 光 悦

本文では写真28【光悦】として述べています。

購入・自採の区別なくこの石が手元にあるのに感謝したい気分です。  
庄内川のような鈍い水流の川で、このような曲線が出来るのは何故でしょう。

本当に石というものは不思議です。  
業者氏に大変評判の良い石です。

世に[丸作りの石]と言うものがあり、大体この石のような格好をしています。  
しかし、この石はそれらの丸作りの石とは、ひと味違うのが不思議です。

人工は天然にかなわないのです。  
ほんの僅か天然のものは自然なのです。  
素直であるのかも知れません。

単に私見ですが、丸作りの石で“イヤらしい”と感じる石を沢山見えています。  
私も若い頃石の上部(底部でないという意味です)の加工を試した事があります。

何日も何日も削ってみましたが、たった一つの曲面を自然な様子に作る事すら簡単に出来ません。  
こんな努力は疲れるばかりで意味ないと思うに至り、天然でいい石を探した方が楽だとなりました。



[左右 7cm]

## 鈎 山

揖斐川の石です。  
とても小さい石です。

変な格好ですが、結局は[山]を感じ取っている感覚が動いているのか、知らぬ間にこの石を見詰めてしまいます。

これも、本文に出てくる[集・中心的]を感じて、安心をし、さらに視線がよりどころを得る事によって、この石に魅せられて行くのであろうと私は思っています。

展覧会に出品し、沢山の石の中から、殊にこれに興味を持った人がありました。  
そのお方は石を見慣れた感じの人ではありませんでした。しかし、何だかこの石に強く魅かれた様子が見られました。

人間の深い心理の奥底をくすぐるようなものが、この石にはあるのでしょうか。  
これぞ抽象的存在です。

自然に抽象的な雰囲気をもっている石を入手出来てしまうのは「運次第」で楽ですが、抽象的な石を得ようと努力するのは、かえって厳しい行いのように感じました。



[左右 17cm]

## 伊 吹

【伊吹】と銘じていますこの石は揖斐川の産。

岐阜県と滋賀県との県境に伊吹山があります。  
伊吹山は美しい格好の山とは言えませんが、私の育った尾張平野の冬は伊吹おろしに明け暮れます。  
そのせいでしょうが私は【伊吹】という言葉が好きです。

この石の白い斑点を見た瞬間に【伊吹】とってしまいました。  
揖斐川の石でこの色は他に見た事ありません。

しかし、神戸(ゴウド)町の石拾い専門家の家の生け垣の下で発見し、ご本人から揖斐川で拾ったと証言されていますから間違いなく揖斐川の石です。

素敵な山岳感であると、とても喜んでます。



[左右 38cm]

## 春日野

本文では写真7【春日野】としています。

この石が、現在の状態になるのには少し紆余曲折がありました。

石を始めた頃に拾ったこの石を切って貰いたいと、揖斐川の近くの或る石切断の人に依頼しました。その人は手で持つ切断機で切っておられました。

この石は非常に硬質で叩くと金属音を発します。その硬質さのせいだったかも知れませんが、底面が曲がって切れてしまいさまになりません。

肝心の静岡の武田切断所でも、この石は何故か嫌われてしまい、結局、家の庭に放置されていました。ある日、家を訪れた沢田さんという菊石の専門家氏に発見され、その人の手によってこの姿となりました。

有り難いことであったと感謝すると同時に、今でも、石の切断は難しいと思っています。まさに土坡石の典型のような格好をしています。

穏やかな山々が白い雲から顔を出していて【雲海】だという人もありますが、私は【春日野】と銘じています。



[左右 32cm]

## 愁 風

本文で写真13【愁風】として載せています。

石だけの写真を見て何の興味を示さなかった或る男性が、雲を入れたこの写真を見て、嬉しそうに即座に【白馬大池】と言います。

長野県かの地図を見せて、【白馬大池】はここにあるんですと言います。

彼の感覚では正にこの写真は白馬大池だそうです。

雲をいれたこの手の写真は、石に興味を持ってない人たちにも興味を持たれた好例です。

写真で見て何かガサガサした様子に見えるかも知れませんが、この石は大変に重くて密度のある石です。

色が茶色である事と、巣立ち肌になっている点で損をしているのかも知れませんが、密度の高い硬質の石です。

この石の欠点は、写真では見えませんが、主峰の後ろ下に肉が少なく、台で補充している点です。それ以外では、先ずは秀逸なものと思っています。



[左右 41cm]

## 重ね山

この石は本文に出てきません。

【重ね山】と言っています。

瀬田川の川岸に瀬田の石を庭に並べて売って貰える家があります。

もう30年以上前でしょうか、この石の原石をここで買いました。

後に、静岡市の武田石切所で底部の切断をしています。

最初切った状態では主峰が後方に倒れた感じで気に入らず、更に2回切り込んでやっとこの格好になりました。

何回も迷い、のべで3年かかりました。

石を山形に切るのは時に難しい場合があるようです。

切ったのに主峰に問題ありでは、全く情けないからです。



[左右 21cm]

## 飛 台

この石は、本文で写真39【飛台】と言っています。

この石を眺めている時に「飛び込み台」みたいだと【飛台】と銘じた安易なおはなしです。  
この手の格好の石を「雨宿り」と言う人もあります。

私が石を始めた頃、或る石の業者氏が『雨宿りの石というものは探す和无いものだ』と慨嘆しておられたのをこの石を見ると思い出します。

その後、「雨宿り」を思いの外、私は楽に手に入れられるようになりました。

私は石を始めた頃より「瀧石」に魅力を持っていましたのに、何故か恵まれません。  
そんな筈は無いと思うのですが、今日までまあまあかなあというものをたった2個得ているに過ぎません。

最近、加齢のせいもあるでしょう、行動範囲が狭くなってきていますから、瀧石は難しいかも知れないと少し弱気になってきたのでしょうか。  
でも、暖かい季節になったらまた揖斐川に出掛けます。

何しろ、家で待っていては石は歩いてきませんから…。



[左右 36cm]

## 被り山

この石も本文に出てきません。

揖斐川にかかる橋、三町大橋の東側にある石を庭に並べている家、堀さんの家で入手しています。割合最近(2001年)に川で拾ったとの事でした。

揖斐川に石はまだあるようです。

昭和47年に静岡市の[有沢一幸]と言う業者氏が[全日本中央名品展]と称し、各地の著名な水石家から石を預かり大展示会をされました。

その記念写真集を有沢さんから載っています。

その中に[西良雄氏]蔵の[帝釈石]なる石が24ページに載っています。

この写真集を貰った時は石を始めて1年目以内でしたが、この石の印象が強く私に残っていたので、この石を堀さんの家で見つけた時に、胸が高鳴りました。

いま、有沢さんの写真集の[帝釈石]と較べて主峰に関してはとても似ています。

[帝釈石]の方は副峰がもっと大きくガッチリと主峰に対峙していますから安定において、この石は[帝釈石]に及びません。

さて本文で、[石は集・中心的でありたい]と書きました。

が、この石は、山を感じるには少々、集・中心的であり過ぎて、山を感じないのかも知れない?と思ったりしています。

要するに被りすぎではないか?と思えるのです。

それはつまり、左側の副部がバランスに於いて負けているのが原因でしょう。

もう少し石が長いとか、副部が高いとかであれば、どうみても山に見えるでしょう。

でも、こうして雲を入れてみますと山の感じになるようですが…

---

## 悟空峰



[高さ 41cm]

本文の写真24【悟空峰】です。

この石を展覧会に出品しますと石を観るのが初めてと言う人たちに急に興味を持たれます。

この石の他に石を観るのが初めての人達に興味を持たれる石は、揖斐川石の【小宇宙】です。

悟空峰では肌に圧倒されたり、かたちの奇抜さに魅せられたりするようです。

共に少し変な感じでバランスされている格好であると思っています。

かたにはまった石もいいですが、かた破りもいいです。



[左右 24cm]

## 揖斐五湖

【揖斐五湖】と銘じたこの石は、揖斐川町の石のお店「高橋克馬さんのお店」の片隅で発見しました。

色は青石で、質は揖斐川石の最高のものでない感じでしたから、粗末に扱われたのでしょう、結局私の手に入ったのです。

この雲を入れた写真では石の下部が見えません。  
しかし、底は平で座りは万全です。

よくぞこのような石がお店の隅に転がっていたものだと、感嘆です。  
揖斐にしては浅い色ではありますが、こうして五個の溜まりに水を入れて、雲を映してみますとまああの感じで満足です。

世に、[溜まりのある石]を特別に好む人がいます。  
しかし、溜まりを持つ石は、出来れば風景感を持っていたいものです。  
とは言うものの、私は風景感を持った溜まり石をたった2個しか持っていません。

【愁風】とこの【揖斐五湖】です。



[左右 20cm]

## 金古潭

名古屋に浅井さんと云う業者さんがおられました。

2007年に他界されました。

このお方は、関東・関西の即売席にお出掛けになっていましたから、時々意外な石を仕入れさせていました。

この石も、浅井さんから買っています。

金古潭と云われる石が世にあると聞いてはいましたが見るのは初めてです。

神居古潭石は、たまにとても重い物があります。

しかし、この石は普通の重さです。

座りも良く金色で変化があり、先ずは貴重な一石とはなりました。

この石は黒い色の石ばかりの中に入っても違和感はありません。

この写真で見るより、もう少し濃い色をしていますけれど、世に言う[色石][美石]と違った様子であるのが、何となく嬉しいです。



[高さ 40cm]

## はなふぶき

瀬田川の石で最も有名なのは梨地肌の真黒石です。

真黒石では梨地肌の他に蟹真黒などが続きます。  
更にこの石のような[花吹雪]肌が続きます。

梨地肌も蟹肌も花吹雪肌も何故か金色になるものがあり、梨地肌では[金梨地]と言われ、特別扱いされ、珍重されています。

この石は、残念な事に金色ではありません。  
ご覧のように単に白い色の紋様で、少々ヤケ気味で【はなふぶき】と銘じています。

でも、何故か年々色合いが深くなっていく様子が見られ、最近何となく黄色？みたいになってきたようです。

長生きをして、この石の行く末を見極めたいと思っています。



[左右 31cm]

## 深 遠

表紙を飾るこの石は、本文写真16で【深遠】と銘じています。

私の所有する石の中で最も不思議な格好をしています。

この写真で見える左側の柱は、写真ではあまり定かにわかりませんが、実際には大変に薄いのです。

どう見ても硬質であります。よくぞこの薄さで天井の橋を長年大自然の中で保ち得たのだと不思議です。

天井に確かに川擦れが認められます。

この天井と右の柱の下と左の壁の下(この写真では見えていません。本文写真16では見れます)にのみ川擦れが見え、それ以外はガリガリ肌です。

大昔に川が流れていたらしい田畑を掘り起こして泥の塊の中にあっただとのことですが、ガリガリ肌と川擦れ肌が混在していて、壊れなかった事は何とも幸運です。

どう考えても、どうしてこの格好を保てたかは依然誠に不思議です。



[左右 32cm]

## 大 和

本文の写真2【大和】です。

今でも、この石は虎石の一種なのか金梨地真黒の一種なのかわかりません。  
ただ、色々な質が入り混じっている石である事は確かです。

一般に、変化の多い石は色々な質が混じったものである場合が多い傾向があります。

この石は、蟹真黒の部分、虎石に見られる茶色でありながら、その表面が梨地肌で覆われて、結果として[金梨地肌]になっているという変わり者です。  
まあどちらでもかまいません。

こんなに良い感じを与えてくれる石だからです。

この石は、全く素晴らしい！



[左右 20cm]

## 員弁黒山

員弁川で、この様に真っ黒くて細かい巣立ちで全面が覆われている石を、私は初めてみました。

員弁川の石で明け暮れたお方は何人もおられるでしょうが、私が訪問できたお宅で、この手の石を見たことは一度もありません。

どの川でも言えるでしょうが、この石のように信じられない質を見ることはあります。  
この石は、青川に沿った場所に住居を持っておられるKさんのお宅を訪ねた時、『昨日拾った』とかのお話で見せて貰えました。

玄関横で洗っておられた最中でした。  
この写真では下部が写っていませんから、素晴らしい山に見えています。

しかし、現物の下部は石の中心部に尖ったものが出ていて、無理に台を付けて貰いましたが、主峰の下部も副部の下部も、同じ感じで浮いています。

これが結構問題のようです。  
この先、展覧会などに出品して、多くの人達にどう受け止められたかを観察し、台を付けたことが正しいことであったか、失敗であったかを決めたいと考えています。  
良い石に定型はありません。

私が興味を持つ事は、人の視線を捉えられるか捉えられないかのみです。



[左右 8cm]

## 菊 山

菊石の中で、サバ菊(キバ菊とも云います)川擦れ菊石(私は一個しか持っていません)以外は、本来菊石は、磨いて菊の紋様を出す事もあって、菊石が加工されているものであるということは常識です。

しかし、この菊石はサバ菊・川擦れ菊石に属さず天然であるという珍しいものです。菊石と云えども他の石と同じプロセスで何億年を過ごせば、こんな事もあるでしょう。

山の地中で発見されたと推測されています。

この石は左右7センチ位の小形石ですから、菊そのものも大して大きくありませんが、天然であることと格好が良い事で大事な石となっています。

底面もかなり平らで座り良く申し分ありません。  
菊石・鉱物などの専門家から買えました。



[高さ 26cm]

## 揖斐瀧

石を好むようになった最初の頃、瀧のある石が欲しくて欲しくて仕方ありませんでした。しかし、何故か瀧石に恵まれていません。

この石を含め2個しかありません。

この石も、もう一つの石も揖斐川の石です。両方とも瀧石として、それほど良いものに思えません。この石は、ご覧のように揖斐独特の青石で、名古屋にあった[浅井さんの店]で買っています。

もう一つの瀧石は、揖斐川町の[高橋さんの店]で発見しています。

この[高橋さんの店]で発見した瀧石は、真っ白な瀧を持っています。

しかし、瀧が奥まった場所にあるために、写真の撮影にもう少し工夫しませんでした、明快な瀧に見えません。

現在のところ撮影に失敗しています。

その後、河川の石が砂利業者に荒らされ、河川開発も行われたこの先に益々瀧石に恵まれる可能性は減りました。

この石も、もう一つの石も、瀧石として逸品ではありませんが、兎も角、大切にしようと思っています。そうして、縁あって、驚くような瀧石が手元に来るのが楽しみです。



[左右 45cm]

## 豊 壤

【豊壤】と銘じたこの石は瀬田川の産。我が家で一番重量のある石です。

京都に住む石好きの人に譲って貰いました。彼の話では、平成10年頃に瀬田川の底から、潜水した人によって上げられた石とのことでした。

瀬田川の河原に石の姿がなくなって久しいですが、現在も潜水によってこのような石が我々の目の前に現れています。私の所有する石では、この【豊壤】と前に出てきました【招月】及び【招月雲入り】が比較的近年に潜水によって出てきたものです。

この石の肌はご覧のように典型的な梨地肌です。よく見ると部分的に金梨地肌があります。この写真で見る頂点の部分がそれです。

この石に見られるように梨地肌を金色に変えるのは瀬田川の水質、つまり水に混じっている物質の何かであると考えて構いません。

この金色に石を変える水質は、琵琶湖のどこかにあると言う人がいました。理由は、そのあたりに金梨地肌が集中しているからと聞かされました。

その場所はそのお方の秘密らしく、教えて貰えません。

しかし、瀬田川の深部にも似た水質の場所があるらしいことをこの石は語っています。

また、金梨地肌ち言いますが、【大和】のように虎石を基本にした梨地肌もあり、結果として[金色の梨時肌]になっているものもありますから、一概に水質の為せるものであると決め付けられないと言うのが本当でしょう。色々な面で考えて【大和】の肌は異色ですから、まあ例外と致しましょうか…



[高さ 12cm]

## 母 子

【いつくしみ】よりほんの少し大きく見えます。

この石も揖斐川石です。

【いつくしみ】に比べて質はこの【母子】の方が青黒石に近いようです。



[左右 29cm]

## 萌

この石は本文で写真30【萌】として載せています。

本文の写真で見る感じでは下部が分厚く少し問題かと思えます。

つまり、この写真で見えている格好を連想するのに少し無理？がある下部の大きさではないかと言う反省がある訳です。

矢張り自採だから点数が甘くなっているのでしょう。

この【萌】の色合いが微妙で、揖斐川石独特の青を基調にしていますものの、随所に赤いような色が見えて変に艶っぽい様子です。

この様子は揖斐の石で滅多に見られません。



[[左右 21cm]]

## 揖斐洞

この石は本文の写真37で紹介されている石です。

その石の一部に雲を入れてみました。  
世に「洞窟好み」という向きもあります。

私もその一人らしく、表紙の写真とか、この写真とかの感じに魅入られています。

[洞窟を通して空・雲を見る]感じが殊に好きです。

それにしても、この洞窟の曲線の絶妙さに、感心してしまいます。  
実に美しい曲線ではありませんか！

自然の造形とは、何ともの凄いものではないでしょうか。

この自然の「わざ」に触れて、心を洗われる我々は幸せ者です。



[左右 13cm]

## 古 代

古代石は員弁川の石です。

この石に【古代石】なる命名をされたお方は[疋田 清]さんです。  
疋田さんのお話によれば、この古代石の原産地は、員弁川の支流[青川]だそうです。

疋田さんのお宅には【古代石】以外にも、実に素晴らしい石が沢山あります。  
こういう事を言うと員弁の皆さんに確実に叱られますが、揖斐川石・佐治川石に比べますと員弁川石は“持ち込み時代感”が付きにくいという感じを私は持っています。

しかし、疋田さんの家で拝見できる員弁川の石たちは、もっと多様であり、揖斐川・佐治川をしのぎ加茂川か？と思わせる石もあります。

ご本人のお言葉では『昔はこんな石がありましたよ』です。

さてこの古代石で欠けた石を余り見ません。質に粘りがあるからでしょう。  
川擦れでツルツルと言う石もありません。  
それに、変に重いのです。

それらが醸す感じで【古代石】なる命名を素敵であると感じる事が出来ます。



[左右 36cm]

## 佐治溜り

この石は本文に採用していません。

佐治川(千代川かも?)の石です。  
関西・高槻市にお住まいの西島さんなる人に戴きました。

業者さんに興味を持たれた事がよくあります。売り易い石なのでしょうか？

左右は35センチあり、座りは良く、存在感はあります。  
かなり深い溜りですが、溜り以外に特色はありません。

つまり、風景感に今一つなのです。



[左右 21cm]

## 川崎山 1

この石も大垣市の愛好家・川崎さんの家で発見しています。

この写真では下部の様子は全く分かりませんが、さほど不自然に厚くない台に載って具合の良い山形石になっています。

当時(1995年頃)川崎さんの家の庭では、コンクリートブロックを積んで石を載せる棚を作っていました。

この石は、そのコンクリートブロックの穴にさしてあったものです。  
質は最高の損斐青黒ではない？ようですが、ジャクレの様子などで、かなり良質の石であると思って良いでしょう。

左右23センチで奥行きも大きくないという中形石ですから持ち運びに良いです。  
部分的に川擦れ肌があり、多くの凹みもありますから、水と空気に浸蝕される質の部分が浸蝕され尽くして、骨の部分だけが残った石と考えられます。

「痩せた石」が良いと云う見解も世にあります。  
この点でも、この石は及第です。



[左右 18cm]

## ひょうてん

本文で写真42【豹点】として載せている石です。

山水石の多くは黒々したものが多いですから、この豹点は一段と新鮮な美しさです。  
その上、こうして上部だけで見ますと、この石の山岳感は実に毅然としていて魅力的です。

この石は左右17cmで、決して大きい石ではありません。  
石は大きいだけが能ではない見本の一つでしょうか。

これを名古屋にあった【奈古埜】という石の店で買いました。  
私が石に魅せられた頃、この店には多くのお金持ちさんが来ておられ、当時若かった私などとても及ばない高い金額の買い物をしておられるのを指をくわえて見ておりました。

この店で買った石の一つです。  
確かにあの当主はいい眼の人でした。  
例の石【大八洲】もこの店で買っています。

ここに載せている石でこの店で買った石はあと二つ。  
本文写真40【天空台】と佐治川の小形の山形石【蓬莱】の4個です。結局、私は上客ではなかったようです。

しかし、この店で指をくわえて過ごした日々がこのホームページになっているように思っています。



[左右 28cm]

## 揖斐溜まり

この石は本文に採用していません。

揖斐川石です。

大垣市で昔に石の加工を業としておられた家の生け垣の下で発見しました。  
値段は500円。理由は、白い色をしていたからでしょう。  
買って帰り、エイとばかり蝨焼きをしたらスゴい青黒になり、びっくりしました。

揖斐の石では時にこの経験をする石があります。  
【深遠】写真16・【崎橋】写真37などは家に来たときは白めの色をしていました。

さて、蝨焼きして色が濃くなったのに大喜びして洗剤を塗り熱湯をかけて洗い、その上3年ほど庭で風雨にさらしたら蝨が取れたのでしょう、ご覧の様子となりました。

そして、現在も濃い青黒の色をしていますが、何と水をはじかないのです。  
あの白い色とは何であったのでしょうか？

風景感に今ひとつ？かも知れませんが、溜まりは深く気に入っています。



[左右 19cm]

## サバ菊台

私は何個かのサバ菊石を持っています。

本文にも書いていますが、菊石を切断して加工・研磨している人に聞いた話では、菊の部分は石の中で球形になっていることが多いそうです。

菊石を切断して加工・研磨している人は、切る前にどのあたりに花の芯があるか、長年の経験でわかるのそうです。

花には芯が必要だそうです。

さて、この石の花だけに注目しますと僅かながらでも芯はありますから、まあまあかと思っています。

それにしましても、球形であるものの半分が取れて芯らしきものを残し、花だけが飛び出すとは？何ということでしょう。

菊石に限らず、多くの石たちは実に不思議な格好をしています。

私たち石を好む者たちは、好んで奇形児的石を探して喜んでいるのかも知れません。

それにしても、不思議一杯の石の世界です。



[左右 19cm]

## 枯れ瀧

本文に写真29【枯れ瀧】と銘じて載せています。

揖斐川の石なので質は青を基調にしている筈ですが、どういふ変化がこの石の表面に起きたのでしょうか、濃い茶色をしています。

この茶色の感じは石全体にあります。

他の揖斐川石でこの傾向を余り見ませんが、不思議に揖斐川の石だと感じます。

他の川でも言えることですが、川の特徴は単に色だけのものではありません。

どの川の石でも、不思議な雰囲気のようなものに特色を感じ取れる要素があるからでしょう。

この石は探石を始めて最初の頃に拾っています。

名古屋にあった或る水石の店で、ある先輩に『こんな石を拾うようでは駄目だね』と云われて、家に放置していましたが、日を経るに良さが分かるようになり、現在、家では上位になっています。

何故『良くない石だ』と云われたか、今でも不思議です。

この先輩の発言は、これからという若手を育てるには向かないものでした。



[左右 17cm]

## 庄内山形 2

本文で写真34として載せています。

何とも自然な曲線で主峰から右に流れて行きます。  
前の【光悦】でも触れましたが、世に丸作りの石があります。この石の曲線もそれら作り石に似ています。

庄内川で見つけた時にこの石は丁度この姿を砂から出して横たわっていました。  
瞬間に「作り石みたいだ」と思いました。「これで裏が良いなら天の恵み！」とときめく胸で取り上げました。結果はすべてOKでした。

座りも万全であり、このような纏まりを見せる石は滅多にありません。  
河原というところは不思議な場所です。  
天下の名品が今でも眠っているからです。

実際に、石を探して止まない熱心な探石家は、私を含め加齢により減っていますから今はチャンスです！



[左右 17cm]

## サバ菊山

本文に載せていません。

世に言うサバ菊石です。

昔、石を始めた頃、[何時の日にかサバ菊の山水石を持つ事はあるだろうか]と思って、先輩諸氏のサバ菊石を羨ましく見ていました。

しかし、最近新しい産地が開発された事でもあるのでしょうか、やっこの手の石を入手できるようになりました。

菊石に磨き石は常識です。しかし私はサバ菊石を滅法好みます。

サバ菊石を好む原因は、天然であるからです。

山水石を好む者としては致し方ありません。

現実に、[山のこんな位置に菊花があるなど非常識...]と叱られそうですが、この花には芯があり、全体の格好は申し分なくて、本人は結構気に入って喜んでます。

“二兎を追うものは一兎をも得ず”??かも…。



[左右 18cm]

## 古潭黒

私たちの会・東海石友会会員に赤松さんという人がおいでです。

勤務の関係で名古屋におられた頃があります。  
その頃に石の趣味に進まれ東海石友会の会員になりました。

今は関東勤務になり家も習志野市に出来てしまいました。  
この人は、行動範囲が全国に広まっていて、至る所に友達があるらしく、不可解な入手経路を持っています。

彼が東京移転のために名古屋のマンションを引き払った時に、この古潭を含む何個かの石を貰っています。  
その時に付いていた台が北海道独特の台でしたから、間違いなく神居古潭石です。

格好も申し分ありませんし、真っ黒であるのが嬉しいです。

こんな立派な石を手放す気持ちにならねばならない転勤と云うものを、私は経験しなくて良いので、まあ幸せと云うものです



[左右 14cm]

## 関 山

揖斐川石です。本文でこの石に触れていますが、写真の番号を付けていません。

この石は、左右12cmの小さい石です。小さいにも拘らず力強いものを感じさせています。  
[石は大きさばかりでない]とこれでも感じます。

しかし、この画面から感じられる迫力は[写真で大きくイメージできるようにトリミングしている]せいもあります。

この石の現物を目の前にして、瞬間にこの写真のようにイメージ出来る人は少ないかも知れません。  
そうなると、石は或る程度大きい事が必要であるようです。

このあたりの呼吸を我々は忘れてならないのでしょうか。

いずれにしましても、この様に大きい風景感を持った石は、石の大小に拘わらず少ないものです。



[左右 14cm]

## 蓬 菜

この石【蓬莱】は本文に写真番号なしで載せています。佐治川の石です。

昔、名古屋にあった店・奈古埜で買いました。  
大阪の競り市で入手できたとの事でした。  
現実にこの格好をした山を実在する山で見付ける事はありません。

これは山の或る特徴を強調気味に表現している石で、全ての山水石は大なり小なりこうした傾向を持っています。

この傾向は、現実の山から得た山の感じを抽出している行いであり、つまりは山水石は既に抽象的であるのです。

抽象的であるので、我々は多様な想いで山水石に対し得ているのでしょう。  
私は最近の水石専門誌を読みませんから、よくわかりませんが、以前は【抽象石】と言う分野が論じられていました。

当時私は、水石は元々抽象的であるが故に、改めて【抽象石】を論ずる事に個人的に違和感を持っていました。

そして、好ましい石を選んで集めた結果は、ここでご覧くださっている石たちになってしまいました。



[高さ 23cm]

## 文明開化

本文に【文明開化】として出てきます。

姿石に雲と空を入れるのはどうかしら？と時に良くないことをしているような気になることがありましたが、こうして見ますと、違和感なくて驚きです。

雲と空とは天然で、石も天然。結局はマッチするのでしょうか。  
このマッチは驚きと共に、喜びをも与えてくれました。

石が美しいと感じられる事は、それは全て良いことであって、満足すべきであり、目的にすべき事でもあると私は思います。

さて、文明開化なる言葉は、明治時代、外国から文化、文明が入ってきて、先進的なお洒落な男性が、シルクハットをかぶり、マントを着た姿で歩きました。これになぞって付けられた銘です。

小林宗閑さんが名付け親。

---

## 【[太陽の塔]の原型になったと思ってしまった石のお話を…】

[石ブーム]と言われ、日本全国的に、誰もが石に夢中になった昭和40年の頃に、有名な文学者、芸術家が続々と揖斐を訪れておられます。



その中に、あの岡本太郎さんがおられたようです。

この石の写真を、石ブーム全盛の頃に出版された【日本??名品集】のような名称の小形本で私は見た記憶がありました。

その後、大阪万博で【太陽の塔】を見たとき、訳もなく「あの石のイメージだ」と思ってしまいました。

あの本があったらおもしろいのにと、探していましたこの頃、偶然、“愛石三昧”なる本に載っていることを知り、驚きと共に大喜びして、ここに載せさせて戴きました。

**“愛石三昧”は、昭和42年9月10日初版。**

**著者：小林宗一。発行所：樹石社。**

なお、岡本太郎さんは「銘付けと箱のおもて書き」をされただけで、当時及びその後にこの石を所有者していた人は、高間さんという揖斐のお方ようです。

【忘却】が何を意味するイメージのものであったかわかる術はありませんが、この石【忘却】が、岡本太郎さんのお心の中で、徐々に成長し変化してあの【太陽の塔】になったと私は感じています。

大阪万博で、肩と手がない塔の上に顔がついている【太陽の塔】を見た瞬間に、私は岡本太郎さんが「銘付けと箱のおもて書き」をされた【忘却】という揖斐川石を思い起こしてしまいました。

皆さんは、どうお感じになりますか？



[高さ 29cm]

## 吉野川

この石を[吉野川]で拾ったものと言う関西・高槻市にお住まいの西島さんなる人からいただいたものです。

氏は横向きに見ておられたかのようにでしたが、縦にしてみても何か強さを引き出せたと、よろこんでいます。

戴いたときに[吉野川]の所在地を聞きましたが、思い出せません。

そこで、ネットでしらべました。徳島県にある吉野川市の吉野川かしら？と思って、【四国の水石ホームページ】の中藤さんにお尋ねしていましたが、今日(2006年6月7日)元の持ち主西島さんからお電話を頂戴しました。

それによりますと、奈良県の吉野川のものだそうです。  
全体に茶色で質は、先ず先ずの密度を持っている様子で、鑑賞出来る石です。

日本には、このような恰好のイメージを持つ風景は、少ないでしょうが、何故か説得力があります。

展覧会ではとても目立ちます。



[左右 29cm]

## 瑞 平

この石は本文で写真11【瑞平】として載せています。

世に言う[土坡]でなく、平野が複数の段になった石を[段石]と言います。

段石は、この石のように、或る平面で二つに割れるだけの事ですから、多くありそうなのに、山形石より少ないのが現実で、不思議であるといつも思います。

私が持っている範囲のことを云っている訳ではありません。

展覧会への出品石、本、雑誌などの掲載写真などを見ても、段石で鑑賞にたえる石は実に少ないです。

まず、段石は平野を感じたいが故に、左右に長い方が有利と考えましょう。

すると、私は、瀬田川で2個、庄内川で1個、合計で3個しか持っていません。

入手した頃は左程気にとめませんでした。近頃貴重な石であると思うようになりました。

確かに、二つの平面が整然と二段になっている様は、隆起をもつ平野の石(土坡石)とは違います。

静けさ、格調の高さ、気品のようなものを醸しているように思うのは私だけでしょうか？



[高さ 28cm]

## 昇 菊

サバ菊石です。

【昇菊】と銘じています。

空に向かって昇りゆく菊華

前にも書きましたが、菊石はサンドペーパーのようなもので磨いて紋様・色彩を愛でるものが主流です。

天然のままのものを私は好んでいますから、このサイトに載せた菊石は全て天然のものです。この石は、名古屋にありました[浅井さんのお店]に何となく遊びに行ったときに買っています。展覧会に出品しますと、とても存在感があり、人目を引きます。

こうして見ますと、空に輝いてそそり立っているようで、更に嬉しくなります。菊石というものは、何故か[紅]が入っていると魅力を増すものようです。

この石にもほんの僅か紅らしきものがあり、花の芯は崩れていますものの、かたち良くて捨てがたい魅力をあたりに振りまいています。



[左右 26cm]

## 員弁山形石

この石は本文で写真27として載せています。員弁川での自採石です。

本文の写真を見て戴ければわかりますが、底部が複雑で台製作のお方(浜松市の鈴木さん)に大変なご苦労をお掛けしました。

この写真のようにして見ますと、実に素晴らしい山岳感です。中央に溜まりも持っています。この線での切断して展覧して見て戴くのもアリかも知れません。

石愛好の私たちは、底部切断をしないで見得るものなら、少々無理でもそのまま見るべきであると考えてる者たちです。

しかし、石を好む人が減り、普通の人達に見て貰える石であるべき事を意識せねばならない時代に入るとすれば、伝承石の【末の松山】【大和群山】のように、バッチリ山岳を感じられるように切断するという選択肢を否定してはいけないかも知れません。

本文写真と比較してみてください。

さて、どうしたものでしょう？



[左右 25cm]

## 庄内川緑山

この石は、庄内川の探石で二番目に拾っています。

庄内川の例の河原、吉根(キッコ)橋左岸です。

座りの安定した良い山形です。

探石第一号もこの第二号も何故か緑色をした庄内川石で、この質の石をその後20年以上の間に一個も見えていません。

不思議なお話ですが、最初の間は、庄内川石の特色が[梨地肌石にある]という事を知らなかったからと思います。



[左右 14cm]

## 松川山

この石も本文で触れています。【松川橋の石】写真33 です。

写真28【光悦】に似た流れるような曲線をこの石は持っています。

この曲線はこの石全体至る所にあって魅力的です。

普通、庄内川にはスマートでないと云いますか、武骨な格好と云いますか、洗練されていない石が多くあると私は思っています。

瀬田川梨地肌の石に似た石が出るとか、出ないと云われていますが、仮に瀬田川石と比べるならば、一番の問題はこの川の石の格好の方でしょう。

瀬田川石と比べてものを考えるのではなく、瀬田川石のことなど忘れて、庄内川独特の武骨さの中に素敵な石を見付けるようにしましょう。

それにしましても、この曲線を持っていること自体、確かに庄内川には珍しいものです。

何故ならば、洗練された好ましい曲線であるからです。



[左右 23cm]

## 川崎山 2

大垣市の、例の[川崎さん]に譲っていただいた石です。

[石は台を付けなく立つのが一番大事な事である]という条件を主張する人がおられます。要するに座りが一番大事だと言う事らしいのです。

私は生涯を通じて、[座りが一番大事だと考えること]をしていません。

座りが一番大事だと考えることはしなかったのに、何故か台なくても立派に立つ石に恵まれてきています。

この石も、何故かこの姿で立ちます。しかし、私はこの石に台をつけています。石に台を付けると何故か立派に見えてくるからです。

私たちは、人前に出るときに服装を正します。これは習慣かもしれませんが、相手に対する礼儀のようなものかも知れません。

台を付ける事で河原にあったその石が、美術品かのように美しいものを連想し易くなります。台を付けなく石そのまま展覽しますと、石を見て河原にあった石を連想し易くなります。

礼儀の問題もありますが、石を見て美しいものを連想して戴きたいと私は願ってやみません。



[左右 33cm]

## 武 蔵

この石を【武蔵】と銘じています。庄内川の梨地肌の石で、目方は大関級で16kg以上あります。

本文に載せていません。

河原で拾ったのは、2001年です。

この石は、前のページで書きました[武骨者庄内川石]の代表選手です。

庄内川には吉根(キッコと読みます)橋と言う橋があります。

この橋の下流左岸は絶好の探石場所があり、ここで誠に良い思いをしています。

昔はこの河原に沢山の石がありましたが、一時ブルトーザが走り回り大方の石を持って行き、2000年頃には、所々に川底の地面が出てしまった哀れさでした。

しかし何年かしてふと立ち寄って[また石が顔を出した!]&驚きました。

この石はかなり大きい石です。こんな大きい石が残っていたのです。

今もこの河原には石があります。



[左右 24cm]

## 四万十山

これは四万十川の石です。或る業者さんが京都・九十九会に出品されていたものを友人が買い、後に私が譲り受けたもの。

何故か本文に載せていませんが、格好良い山形に喜んでいます。

私はこの川に入っていないから詳しい事はわかりませんが…四万十川の石は軟らかい曲線・曲面に見るべきものがあります。

石の友人であり、東海石友会の会員でもある人が、九十九会の会場を『何かいい石はありませんかね』と言いながらあるいていました。

『これ良さそうですね』と指差す私。この石です。『あっ。いい。買います』と彼は買いました。本当は、私が欲しいと思っていたのに、ほんの少し言葉を間違えたが為に彼の物になってしまいました。

残念。

しかし、何年か後に、彼はこの石を持って我が家に現れ、言いました。『よければ、これ譲りますよ』！！

かくして、遂にこの石は私の家の棚に収まっています。



[左右 33cm]

## 久 遠

本文で写真35【久遠】として載せています。

拾ったのは又も例の吉根橋下流左岸です。  
これを拾った頃のこの河原には、累々と石がありました。

前にも触れましたが、この石を拾ったあとから採石業者によって石はどこかに運ばれてしまいました。それらの石は恐らく建築の材料になったと思います。

きっと素敵な石が沢山あったでしょうに…。  
この石は切断しています。石の切断をすることで一番困るのは、切断した後の格好が[貧弱に感じる]ようになることです。

切断は欠点の無いように切ります。欠点がなくなると優等生的になり、時にそれは魅力を失うことになるかも知れません。

しかし、この石は好ましい[存在感]を残していて、良かったと思っています。  
正面から見た変化の具合も助けになっています。

これは質が色々混じり合った部分が表に出ているからでしょうが、これら諸々の要素の助けを得て、この石【久遠】は、一人前の[存在感]を持つようになったと思っています。



[左右 11cm]

## ちくほう

京都の九十九会即売場で買いました。

【仙峰】と銘じています。

何年前か忘れていますが、確か、初代会長の長村さんがご存命の頃であったと思います。  
九州から来ておられたお方の即売場この石はありました。

印象に残っていたお言葉は『これは千仏石ではありません。築豊です』というものです。

我々遠くにいる者には何が千仏で何が築豊なのかサッパリ分かりません。

それにしましても、九州には多くの変化を持ち硬質な石が産する場所があるようです。



[左右 22cm]

## 庄内立山

これは庄内川の産です。

肌は瀬田川でいう蟹真黒に似ていて、可成り深く浸蝕されていて、庄内川では滅多に見ないものです。

発見したのは、例の吉根橋下流左岸です。

きつい感じの山ですから、暗雲らしき雲を背景に入れてみました。

何だか異様な感じが出てきて驚いています。

この写真では見えませんが、現物は向かって右下側に逃げ感があり、今ひとつと云うところです。

ここでまたも瀬田川石と比較したくなってきました。全く似たような話題で我ながら呆れ気味です。

この石の肌が何と瀬田川石にそっくりです。

しかしこれがまた皮肉な事にワイヤブラシで擦ってほこりが出ません。瀬田川石でこの手の浸蝕を受けた石を「沢石」と言います。

瀬田のこの手の肌の沢石はワイヤブラシで擦ってほこりが出るのです！



[高さ 16cm]

## 庄 屋

本文写真17【庄屋】として載せています。

このバックに空・雲を入れた写真シリーズでは、山・平野など、自然にある風景を連想する石を扱ってきました。

〔一軒の家〕を連想するこれは変かなあとは思いましたが、試しに入れてみましたら予想以上にきれいに見えたので、大喜びで載せました。

今の若者にこの写真を見せて『なにこれ？』って聞いてみますと、なんの抵抗もなく、大方の人たちが『家』と答えます。

実際にこのような格好の家、つまり一軒家を見る事は殆どない筈なのに、何故これが〔家〕に見えるのでしょうか？

遺伝子に書き込まれている？なんてことは迂闊に言えませんが、今の若者たちにも日本人の何かが流れているらしいと思えて、嬉しくなっていました。

日本に明るい未来がくる気がしてきました。



[高さ 13cm]

## 黙っている

名古屋の書家・高木大宇さんと私が中学・高校と同級生であったことがあり、東海石友会の展覧会に、彼が主宰する会【宇門会】の皆さんが壁面に書の展覧をして戴いていました。

その高木さんの書に[ゆきふる だまってゐる]と言う額縁入りのがありました。展覧されたその書を大変に気に入った私は、これを買いました。

そうしたある日、東京の石の雑誌[樹石]の社長さんの家に遊びに行ったとき、この石を見て[ゆきふる だまってゐる]なのだ！と大喜びして、譲って戴きました。

お話によれば、豊似の石だそうです。

寒い冬空に黙って立っている

寒い？

でも、胸は温かくて

今日もいい天気



[左右 28cm]

## 対 峙

この石は持ってみるととても重く感じます。

質が良いのです。

見た感じでガサツな感じがありますが、それは、粕川石の特徴と思うべきで、質は見掛けによらないものです。

この質の良さは、長い年月で、空気・水などの浸蝕を受けやすい部分が溶けて流れ落ち、石の芯だけが残ってこの格好になった結果を残しています。

私は右に主峰があると見ています。悟空峰もそうですが、そう見ることでファンタジックな風景感にたどり着けます。

山水石は、決して具象的な風景感にのみとらわれているべきではありません。



[左右 21cm]

## 小宇宙

本文写真41【小宇宙】です。

揖斐川町下流に神戸(ゴウド)と言う町があります。ここに歴代、家族で揖斐川石を拾い集めて庭に置いている家があります。

この家の現在の若い主が川で拾った石。  
現状で見ている状態をひっくり返すと、何だか二つ山に溜まり?みたいに見えますが、今ひとつピンと来ません。色々試してこの格好が一番となりました。

普通で予想できない格好で、或る面エモーショナルであるせいでしょうか、展覧会に出品し[石を見るのが初めて]という人に興味を持たれる事が多いようです。

山水石として具備すべきものを上部に持ち、類を見ない卓抜した力を感じる下部に支えられたこの石は、通り一遍の感じで終わりません。

見る人の視線を奪うのは当然です。



[左右 41cm]

## 山原山

私が所属しています、東海石友会石の初代会長さん、山原さんのお庭にこの石は転がっていました。発見したのはお庭の樹木の根っこ。瞬間、庭石？かと思う大きさでしたが、よく見れば水石に絶好の損斐青黒石。

もっと観察しますと、上下で2個の山形石が取れそうです。

山原さんは『良かったら差し上げますよ』と云われます。大喜びで持って帰りました。

その後、切断して2個の山形石が取れました。その中の1個は義弟の新築祝いに、この石は残すことになりました。

この石には川擦れした部分が見当たりません。

普通、川の流れでなだらかな曲線が出来るように思っていますが、この石の曲線はどんな力が働いて出来たものでしょう？

まあ、石とは不思議なものばかりです。



[左右 25cm]

## 天空台

本文写真40【天空台】です。

この石は一見した瞬間に「瀬田川の石である」と感じます。

しかし、瀬田川の何の質かはわかりません。他に類を見ないのに、この石は瀬田川のものと思ってしまいます。

どこかに梨地肌が見え隠れしますし、流れるような線が認められ、虎石のような層も見られます。これらの特徴は、結局この石を瀬田川のものであると認めさせる基になっているのでしょうか。

展覧会に出品しますと、周囲を圧倒する存在感を示します。



[左右 57cm]

## 遼 遠

この石は、本文の最初の話題[逃げ]の説明に使った【遼遠】写真3です。

入り江のような部分を正面に持っていて、アンチ逃げのようなものでしたから敢えて最初に持ってきました。

この手の格好の石は世に数多くあるものではありません。

しかし、この石を大きな展覧会に出品してみて、何とこの石には[存在感]が薄いことに気がきました。私は、石の価値を判断する尺度の一つに[どのような存在感を持っているか]があると思っています。

その観点からすればこの石の価値に或る疑問を感じます。

故に、説明用の石とは云え、最初の石としてこれを採用した事が正解であったか、との思いは残りますが、“逃げ”の説明の端緒に最適であったのでやむを得ないと考えています。

一般に、切断した石は[存在感]が薄くなる危険があります。

それは、欠点のようなものを無くする方向で切断するから、時に優等生になり過ぎて、結果はイメージが固定してしまう傾向になるからと考えています。

恐らく、その石に接した時に、欠点の無い優等生であるより、欠点かも知れない何かを感じさせる結果、イメージが多方向に展開できる石が、恐らく[存在感]を発揮するでしょう！



[左右 30 × 高さ 30cm]

## 天 空

本文に写真43【天空】として載せています。

員弁川石です。本文をご覧になればわかりますが、かなり上背のある石です。  
上部のこの部分だけをこうして切り取って空を入れますと何とも奇怪な雰囲気になります。

日本の風土は平和な感じですが、世界のどこかにこのような風景がありそうな気がするところが不思議です。

風景も天然。石も天然。  
このような奇抜な格好を思い付くことは、恐らく人間には出来ないでしょう。

天然は凄いと思わざるを得ません。



[高さ 30cm]

## 風 神

佐治川の石です。  
1997年に、あるお店で発見しました。

頭のとっぺんが風にふかれて曲がった様子なので【風神】と銘じています。  
佐治川の産とは言いますが、佐治川は探石禁止だとかですから、恐らく千代川で採石されたものでしょう。

現状で佐治川石として通用している石の大方は千代川石であると言われていました。  
古くに揖斐川を中心に活動された坂井(貞亮)さんという業者さんがあり、この人は瀬田川にも出掛けて石の加工の名人でした。

後半は東京で活躍されたと聞かされています。  
この人のせいもあったのでしょうか、石ブーム前、つまり“昭和40年前”の日本では[加茂川石]、[瀬田川石]、[揖斐川石]が一流の産地とされていました。

その後、私の知っている範囲では、石ブーム前後に、静岡市を本拠としてご活躍の業者さんの多くが佐治川に出掛けられ、徐々に佐治川石が有名になって来たようです。  
佐治川石は揖斐川石と類似の傾向の質ですが、現在では断然佐治川石が有利になっています。

しかし、私の持っている【深遠】【悟空峰】などなど、佐治川石に負けていないものが沢山あります。  
この辺りを見直して戴きたく思っています。

さてここで余談を一つ。

### 【〔与十郎石〕の起源のお話です】

岐阜市に行き、坂井(貞亮)さんの末裔氏に直接取材したお話。

与十郎石をご存じですか？

この石の本物は底部切断ですが、上部は天然だそうです。その後この石を模した与十郎石と称する加工石が沢山流通していますから、本物がどこにあるか分かりません。

与十郎石とは、私の【春日野】(この春日野は山々が低い石ですから、本物の与十郎石とは較べものになりません。単に、白い大地の上に風景がある点が似ているだけです)のように下に白い平野があり、その上に山々があるという格好です。

岐阜市に住む坂井(貞亮)さんは、自転車に乗って揖斐川まで通ったそうです。

そしてある日、大きい石の先端に、白い層がありその上に良い格好の山々を持った石を、とある家の庭で発見したと言います。

勿論、買って帰りました。そして、その先端を切断して、見事な山岳風景の石を得ました。

揖斐川で[白い層]がある石とは全く珍しい事です。

でも、私が【春日野】を見つけた庄内川でも、【春日野】以外に白い層を持つ石を見た事ありませんから、どの川でもたまたま[白い層]の石はあるものでしょう。

さて、庭にこの石を持っていた揖斐川沿いにあった家の、  
ご当主のお名前が[与十郎]さんだったのです。  
これが、与十郎石の誕生です！

世に、“与十郎石の由来は不明である”と記されているのを見ます。

また、“最初の作者が与十郎と言われる人が作ったから与十郎石である”と書かれているのを見ます。

これは、共に間違いです。

石ブームの後、松前古潭石(千軒石)の大きい石の先端に、白い層を持ち、青色の山々を持った石の原石を、焼津市の業者氏の工場で見たと記憶があります。

世に言う【与十郎石】とは、こんなものだったのかしら？と思い見ていましたが、これは後に切断されて流通したらしく、石の雑誌に載っているのを見ました。

この石のように、その部分だけは天然であると言うものもありますが、この系統の石で全面的な作りの石を、松前古潭石(千軒石)を材料にしたもので見た事がありますから、天然の石を求める私たちは、一応警戒したほうが賢明でしょう。

坂井(貞亮)さんは瀬田川石にも優れた加工しておられます。

その加工法はこんなものかしら？と云う推測は出来ませんが、確かめようがありませんから、ここでは触れません。

---

さて、ネットで【与十郎石】を検索すると、色々な格好の石が【与十郎石】として出てきます。どうやら[加工された格好の良い山水石]となった石の多くを【与十郎石】と言っている傾向があります。つまり、【与十郎石】なる呼称は、加工されて格好良くなった石の代表的名称として使われていると言えます。

私は、平野部分が「白くなって」いて、その「平野の上に山々がある格好」が、与十郎石として、必要な、又は、基本的な格好であると確信しています。

そこで、こんな格好の石をネット上で発見できないものかと、努力してみました。

Yahoo!で【与十郎石】で検索して空振りでしたが、Googleで検索しましたら、中国のサイトと思われるものの中に、生粋の【与十郎石】らしき石の写真を発見しました。

このサイトは「雅石欣賞-盆景中国……」の表題で始まります。本編で【与十郎石】を見付けることに失敗しましたが、何故かキャッシュをクリックして楽に【与十郎石】にいけました。所有者は【平沢勝栄氏】と書かれています。

あの有名な自民党の政治家である【平沢さん】でしょうか？。

恐らくそうでしょう。

ご許可無しで、ここに掲載することは憚られますものの、この石が、余りに、見事であり、典型的な【与十郎石】ですので、兎も角、ご許可を得る方法を思い付かなく、平沢勝栄さまのご許可は得ていませんが、お叱りを覚悟して掲載してみます。



写真をご覧下されば感じて戴けますでしょうが、この石の上部が、若し加工であったなら、現代で考え難い達人の作です。

加工の達人の伝説は今も語り続けられています。

この石は、それらの一つであるのかも知れません。

いずれにしても素晴らしいものであると感じています。



[左右 28cm]

## 悠 久

本文では、写真8【悠久】と銘じて載せています。

本文に書いていますように、この石は自採です。

河原で見つけた時に、これ程素晴らしい石になると思いませんでした。

日が経つに従い、徐々に色が濃くなり、益々素晴らしいと思うようになってきています。  
この比類ない風景感を評価し、私は自分の自採石の最高位にくるものとみています。

展覧会に出品すると周囲の出品石を圧倒している感じがします。

自採の石とはいうものの、購入の石を含めても最上等グループに入っています。



[左右 49cm]

## 泰山

本文に載せていません。

揖斐の石です。底部は切断していますが、素敵な石と思っています。  
揖斐の石で最高の質は“青黒”となっています。

揖斐の青黒石は乾いた時に濃い緑を基調にしているのが普通です。

しかし、この石は紺色を基調にしている珍しいものです。  
つまり、揖斐の石で他に見たことのない質です。

京都の九十九会で奥の床の間を飾りました。

この2間もあろうかと思える広い床の間に飾り、この石が持つ存在感に、初めてこの石の真価を発見した思いがしました。

底部切断の石が陥り易い[細い感じ]はありませんでした。  
確かに、展覧会に出品して初めてわかる真価もあると私は改めて感じました。

かくして、銘は【泰山】となりました。



[左右 10cm]

## 巖 上

京都の[八瀬]の石であるというお話で、名古屋にあった店で買いました。

小形で左右10センチありません。[さすが八瀬！]という様子で素晴らしい質で、ジャクレなどによる変化も八瀬ならではのものです。

我が家の棚でこの石は小さいが故に目立っていません。

しかしこうして拡大した感じで見ますと、巖上に建てられた茅舎という感じがします。古くに川から上げられた石ではないかと思われる時代を感じます。

私は、盆栽をたしなんでいませんが、この茅舎は盆栽の人に喜ばれそうに思います。現実に巖上茅舎は意外と少ないからです。



[左右 43cm]

## 招 月

本文写真36で載せていますこの石は、この姿勢をイメージして【招月】と銘じたものです。

本文で述べましたようにこの石は[蓬石の一種]とされています。

写真で表面が茶色をしていますが、これは写真撮影時の光線のせいです。実物は黒を基調にしています。

硬度も一流で、叩くと金属音を発します。

一般に瀬田川石は金属音を発する硬度を示すものが多くあります。

瀬田川石はこれらの石のような硬度を持つという理由もあって一流の評価となっているのでしょう。

それにしても、瀬田川の石は、種類が色々あるにも拘らず基本的に硬質、高密度というのは何故でしょう。

さてこの先、2個の蓬石の写真を載せて見て戴き、どの特色で[蓬石]と云うのかを見て戴きたいと思っています。



[左右 45cm]

## 瀬田川蓬山

この瀬田川石も「蓬石」と云われています。

本文の繰り返しになりますが、瀬田川には元々蓬色（緑色）をした石があってそれを「蓬石」と言ったのが最初です。

これらの蓬色（緑色）をした石「蓬石」の多くは変化に富んでいます。

その結果でしょう、変化に富んだ瀬田川石を総称して「蓬石」と云う傾向があります。

ご覧のように、この石の中央部左側の変化の様子は、梨地真黒・蟹真黒・花吹雪などの石とは異なった種類を感じさせています。

実際に、蓬色をした瀬田川石は、次のページの【茜雲】がそれぞれのものです。

これと見くらべてくだされば、納得して貰えると思いますが、主にこの変化の傾向に注目して蓬石の区分けをしていることに注目してください。

この石は、九十九会の初代会長さん・長村さんのお宅の庭に転がっていたものとのこと。これを名古屋の業者・浅井さんが入手して持っておられたのを買いました。

左右43cmで大きめで、好ましい存在感を持っています。ご覧のように素敵な山岳感で喜んでいます。



[左右 36cm]

## 瑞 稜

本文写真21【瑞稜】として載せています。

本文でも触れましたが、この石の黒さは瀬田川石独特の深みを持っています。  
写真で表現できていないのが残念です。

正面見付けやや右に山の頂点から降りてくる稜線があります。  
この降りきった辺りが出っ張っていて、左右が後ろに下がっていますから、左右が[逃げ]になっています。

それにも拘わらず、この石の[逃げ]を気にした人は一人もありません。  
本文で細かく述べたものの、[逃げ]の問題を、まだ説明し切っていないのかも知れません。  
或る言い訳を試みるならば、この石の両端が力強く踏ん張っているかとは言えますが、まずは反省。

一般に[逃げ]とは気になる場合と気にならない場合があり、気になるか気にならないかに注意しましょう。



[左右 13cm]

## 矢合川石 1

本文で、矢合川石が瀬田川石に似ていると書いています。

ある日、この石を持って大津市においでの石愛好のお方の家に遊びに出掛けました。  
そのお方の家にある諸々の瀬田川石と並べてみますと、どことなく違いました。

つまり、似てはいるものの本質は違うらしいのです。

ずいぶん以前に、矢合川石の上部を加工して、ハロゲン水素酸に漬けた後に、ワイヤブラシで擦り  
梨地肌を出した石を、何とかいう名前の業者氏に差し上げたことがありました。

ある日、とある台製作専門家の作業場に、この加工石が瀬田川石として持ち込まれているのを見ま  
した。

瀬田川石は厳然と瀬田川石ですから、矢合川石が瀬田川石と似ているにしても、瀬田川石と云われ  
るなんてことはあってはいけません。

業者氏に渡したことを反省しています。



[左右 19cm]

## 矢合川石 2

本文に書いていますように、矢合川に流れ込んでいる小さな支流をのぼった時に、その支流が藪の下部をえぐって流れていて、えぐられた断面に累々と石が重なっているのを見付けました。

この場所は、川の右岸で本流と合流しています。その合流点にお墓がありましたし、本流に橋も架かっていました。

東海石友会副会長をしておられた各務孟司さんとも一緒に入った事があります。土中に永年埋まって重なっていた石たちは、全て過去に川擦れした痕跡を残しています。その重なった石の中から見付けたものです。

見付けたときは白いような色をしていましたが、持ってみると重い感じがしましたし、肌の感触が梨地肌を感じさせていました。

その上、この秀抜な格好でに魅せられ、迷わず持って帰りました。

ワイヤブラシで擦りましたら、沢山ほこりが出てこの様子の真黒山形石を得る事になりました。

幸運に感謝です。



[左右 17cm]

### 矢合川石 3

この石の梨地肌は、瀬田川石に似ていると言うより、庄内川の梨地肌に似ていると私は思っています。

何故ならば、これも土中から掘り出した物なのに、ワイヤブラシでほこりが全く出なかったからです。こうなりますと、矢合川には、瀬田川石に似た質の石と庄内川石に似た質の石があると言う妙なことになると思います。

例のハロゲン水素酸に反応する物質はどんなものか興味が出ます。

さて、写真に見られるように、先ずは文句ない山形石ですが、背面の右奥が出っ張り気味で、何だか落ち着きません。

本文の逃げの項目で[人は風景に取り巻かれている]と言う感覚が基本にあると表現をしましたが、[風景に取り巻かれている]感覚は、石の向こう側(背面側)にまで及ぶものらしいとなります。

であれば、逃げのない石が望ましいとする姿勢は、石を好む者として思いのほか大切なものと言わざるを得ません。

お互いに、心しましょう！



[高さ 21cm]

## 矢合川石 4

九十九会創始者の故長村資佳さんの石【雲の平】に魅せられて以来、(土坡)立ち石に興味津々の私です。

現在、2個の(土坡)立ち石を持っています。

本文 ●立ち石 の項目で取り上げました庄内川石とこの矢合川石で、ともに何故か自採です。この石は、川にあった時に、既に何故か古びた様子が感じられていました。

家に持ち帰り日時が経つ間に、益々古びた様子が出てきて、何十年も前から家にあった石のようになりました。

この[古びた感じがする]のことを[時代が付いている]と言っています。

私が石を始めた頃、ある業者氏が『時代とは人の汚れなのだ』と言われたのを聞いた事を思い出します。

本来、無機化合物である石の表面が古びてくる出来事を、或る物質が付着した結果であるとすれば、多くの場合それは有機化合物でしょうから、あの業者氏の発言を否定し切れません。

さて、時代とは？



[高さ 14cm]

## 矢合川石 5

以前、中村東鶴さんと言う卓越した愛好家がおいでになりました。

当時の[愛石の友]に、優れて印象の深かった文章を書いておられたお人で、何時の日にか『石を止めます』と云われ、消息を絶たれました。

この人の【光悦】と銘じた瀬田川石が掲載された事があります。

この石に私は魅了されてしまいました。

【光悦】は立ち石で、上がまっ平。

下に行くに従って小さくなっている、という立ち石の典型のような格好のものでしたが、天井は真っ平らで素晴らしい瀬田川の独特の川擦れに、高貴ですらあって、具象的でなく、さりとして抽象を意図されたものでもなく、【光悦】の銘と共に深い印象を残しています。

この石は、憧れの【光悦】を求めていた結果得られたものです。

もちろん、中村東鶴さんの【光悦】に及びもつきませんが、私はこの石を得られただけで、もう十分に満足できています。

この石は、茶色を基調にして新しい川擦れはなく、品位に今ひとつでしょうか。



[左右 26cm]

## 矢合川石 6

拾った状況から見ても、この石はとても長く川底の土に埋まっていたようです。

主峰の右側に軟らかい曲線があります。左に降りてくる曲面は実に柔軟です。

前にも書きましたが、この矢合川は雨期以外は、まことに緩慢な流れしかありませんので、瀬田川石のように急峻な流れで石に曲線・曲面が出来るとはとても考えられません。

しかし、矢合川石No.1・矢合川石No.2と、この石のような石が現実にあるということは、これが出来るために、太古のこの辺りに急峻な流れの川があった、と考えるべきです。

つまり、最近に割れた石でない石ならば、全ての石たち全員が太古を経験しています。そんな太古を経験し、私の家に来てくれたこれら石たちと一緒に暮らせるのは幸せです。

なにしろ、私たち人間の生涯はとても短いですから…。

# 水石、山水石へのお誘い

2012年8月発行

---

著者：本多忠三

〒464-0067 愛知県名古屋市千種区池下1-4-15 川辺318ビル10F  
TEL.052-762-0251

---



水石、山水石へのお誘い

